

---

# 高校生のリリカル爆走

建宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校生のリリカル爆走

### 【Nコード】

N0284X

### 【作者名】

建宮

### 【あらすじ】

死因は何だったか・・・そう確か女の子が車に轢かれそうだったから助けた時・・・ではなくそのあとに助けた女の子から全力で拒絶されてフラッと道路に出たらバーンとかだった気がする

## プロローグ

一言で言うなら俺は転生者。そして此処は大自然

「なんでさー!?!」

（この発端は数十分前）

「お主は死んだ」

「はいはいはいい・・・はい?」

目の前の爺さんはそんな言葉から会話を開始した

普通はもっとなんて言うか。せめて初対面なんだし挨拶くらいはしようよみたいなさー

「混乱するのも無理はない。が起きてしまったものは仕方ない」

「仕方ない。ああ、確かに起きたもんはしゃーない」

「じゃろっ? 例えそれがワシのミスでも仕方ない」

「そうそう、例えお前のミスでも仕方ない」

「じゃろって、んん?! 待て! 待つんじゃ! 言ってる事とやってる事が!」

俺の脳内ではキチンとそう処理したのだが体はそうも処理してくれなかったようだ

俺は無意識の内に爺さんをボコボコにしようとして動いていたらしい

「まったく最近の若いもんは」

「るさい、で? あれ? よくある転生系か?」

「うむ、説明が早くて助かるのう」

確かに若干オタク気味の俺としてはこのシチュエーションは嬉しいが!!

シヤナ三期を見れない内にポツクリ行くのは思いのほかイライラする

「あと二、三発くらいは」

「駄目に決まっておるじゃろう」

「駄目か」

「駄目じゃ」

そこまで言うなら仕方ない

「考えてる事とやっている事が違う?!?!」

どうやら俺は余り諦めの良い方では無いらしい

「だとするとアレか。今度は転生特典か」

「そうじゃ、お買い得じゃぞ」

殴った所が多少腫れている爺さんが何かトランプ的なカードを数枚取り出す

「お買い得ねー」

「そうじゃぞ?この中から好きなカードを選ぶが良い」

「好きなカードねー」

悩むなー……ん?これってハズレとかあんのかな?それだったら

マジやだなー

まー転生ってこのシチュだけど十分アタリなんだろうけど

一枚か

「これだ！」

「ちょ！お主！」

悩みに悩んでブリッジ体制までして悩んだ結果

俺は全てのカードを鷲掴みしていた

「……。」

「……お主い」

爺さんは俺を残念な物を見るような目で見る

「こつち見んなキモイ」

俺は結構強欲らしい

「全部取る奴があるか？」

「す、好きなのって言っただろ！誰も一枚とは聞いてない！」

まるで子供の言い訳を言う俺は高校生

「まーあーそうじゃのー」

「み、見るなやい」

「まーいいわい。ーっって言い忘れたワシのせいでもあるよっじゃし」

心が広い爺さんに心の狭い俺は精神的ダメージをくらう

「では特典も決まった事じゃし、さっさと送ろうかの」

「っっそ言えば俺は一体何処に飛ばされるんだ？」

「ん？惑星」

「大雑把過ぎる?!」

よくある様に足元に穴が開く

がかしい！予想していた俺に避けられない物は無い！

横に軽く跳ぶ

「がそれもまたお決まりの行動じゃよ」

穴があつた

あげくに落ちる瞬間に見えたが最初に開いていた穴の周囲全てが穴だらけだった

用意周到な爺さんに驚き

くで現在く

「惑星・・・か」

ある意味悟りを開きそうな俺

惑星って括りは広すぎるだろうが。・・・まあ森があるんだから生物がいるのは確かなんだろうけど



「お腹すいた」

ここは野生的にサバイバルでもしょうか

ああ、でも俺。雑草や木の実の知識とか知らんから何が食えるか分かったもんじゃねえな

「いつそ次に出会った動物を特典能力でブツチして食べるか」

またもやお決まりでガサゴソと音がして草むらから何か飛び出す

「よっしゃー！食べ物ゲットオオオー！！」

「た、たべ？！わたしをたべちゃうのお？！いやああああー！！」

草むらから出てきたのは少女だった

しかもスツゲエ美少女だった

やっべ、食べる話・・・どしよ？

## プロローグ（後書き）

始めました転生モノ！転生系は初めてですから妙な所もあるでしょうが気長に見てくださいねっ！

一つ一つの文字数は少ないと思います！  
では次回！

一話／side 雨水／

前回のあらすじ

俺、お腹減った 草むらから何かが出てきた！ 草むらから美幼女が現れた！ 勢いで食べる発言 美幼女、恐怖 そして現在

「お、おいしくないですよお」

「う、うん。ん？いやむしろ美味しそう？」

ジュルリ

「ひょー」

□□□□！ペドZNO！

「はっ！」「めんめん、ちょっと道に迷っちゃってー」

「まいじゃん？」

「そうそう、行くあて無しの迷子さんなんだよね。アハハ」

「かえるおうちないの？」

美少女は恐る恐る俺に近付き会話のし易い位置で立ち止まる

食う発言はチャラにしてもらえたようです

「無い！・・・かな？」

此処は日本じゃなさそうだし仮に日本でも前の家が存在してるとは限らない。ってかそもそも家があったとしてそこに俺の居場所は無いかも

・・・ん？待てよ

いまの俺ってホームレス？

「わたしとおんなじ」

まさかの衝撃発言

こんな美少女が俺と同じくホームレスとは・・・危険だ！

「なら一緒に行こう」

男は狼！男は獣！男は・・・んーと。そだ、男はスケベ！よし三拍子揃った

「いいの？」

「もちろん！」

「うふあ」

「ん？」

「うううああああん！！！！」

何故か泣き出してしまった。女の子って難しい・・・じゃなくて

「ちょ！え？！なに！俺悪い事でもしちゃった？！」

「あう、ふええちがうの。わたし、うれしくて」

何だか純粋な子供の心を見ると・・・真つ黒な大人は酷く傷つく

「くっ！これは強敵だ、深く抉ってくるぜ」

「だ、だいじょうぶですか！いや！しんじゃあー！」

いや、心の傷ですから肉体的には問題無いです

そんなこんなで美少女と一緒に旅をする事になりました

「あ、これはたべれますよ」

「ほんと？サンキュ」

「いえ」

美少女の前に住んでいた家はこの辺らしくこの辺の動植物にはとても詳しくかった

ついでながら驚く事に美少女はファンタジー生物まで持っていた

「キュクルウ」

ドラゴン（幼態）である

「毎度美味しそうだな」

「な！フリードはともだちです！」

美少女は俺からフリードを遠ざける

別に本当に食おうとは思ってないの……いまは……

最初はマジで非常食と考えていた

「それにしても俺達は一体何処を目指して歩いているんだろう」

「さあ？わたしもむらからは、でたことありませんでしたから」

とは言え一定の方向に向かって歩いていけばその内、森脱出は出来るだろう

「ギャオオオオ！！」

「見てない見てない」

「りゅうしゅ？！なんで！！」

「知らない知らない。俺はあんな表現し難いのを竜とは認めない。リオレウスくらい持ってこいバーカ」

目の前の形容し難い竜種さんは明らかに涎を垂らして俺等を見ている

「ね、ねらわれてせんか？」

「キャラ、良いか？良い事を教えてやる」

「はい！なんですか！雨水さん！」

初名前登場。美少女ことキャラ・ル・ルシエちゃん、俺こと雨水秋春・・・あれ？俺だけ名前でキャラは俺のこと苗字で呼ぶんだ

「耳を塞げ。目を閉じる。さすれば新たな道がひら

「ひらきません！しぬきですか?!」

セリフの途中に割り込まれた

「ガウガー!!」

「そだ！フリードがいた！」

「むりですって！フリードはまだこともです！」

そうか・・・なら仕方ない



「逃げよう」

「さんせいです」

一、二、三

「走れ!!」

「ガグルガアアアアアアア!!」

「おつてきてますよおおお!!?」

大丈夫。俺等はまだ死なないはず・・・たぶん・・・きっと・・・  
だよな?

一話〱side 雨水〱(後書き)

じゃじゃーん！連続投稿！大した意味は無いし書ける内に書いちゃ  
つとけー！的な勢いです！

次回もお楽しみあれ！

二話〱side キヤロ〱

私の村は古くから召喚魔法を継承していた小さな村だった

その村で私は小さい頃から大きな力を持って、その力を恐怖され追い出された

私は村から出てすぐにどうしようかと森を彷徨っていると雨水さんに出会った

初めは変な人と思っていたけどとっても良い人で面白い人

「ほんとうにであえてよかった」

「ちょ！キヤロ？！そんないまにも死にそんなセリフ吐かないで！」

「？」

私は雨水さんに手を引かれ竜から逃げる

もっと私が召喚魔法を上手く使えてたらこんなのヘッチャラなのに

「あ！そだ！」

「どうしたんですか？！」

「特典があつた！」

「とくてん？」

雨水さんは私を草むらに隠すと竜と向き合った

「さあ！やってやんよー！」

・・・。

あれ？

雨水さんは構えた状態でダラダラと冷や汗を流し始める

「使えねえ」

「え？」

「が！しかない！そこで諦める俺では無い！」

痺れを切らして竜が雨水さんを襲いそうになった瞬間、バツ！と手を前に突き出して竜を止める

「なにを」

「良いか！竜よ！」

「グルウ？」

「このお方を誰と心得る！」

「わたし?!！」

雨水さんは私を竜の前に突き出すと私を堂々と竜に紹介する

竜は当然此方の言葉は分からないので首を傾げている

「このお方は村一番のお偉いさんの娘！」

「ちがいます」

「お前も竜の端くれならその意味が分かるだろ！」

「たぶんことばつうじてませんよ?」

と思ったのだけどビクッ！と竜は振るえ後ずさる

「キャラの村はお前から竜の長と代々交流してきた村!・・・たぶん

「あ、それあってます」

長って言うか、この辺の守り神なんですけど

「だからお前！もしこの娘を襲おうものなら！お前から長が黙ってないぞー！」

「あれ？それだと雨水さんが・・・」

「え？」

ほら、竜が雨水さんを標準付けちゃったよ

「あれえ？なんでえ？」

「さあ？」

「竜！キャロに免じてこの場は譲ってやるっ！」

「なんでえらそうなの？」

「グルウグルウ・・・ウ？」

竜は少し考えれる仕草を見せると背を向けて歩き出した

「よっしやー！」

「すごい？のかな？」

こうして私達の危機は去った

「さて！今日は此处で寝よう」

竜に追われたせいで折角真っ直ぐ行っていた道も分からない状態になり夜も遅くなってしまったので洞窟で一晩過ごすことになった

「ふっふーん」

男の人と一緒に

いやいや、そんなの村でもよくあった。うん、あったはず。．．．  
あったっけ？

「あーそうだー。キャロー」

「ひゃいー！」

「なに慌ててんだ？・・・まあ良いけど、奥になんか湯が沸いてたからそこで体でも流してきたら？」

「あ、ありがとうございます」

行く？うん、お礼言った以上は行かないと

私は奥に進んでお湯の沸いている小さな湖の淵に来る

後ろを振り返るとギリギリで雨水さんの背中が見える・・・つまり雨水さんからすれば後ろを振り向けば私が見える

「わたしはごども」

そう自分に言い聞かせて服を脱ぐと湯に浸かる

「湯加減どうだー？」

「キユクルウ？」

「あひゃへいひゅい！？」

「なに言っているんだ？」



雨水さんがフリードを頭に乗つけた状態で洋服を畳んでおいた辺りに立って私を見下ろしていた

「溺れてないか不安だったがどうやら足の付く程度の深さだったみたいだな」

私を心配してくれたらしい

「にしても」

雨水さんは目を凝らして私の体をジックリと見る

「んー」

「なんですか？」

「怪我は無いみたいだ。森の中を走ったから擦り傷くらいは覚悟してたんだが」

「ええ?! そっちですか?!」

女の子としては少しは気を使って欲しかったです

「？」

雨水さんが完全に私を子供扱いしている事を肌身に感じました

二話〱side キヤロ〱(後書き)

さっそくチートかもな特典披露?!と思われましたがこの主人公!  
チートだけど早々楽しんでチートにさせる気はありません!

以上!

あ、誤字等ありましたらご指摘下さい

### 三話 side 雨水

前回の失敗により俺の爺さんから貰った転生特典が判明した

それは全部で六つ

説明は面倒なので簡略化させてもらう

一つ、万物は全て数字で語れり。

これは世界のありとあらゆるモノをステータス化して視覚情報として取り入れれるっぽい

二つ、天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造った。

カリスマ性の向上、良く分かんが生物を纏めるのが上手くなったらしい

三つ、我が後ろに道が有りけり。

他人に教える事がとても上手くなったらしい

四つ、全ての事象を観測する者。

ようは単純に物覚えが良くなったらしい

五つ、若き日の思い出、老い日の勇姿。

何でも年齢操作系の能力らしい、自他ともに可能と

六つ、白紙不明

唯一真つ白のカードで何がしたかったのかサッパリ。もしかしたらこれはハズレくじの可能性あり

総合的に判断して・・・戦闘に使えるそうなのが無かった、と言うか  
爺さんのネーミングセンスにビックリだ

厨二病も真っ青な痛々しさ

まあジツクリ考えれば使えそうなんだろうけど咄嗟に使えるのは皆  
無だった

「うすひさぁん」

さて現実逃避もこれが限界か

幾ら美が付く女の子でも幼女に手を出しちゃ駄目

幾ら隣に寝ているキャラの寝顔がとても可愛くても人間我慢が大切

「クルウ？」

「おう、フリードか」

先程からフリードが俺の服を噛んで何かから引き剥がそうとしている

「あふ、あん、ふぁ？うすいさん？」

「おはよ、キャラ」

「・・・ちかい」

恐ろしい事に何時の間にかにキャラ口を抱き着いていた

あれ??マジでいつから??

「ハハハ、ごめんごめん」

「・・・。」

色の無い瞳でキャラ口はジトーっとな俺を見つめる

やめ！そんな目で美幼女から見られてると何かに目覚めそう！

「まあいいです」

「はあ」

許して貰えたところで朝食

何か食べそうな薬草と木の実。正直肉や魚も欲しいがホームレス生活なのだから文句は言えまい

「マズッ」

体は正直

「がまんしてください」

「キャラは平気なのか？この味」

「えいようあるんです」

「いや味の話を・・・」

「えいようがあるんです！」

不味いと思ってるんだな

我慢強い子だな、お兄さん尊敬しちゃうっ

「早く人の住んでる所に出て仕事探さないとな」

「ですね」

「止まれ！此処は保護観察区域で関係者外は立ち入り禁止領域だぞ  
！」

何処からか声がした

俺とキャラロは周囲を見渡すけど誰もいないので空耳として処理

「疲れてるんだろっか」

「そろそろきゅっけいします?」

「キユクル」

その場で休めそうな場所を探し飲み水を取り出す

「つて！貴様等！話を聞け！」

「キャラロ、ごめん。俺ちよつと寝た方が良いかも」

「わたしもです」

「キユクツ！キユクツ！」

ん？どしたフリード？



上？

・・・上

人が空を飛んでいる、飛ぶって言うか浮くだなアレは

「キヤロ、あれなに？知り合い？」

「かなりきよくのかたでは？」

「管理、局？」

何の管理だろう？

「ようやくか、でだ、貴様等そこで何をしている」

「休憩」

「きゅうけいです」

「キユクルウー」

カチツとスイッチを切り替えるような機械的な音がして視覚情報が  
変わる

時空管理局自然保護隊 魔導師ランクC 飛行魔法使用中 敵意無し

必要な情報を必要なだけ確認する、でない则表示情報が多過ぎて面倒。全力で見ようと思えば人としての構成情報まで見えてくる

お？意外と使える能力の予感！

「あれだな。動物愛護団体の人だ」

「どうぶつ、あい・・・だんたい？」

キャラには少し難しい単語だったようで途中を省いて発音した

「此処が立ち入り禁止区域と知っているのか」

「知らん」

「へえ〜はつみみです」

「キュー？」

「・・・そうか。此処は立ち入り禁止区域なんだ、なので外に出て欲しい」

「案内を頼む！」

なんだかなーと言った感じで局員の方は此方まで落ちてきて道案内

をしてくれた

え？此処って就職出来そうな場所が無いの？

三話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

およそ1500〽2000を目処に書いてます！

にしても特典能力名。我ながら痛々しいネーミング！アハハ〽

四話〈side 雨水〉

前回のあらすじ

起床 キヤロ枕の抱き心地が良すぎる キヤロに冷めた目で見られる 何かに目覚めそう 朝食 マズッ 職を探して放浪 人が空から声を掛けてきた 道案内をしてもらう 此処一帯に就職出来そうな所は無いですよ どのよ？

「でー」

動物愛護団体モドキの人達の所にお世話になる事になった

「う・す・いさん？」

「おっと手を動かさないとな」

「そうですよっ」

キヤロに促されて食材を切っていく

俺等の仕事は料理担当

「ん？キヤロは結構手付きが良いねえ、将来は良いお嫁さんになり

そう」

「えっ?!あ、あう、わ、わたしはつすいさんの」

「キャラ?！鍋が!」

「え?あ!すみません!」

危ういところだったが如何にか間に合い難を逃れる

そしてやっぱりこんなキャンプみたいな所での定番。カレーを完成させる

「たんと召し上げ!」

「おおっ!スゲエな!お前等!」

「ほんとお美味しそう」

ちょうど団体が帰ってきたので配膳を行なう

「そいや、お前等ミッドには付いてくる気あるか?」

「ミッド?」

「首都だ、首都」

首都かー、それなら就職先は多そうだ

「行く！行くこう！今すぐに！」

「今は行かねえよ。こっちの仕事が終わってからな」

「チツ役立たず」

「んだとっ?!」

「けんかはだめですよっ!!」

「はい」

何故か俺だけおたまで殴られた

キャラが団体の女性に囲まれてドンドンと強くなっていく・・・

「ふうー腹一杯」

「ですねー」

「キュツクー」

食事も終わり、今度は食器洗い

「おう？何だお前等、仕事熱心だなー」

俺等を道案内してくれた団体のおっちゃん

「どした、おっちゃん。こっちに何か用か？」

「様子見だ。様子見・・・にしてもお前等、なんか夫婦みたいだな？兄妹だっけ？」

「ふっ！ふうふ！ですか?!」

「違うぞバカヤロー、俺とキャロは・・・ん？旅仲間かな？」

「なんだそりゃ」

「わ、わたしはふうふが・・・」

え？なんだって？

「そうそう、伝えとこうと思ったんだがミッドには四日後に行く予定だからな」

「そうか、サンキョおっちゃん」



「おう！」

良い奴だな、おっちゃん

二日後

事件が起こった

まあ俺にとっては大した事件でも無かったはずだし関わらないつもりだったのだが

「おらあ！お前ら動くなよ！動くとコイツがどうなっても知らねえぞ！」

「雨水さん！助けて！」

「黙れ！」

相手はこの辺一帯を荒らす密猟者らしい

愛護団体の皆が追っていたのだがこのキャンプに入られ偶々居合わせたキャラを人質に取らってしまった

「クソッ！」

「チツせめて戦闘に向いた特典があれば」

向こうは武器持ち人質持ち

密猟犯罪組織末端 魔力ランクD 敵意有り 所有魔法はプロテク  
トとシューター

・・・組織？

「おっちゃん。もしかしてコイツって仲間とかいる？」

「ああ?! いないはずだが・・・」

「キャラ口を無事に取り戻す方法か」

戦力的には余裕で勝っているがキャラ口を楯にされている以上はそうも言えない

しかも、もしかしたら近くにアイツの仲間が潜んでるかも

最悪だ

「密猟者！聞け！取引がある！」

「な、なんだ！」

かなりの焦っている。味方が居るならもっと余裕に構えて居そうだが、  
けど居ないのか？捕まりそうだったから切り捨てられたとか

「その子を放せ！そうすればお前の条件を何でも一つ叶えてやろう  
！」

「信じられるか！」

「ん？だがいまのお前の状況はかなり悪いぞ？逃げるにも此処はお  
前にとって敵の本拠地、既に囲まれたようなもんだ。逃げるのはま  
ずもって不可能」

「・・・へへっ、そんなのこイツがいれば」

「ひい」

持っていたナイフをキャラの首に突きつける

マジでアイツ追い詰められてるよ・・・思考も鈍ってるみたいだし  
交渉がし難い

表情に出さずに悩んでいるとおっちゃんは何やら俺に目で合図

うしろのくさむらにひそませている

成る程、このまま俺に犯人の注意を惹きつけて置いて欲しいって事が

「そいつが居れば何だったんだ？」

「あん？」

「もしお前がそいつに危害を加えたら本当に歯止めが切れてお前は  
終わりだぞ」

「くっ……い、いいのか！お前は！コイツに消えない傷が付いて  
も」

「ハッ！別に良いに決まってるだろ、勘違いしてないかお前は俺と  
そいつは他人で更に言えばそいつは別に此処の自然保護隊の関係者  
でも無い。この意味分かるよな？」

犯人は苦い顔をするがキヤロは放さない

……まだか

「良いんだぜ？ほら、やれよ」

「……雨水さん」

「ほ、ほら！良いのか！コイツもお前に助けを求めてるみたいだぜ

！  
」

「誰も求めた結果が手に入る訳じゃねえよ。いまのお前みたいに  
な」

「な・・・マジかよ。コイツ」

警戒が緩んだ

そう感じた瞬間に犯人のナイフに光の縄みたいなのが幾重にも絡ま  
り取り囲んでいた保護隊の皆で犯人を取り押さえた

これで犯人も捕らえキャラも無傷で取り返す事が出来た・・・だけ  
どキャラはそれから簡易テントに引き籠もった

四話 〱 side 雨水 〱 (後書き)

主人公は高校生くらいの思考力で考えれる説得で敵に挑みます

なので正直、いやいや相手も色々覚悟してんだしその説得で如何に  
かなる訳ねえだろと言つ話が持ち上がりますが・・・まあ追々と説  
明するつもりです

五話 〱 side キヤロー

私を助ける為だったって事は分かってる

「キヤロー！ごめんってー！ほんとあんときはアレが最善だったんだってー！」

簡易テントの外で雨水さんが私に謝っている

私を助ける為だったとは言えあそこまで言われるとは思ってなかった

雨水さんと私がなんの関わりの無い他人だなんて言っただけで欲しくなかった

私達と仲良くしてくれた保護隊の皆と関わり無い同士だなんて言っただけで欲しくなかった

「キヤロー！お腹すいてるでしょー！ご飯あるから出ておいでー！」

更に言うなら食べ物で女の子を釣ろうとする雨水さんの根性が納得できない

私はそんな食いしん坊じゃないです

「いません！」

「え？いらない？キャラに食べて欲しくて愛情込めたのに」

「食べます！」

・・・あ

したり顔の雨水さんがオムレツを持って私の目線に屈んでいた

「うんうん、やっぱりキャラには食べ物だなー」

馬鹿な私を憎みます

目標のミッド行きの日

あれから仲直りをしたとは言え雨水さんも負い目を感じているようで一つだけ何でも出来る限りのことをしてくれと約束してくれた

「ありしたー！」

「ありがとうございました！」



「キョクルー！」

「おう！何時でも遊びに来いよ！」

私達は保護隊の皆に別れを告げてミッドで雨水さんの就職先探しの旅を始めた

「これより！局員認定試験を始める！」

「はい！」

料理屋。ホテル。一般企業。様々な所を巡ったが私と言う荷物持った雨水さんを雇ってくれる所は見付からなかった

そして私達は保護隊の皆を思い出して局員になってみようかと考えた

「まずはデバイスの起動！」

「セットアップ！」

「え？デバイス？ああ、さっきのかセットアップ」

私と雨水さんは局員の服装に変わる。たぶんセットアップ時の初期設定なんだと思う

雨水さんは驚いている。そう言えば雨水さんは魔法を見る度に驚いていた・・・あれ？もしかして魔法を知らないんじゃない

「次！射撃魔法！」

「はい！シュート！」

「んん？成る程、やっべMPが足りませんかとか出そうだ。シュート！」

ポスンと音がして雨水さんの魔力弾は消えた。魔力弾の形成に失敗したんだと思う

「・・・次、儀式魔法」

「え？儀式魔法ですか？！」

「はい、小規模でも構いません。これはランクを決めるテストなので」

「はい」

私は詠唱を始める

横目でチラッとだけ雨水さんを見ると何だか壮大な呪文を唱えていた

・・・ただし魔力が全然通ってなかったけど

その後の色んな事が続く

「以上！終了です！」

結果

雨水さん 魔導師ランクF 非戦闘員 一般局員

私 魔導師ランクC レアスキル持ち 三等陸士

あれ？役職上では雨水さんを超えちゃった

「戦闘外要員って訳か、まあ別に戦闘したい訳じゃないから良いかな、キャラ口三等陸士殿」

「雨水さんのいじわるっ！」

敬礼した雨水さんは何だか遠く思えた

私達が管理局入りして早一週間

本当早いな。私の召喚魔法はまだ未完なので戦闘では役立たずだけどデスクワークなら慣れたから結構イケてると思う

「よ！キャロちゃん！あれ？雨水は？」

同じ部署で仕事をする人達はもう気軽に私達と話してくれる

「雨水さんですか？さ、さあさつきお偉いさんと会ってくるって出掛けましたけど」

「お偉いさん？ああ、アイツ情報整理や講師だけは得意だからな」

「そうなんですよ。雨水さん本人は他人任せ嫌だなーとか言ってますけど」

「ハハッ、確かにアイツは教えるのは得意だけど自分はよええからな」

「む……。」

「お？っとなぞ覗まんできて悪かったってキャロちゃんの彼氏

は強い強い」

か、彼氏?!

いや私と雨水さんはまだそんなんじゃない。まだ、そう、まだだよ!

「アツハハハ、ほんとに可愛いなキャロちゃんは。キャロちゃんはウチの部署の花だよ!」

雨水さん遅いなあ・・・今日は一緒に帰れるかな?

五話 〽 side キャロ 〽 (後書き)

行き成り訳の分からない技術の魔法を使用しろと言われても当然不可能な主人公でした

## 六話 〱 side 〱 雨水 〱

前回のあらすじ

仕事搜索 特に秀でた物の無いので中々受からず 仕方ないので局員になってみよう 魔力はあったが魔法は度下手 まあそれでも戦闘だけが仕事では無いので非戦闘要員として採用 デスクワークは初体験（高校生ですから） 中々不慣れだが万物は全て数字で語れり（痛々しいので自分では観察眼と呼称）を使いロストログア専門の情報整理担当就任 我が後ろに道が有りけり。（一々痛々しいので講師の才と呼称）が何処かで発揮されていたのか何と無くアドバイスを聞いた偉い人がスカウトしてきた でいまの生活に至る

「 たっ だいまー! 」

現在俺は局の独身寮に住んでいる

まあ節約だわな

「 おかえりなさい! 」

「 キュック! 」

エプロン姿で出迎えてくれるキャラ口を見ると何時もながら感激してしまいそうになる

最近少し背が伸びたらしいし幼女扱いは悪いかと思うので今度から美少女と称そうと思う

とにかくこんな美少女がエプロン姿で出迎えてくれるなんて隣の同じ独身寮に住む同僚から唾を掛けられそうだ

「料理中だったか？って言うか今日は早いな」

「ん、ちょっと」

キヤロが一瞬だけ暗い顔をしたのを俺は見逃してはいなかったが今は放っておこう

美少女の料理が先だ

「あの、すこしだけ話をきいてくれますか？」

「料理が先だ」

「ええ?!」

あ、口に出す言葉じゃなかった

人間は誘惑に弱い生き物だと信じて疑わない！



「もう！雨水さんってば！」

「あははー、ごめんごめん。キャラの作ったご飯の匂いが凄い誘惑で」

「はあーなら食べながらでいいですから」

「うん」

俺が箸を進めるとキャラは俯いた状態でポツリポツリと話し出す

キャラよ・・・魚の目玉の部分をそうグリグリとしないでくれ・・・  
ちよっとグロい

「じつは、今日もフリードの竜召喚をしっぱいしちゃいまして」

「ふえーひっはい、ほれはひゅごい（へー失敗、それは凄い）」

「ふざけてます？」

「ふえんふえん（全然）」

「食べるかしやべるかどっちかに」

「。。。。。」

「喋るほうにせんねんして下さい」

え？せっかく食べる方を選んだのに・・・

って言うかさつきは食べながらで良いって言ったよね？

「そつだ！雨水さん！わたしに魔法制御をおしえてください！」

「ふえ？ふぁんで？（え？何で？）」

「まだ・・・いい加減にしないと、フリードが火をふきますよ？」

「ん？！んぐつ・・・ゴホツ、ごめんごめん、キャラのご飯が美味しいから」

「なら許します。つぎはないですけど」

やっぱり褒められるのは嬉しいのかな？

それからキャラがこれまで悩んでいた事を打ち明けられる

キャラのあんな泣き顔を見たのはたぶん始めて。俺はそんな急激なシリアスに耐え切れず

「フリードおお」

無言を貫いていたフリードに助けを求めた・・・アツサリ裏切られたけど

なんとフリードは俺とキャロと一度ずつ見て食事を再開した

「すみ、すみません！こんな、めいわくかけるつもりじゃなかったんですけど」

「気にすんなって」

「きいてくれてありがとうございます」

「おう・・・飯、冷めたか。まあ美味いから良いけど」

「あ、あた、あたたためましゅー！」

ん？今更な気もするし冷えてても美味しいんだけどなー

「噛んだキャロ萌えー」

「フリードやつちやって」

「キュクー！！」

フリードの口からギャグを通り越した火力の炎が飛び出した

こんがり上手に焼けました？

最近キャラ口の俺に対する扱いが若干乱暴な件を一体何処に相談した  
べきか考えながら先生と呼ばれるのも慣れた今日この頃

「良いか？キャラ口、そもそもお前のフリード制御ミスは技術面では  
なく精神面が弱いせいだ」

「はあ」

「でその強化を図ろうと俺は考えているんだが当然策はある」

「たよりになります！」

「おう！」

俺は昨夜の内に纏めておいた資料と訓練メニューを渡す

この時の俺は講師の才を完全に舐めていた

六話 〱 side 雨水 〱 (後書き)

原作よりキャラ口が少し強くなります

七話 side 雨水

前回のあらすじ

寮帰宅 キヤロ可愛い 美少女から美少女にランクアップ キヤロ可愛い 魚の目が放送禁止な感じに キヤロ可愛い 相談を受ける キヤロ可愛い フリードに焼かれる キヤロかわ・・・ キヤロに講師開始 で・・・

「後悔先に立たず」

「あははっ 秋春！おもしろーい」

目の前にはキヤロ似のナイスバディのお姉さんが立っている

この状況を作った原因は俺にある

ほんの些細な事だった

特典能力の一つ。若き日の思い出、古い日の勇姿。（年齢操作と呼称）を試そうと思ったただけだ

そして身近な実験台がキヤロだったただけだ

「えと、キヤロ・・・さん？」

「ん？どうしたの？秋春、変な物でも食べた？」

近ツ！近い近い

こんな美女に迫られるなんて想像もしなかった

ってかキャラ口って成長したらこんなんだ

「なるほど、年齢操作は肉体だけでなく精神も成長させれるのか」

「ん？つと言つか秋春ちょっと若くなった？」

「お前が年老いたんツ！」

殴られた

しかもグーで

「あ・き・は・るう〜？女の子に老けたなんて禁句だよ？」

「ちょ！ま！なにその魔力パンチ！」

「え？秋春が考えたんじゃない・・・ほんとに如何したの？今日の秋春変だよ？」

そもそもさつきから呼び方が秋春って親しくなってるし

「えつと俺達ってどんな関係だっけ？」

「え？」

笑っていたキャラの顔がどんどん曇って涙を流し始める

「ごめん！ほんと！話を聞いて！」

泣き止まないキャラに如何にか今までの経緯を説明する

暫らくしてようやく理解出来たのかキャラは納得顔になった

「あー、それで若いのね・・・ん？だとしたら私にとって此処は過去って事？」

「え？あ、そうか」

「へー秋春にそんなレアスキルがあったんだ」

「で？俺とキャラの関係は？」

「それは秘密！だってそうしないと詰まらないでしょ？」



密着した時に当たった柔らかい感触が何とも言えず顔を赤らめてしまった

「ん？あー！秋春ったら、ふふっそう言うところは一緒だね」

「・・・あ、そう言えばフリードの制御は上手くいってるか？」

「え？あーあの時の・・・あははっ！安心して！秋春は教えるのは天才的だから！」

「のは？」

と言う事はやはり俺本人は余り強くはなっていないのか

失言と気付いたキャラはバツと顔を背けてアハハと苦笑い

「さて、そろそろ戻してよ。このままだと色々ウツカリ喋っちゃいそうだから」

「分かった」

「じゃあね、秋春」

この後のキャラにさっきまでの記憶は無く本当に成長を遂げていたようだ

前回の実験で自分の能力をある程度把握し、改めて俺TUEEEが  
実現できない可能性アップを実感した

「はあー」

「うーす、どした？雨水」

「おお、ヒューズか」

コイツはヒューズ。俺と同じく非戦闘要員で同じ部署の同僚

「いやほらキャロみたいなお小さい子までもが戦いの場に出てるのに  
大の大人の俺らがなーっ」と

「ハハツ、そればかりは仕方ないさ。でもお前さんはまだマシだろ  
雨水先生！」

「あんまり好きじゃないんだけどな、その役柄」

バンバンと強く背中を叩かれ渋々モニターに視線を移す

隣ではヒューズも俺と同じくらいの速さで仕事をしている

「そいやお前管理局のエースって知ってるか？」

「あ？知らん」

「だよなー、お前さん辺境の地の出らしいし」

「るさい」

「わりいわりい、何でもリンディ提督が持ってきた若いエースで入りたてで局員をバタバタ薙ぎ倒してるらしいぜ」

「そりゃ・・・なんて言うか・・・」

「恐ええな」

「ハハッだな。俺達には縁の無い話だ」

「ん？つと時間だ、行ってくる」

「外回りか？」

「士官学校に講師だよ」

「ガンバ雨水先生！」

まったくこんな年の人間に講師だなんて管理局はよほど人材不足らしいな・・・って勤めてみてそれは身に染みる程分かってるんだけどな

七話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

年齢操作は下手に自分に使い若返らせちゃったりすると転生前に戻って戻れなくなるので基本他人掛けのスキルになりそうな予感

感想お待ちしております！

## 八話 side キャロ

どうも、局勤め一年のキャロ・ル・ルシエです

何故か私が訓練所を破壊しているといまエースと名高い人の目に付いたそうです

本当に世の中不思議です

「始めまして」

「は、はじめ！まして！」

「リラックスして。ね？」

「は、はい！」

金色の長い髪の柔らかい笑みをしているこの人。確かフェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官って名乗ったはず

なんで執務官なんて偉い人がいまだ三等陸士の私に声を

「えっと確かキミは週に一回くらいのペースであそこで練習してるよねっ。」

「え、あ、はい。何時もすみません」

本当は毎日にもも行きたいけどあの迷惑そうに見る目がちょっと恐い  
まあ何時も訓練所を滅茶苦茶にしてるんだから迷惑そうにされるの  
は当たり前だけど

「あ、頑張ってる姿みてたよ」

「ありがとうございます」

「凄いね、その年で努力家だ」

「いえ、ぜんぜん成長してませんから・・・」

「そんな事ないよ、少しずつだけど確かに成長してる」

この人の言葉は嘘でもないし冗談でもないし自然と分かる。そんな  
感じの声色をしていた

何だかタイプは違うけど雨水さんを見ている気分になってきた

雨水さんもこんな風に包み込んでくれるタイプの人だ

「あ、あの、わたしの用があつたんじゃ」

「そうだった」

ポンとうっかりしていたとした仕草は少し天然っぽくて可愛かった  
雨水さんには合わせないようにしようっと

「もし、キミがよかつたらで良いんだけど・・・」

「？」

「家族に、なりたいんだ」

「はい？」

このひとはなんと？

かぞくになりたい、かぞく、かぞく？ファミリーの事だよね、うん

「えと、その、あ・・・はい？」

「ごめんね、混乱させちゃった」

「い、いえ」

「実は少しキミの事を調べさせてもらったんだけど保護責任者が登録されてなかったから力になれないかなって」



ごめんなさい。その理由だとイマイチ分かりませんが、私に保護責任者が居なかったとして何故貴方がその保護責任者を名乗り出ようと思ったのか

私を手に入れた時のメリットとか無いですよ？家事は得意ですけど

「な、なんで私なんですか？」

「？」

「私がいにも孤児なんてたくさん」

執務官は少し寂しそうにして笑った

「ただ、うん、そう。ただ此処で練習をしているキミが寂しそうだったから・・・それを放っておけるほど私が良く出来てないって感じかな？ただの自己満足だよ」

此処での私が寂しそう？

それはそうだ・・・だって此処には雨水さんが居ないんだもん

「そ、そうだんしてからでも良いですか？」

「そうだん？」

「旅仲間に」

「え？」

今更だけど私と雨水さんの関係を人に教える時、旅仲間くらいしか無いのに気が付いた

私は雨水さんと一緒に住んでいる男性独身寮に帰るとすぐに今日の事を話す

「へーそんな物好きが居たんだな」

「ものずきですか?!」

「うん、ほら子供一人を育てるのって結構大変らしいし」

あれ？もしかして今日の雨水さんはちょっと真面目モード？

「んーそうか、訓練所の破壊を参考に所が引つ掛かるな。アレか？誘って来たのはテロリストか？」

「・・・フリード」

「ちょ！止めるフリード！俺は治癒魔法とかは無理なんだ・・・うわあああ！！」

あんな優しい人をテロリスト扱いなんて信じられません

そんな人はフリードの炎で丸焼きにするべきなんです

「さて、もういいですか？」

「あ、ああ、悪かった。テロリストでも人だもんな、きっと不良が猫を拾う感覚なんだろうよ」

「フリード」

「冗談！冗談だって！悪かったって、ふーん。テストロッサ執務官って言えば近頃噂のエースかヒューズから聞いた」

ヒューズさんから？最近私は雨水さんとは部署が違う場所になったからヒューズさんとも会ってないな

お菓子とかくれる良い人だったと思う

「別に良いんじゃないか？キャラが良いって思うなら」

「でもここは出て行くかもですよ？」

「局員同士だし会える時には会えるだろ・・・それに、今は平気で  
も後々保護者が居ないってのは不便だからな」

本当は雨水さんに家族になって貰いたいけど雨水さんは父親って感  
じじゃないですよ

お兄さんは近いかもですけど偶に私の方が年上なんじゃと思つ時と  
かあるし

それに私の目標は雨水さんのお嫁さんですしテストロッサ執務官の  
申し出は渡りに船では無いか？

戸籍登録上他人なら結婚年齢になれば可能です

「よし！決めました！」

「おおー、で？如何するんだ？」

「わたし！テストロッサ執務官の子になります！」

「なら今度会つた時に名前で呼ぶ許可を貰うんだな。名前で呼ぶつ  
てのは親しい証だからなキャロ」

「分かりました！雨水さん！」

・  
・  
・  
あれ？私って雨水さんの事は苗字で呼んでませんか？

八話 side キヤロ (後書き)

今更ながら苗字で呼んでいる事に気付くキヤロでした

## 九話 〱 side フェイト 〱

キャロ・ル・ルシエ。私があの子を見掛けたのは二ヶ月くらい前の事だった

あの子は週の終わりに訓練所に顔を出し迷惑そうな大人に何度も頭を下げて場所を借りていた

何でそこまでするのかとても気になって訓練の様子を少し見せて貰う事にした

あの子の目はとても真剣で何か一つの目標に向かって走っているような、昔の自分と被るような気がしてならなかった

そして訓練後に見せる寂しい気な顔がとても印象に残った

だから私は悪いとは思ってながらあの子の経歴を調べさせて貰った  
小さな村の出身で村を追放された所を自然保護隊に保護されミッドで局員試験を受けて見事合格 現在保護責任者無しの孤児扱い 住んでいる場所は×××部署の男性用独身寮

「？」

何で男性用の独身寮に？

まあ流石に小さい子一人で生活はって事で多分保護隊の方の多い寮に居るんだろう

私は何度も見掛ける内に声を掛けたくなくなった

力になりたいって思った

だから保護責任者を名乗り出た

あの日から丁度一週間。多分今日もあの子は訓練の為にやってくる

「テストロッサ執務官！おはようございます！」

「おはよう・・・えとキャラotte呼んでも良いかな？」

「あ、はい！もちろんです！・・・そのわたしもフェイト執務官って呼んでも良いですか？」

「もちろんだよ！」

キャラは嬉しそうに笑うと訓練所の中に入る

そして真剣な目をして独自の訓練メニューを見ながら訓練を開始する

ん、どんなメニューでしてるんだろ？



「え、えとキャラ？」

「ふえ?! フェイトさ……じゃなくてフェイト執務官?!」

「さんで良いよ」

キャラのすぐ隣に展開されているモニターのメニューを読んでみる

……凄い

かなり考えて作ってある。模範的なメニューじゃなくてキャラの為だけのメニューって感じ

「これ、キャラが？」

「い、いえいえ! これは雨水さんが」

「雨水さん？」

何処かで聞いたような

とっっても最近だったような

「前にはなした旅仲間です」

「あー前も思ってたけど旅仲間って？」

「わたしが村をでてすぐに出会ったひと？」

「自然保護隊の人？」

「ううん、わたしとおなじで帰るところがないって言ってた」

それからもう少し話を聞いていたが段々キャラも「あれ？」と首を傾げる事が多かった

今度会って見ようかな

「あ！そうだ！フェイトさん！」

「あ、はい、なに？」

「い、この間のはなし！」

ドキリと緊張する

もし断られたら如何しよう

「わたしを！フェイトさんの家族にしてください！」

「……良かったあー」

キャラは少し安心して気が抜けた私を心配そうな目で見ている

「だ、だいじょうぶですか？」

「うん、大丈夫、嬉しくて。ちょっとね」

「よかったです」

今日にでも手続きしないと

あ、それに雨水さんにもやっぱり会わないとな

キャラの正式な保護責任者になったのは申請を通した次の日で実際の所は何か変わった訳ではないので少し現実的な実感には欠けます

ただどいまの私の緊張の度合いは稀に見る度合いです

恐る恐るインターホンを押す指が震えます

「ふあゝヒューズか？こんな朝っぱらから」

キャロの住んでいる住所から出てきたのは私と同じくらいの年の男性  
多分、雨水さんだ！

「あ、あの！始めまして！フェイト・テストロッサ・ハラオウンで  
す！この度はキャロ・ル・ルシエさんの保護責任者にならせて頂き  
ました！」

「・・・あん？」

雨水さんは目を細めて目を擦る

そして私の顔をジックリ見ると一旦扉を閉めた

「あっ」

もしかして嫌われた？！

そう思っていたが中から何か楽しそうな声が

『キャロ！なんかお前の母親？いんぞ！』

『フェイトさんはお姉さんです！』

『ってか来るなら言えよ！何も準備してねえって！アイツ執務官な

んだから俺って失礼したらすぐ首飛ぶって!」

「あははっ! フェイトさんはそんな事しませんよぉー」

「嘘だ!」

「・・・フリード」

静かになった・・・歓迎はされてるよね?

「おはようございます! フェイトさん! いま雨水さん起きたばかりでシャワー浴びてますから入ってゆっくりしてください」

キヤロが笑顔で扉を開けて出てきた

それは良いんだけど何時もキヤロと一緒に居る、子竜のフリードが何か啜えてお風呂場らしき所に連れて行ったのは見なかった方が良いのかな?

九話〈side フェイト〉(後書き)

主人公の組織的地位は最下層付近なのでエースで執務官なフェイトには頭が上がらなかつたりします

十話 side 雨水

前回のあらすじ

早朝インターフォンで目を覚ます ヒューズと思い込み扉を開けると執務官殿 寝起きの状態なんてかなり失礼な状況で焦る 取り合えずキャラのせい にしてみたらフリードが火を吐いた 次に起きたのは顔面にお湯を掛けられてから 即効身支度整え再度玄関に居ない・・・ ほっとしてリビングに戻ると座っていた

「キャラ・ル・ルシエさんを私に任せて下さい！」

目の前にガチガチに緊張したテストロツサ執務官が座っています。どっちが上司なんだか分かってるのか？この人は

「ようはキャラを奪いに来たと・・・ふふつやれるものならやってみろ」

「ええ?!」

「雨水さん。いったい何時からねてたんですか？」

最近キャラが恐いです

「ゴホン、冗談はさておいて。キャロの事は有難う御座います、そして宜しく願います」

「え？あ、こちらこそ」

「さて、ところで今日はどのような用件で？」

敬語も出来る高校生なんだぜ！・・・これであってるかは知らんが

「あ、いえ、ただ挨拶をと」

「そうですね、それは光栄です。お噂はかねがねですよエースさん」

「恥ずかしい限りです」

「ところで些細な事ですけど何故キャロを引き取るの？」  
「こう言っ  
ては変ですが変わり者ですね」

いや、マジで訓練所を破壊してる所を見掛けてスカウトとかクーデターでも考えているのではと思ってても仕方ないよね？

「その、なんて言いますか。放っておけない感じだったので」

「なるほど・・・百合な方？」

「なっ！違います！」



「ではキャラは嫌いっ」と

「ちがつ！違うよ！違うからね！キャラ！私は大好きだよ?!」

「え？あ、はい知ってます」

「ほほう、やはり執務官殿は幼女好きっ」と

何だかこの人、面白い人だな

あわあわと俺とキャラを交互に見るテストロッサ執務官は割と普通の女の子って感じだった

あ、そう言えばキャラ幼女は撤回してるんだった

あれからテストロッサ執務官殿とは割と仲良くなった。あ、フェイトって呼べって命令だったな

キャラはと言うとフェイトさんの所と俺の所をウロチヨロとしている

「死ね！」

「唐突だな」

「お前なんか死んじゃええ！」

何時もは冷静情報収集担当のヒューズ二等陸士

なんだか今日は情緒不安定みたいだ

「武装隊の花のテストロツサ執務官とお話なんて死んじゃええ！」

「お前も先日話しただろが」

「アレは仕事だ！そしてお前のはプライベート！全然違う！」

「分かった。お前がフェイトさんのファンと言う事は何だか凄く分かった」

メンドクセエ

報告ですが、晴れて何かの功績で俺も二等陸士にランクアップ・・・  
ってこれが一番下位の階級名なんだけどね

キャラは二等陸士に昇格してたから結局俺の上官？に当たる位置だし

「にしても気を付けるよ」

「なんだよ、急に真面目に」

「ああ言うエリート周りは危険が付き物だ、キャラちゃんはまだ幼いし正直現場には早い」

「……。」

昔はキャラも同じ部署だったからか心配なようだ

アップダウンの激しい奴だな？

「幾らテストロッサ執務官が保護責任者になったからってキャラちゃんにとって頼れるのはやっぱりお前さんなんだからな」

「るせい。分かってるやい」

だから俺だって少しは訓練してんだろが……全然成果でねえけどマジで何で他人の指導はこんな上手いのをそれを自分に応用出来ないかなー

あの特典他人限定とかって縛りでもあんのか？

「羨ましいなー！なー！俺と変わねえか？」

「……そうだな、俺がフリードの餌食になっている瞬間だけ変わってやるよ」

「そっちは遠慮」

ヒューズと暫らく喋っていたら上司に後ろから書類で殴られた・・・  
あのハゲエ

十話 side 雨水 (後書き)

今後の参考までに聞いておきたいのですが、オリキャラは増やすべきでしょうか？

お気軽にご意見投票、宜しくお願いします！

十一話 side 雨水

あらすじ

キャラの保護責任者が正式にフェイトさんに決定 フェイトさんが挨拶に来る なんか素直だからかうと面白い からかい過ぎて次の日首飛んでないか少し不安になる 心が広いのかそんな事はなかった ヒューズに恨まれる ちよつとシリアス で親睦を深める為に遊びに行く事になった

「うーっす、待ちました？」

「全然待つてないよ」

「おなじくです」

「雨水さん！じよせいを待たせるとは何ごとですか！」

「キュツクルー！」

フェイトさん、謎の少年、キャラ、フリードの順でお送り致しました

「二人対一人でそんなに待つてないで決定だな」

「キュクー！！」

「お前は竜だろうが」

竜の数え方は匹だ！・・・たぶん

「ハハ、それじゃ行こうか」

「ですね、それにしても親睦深める為に遊園地って子供みたいな発想だな！流石キヤロ」

「え？これってたしかフェイトさんが・・・」

ん？

「こつこども・・・かな？」

「フリード」

「キユク」

え？俺なんか悪い事言った？

流石のキヤロもこんな所でフリードに炎を吹かせる事はなかったが代わりに噛みつかれた

「雨水さんっておもしろいですね！」

「そうか、まあそれは良かった・・・ところでお前誰よ？」

「え？」

いやいや、そんな悲しそうな顔をされても俺ってお前から自己紹介もされてねえんだぞ？

「・・・雨水さん」「

女性陣から冷やかな目が

「いやいや！待って！俺そいつの名前さえも聞いてない！」

「」「・・・あ」「

ようやく知れたがコイツはエリオ・モンディアル。フェイトさんが保護責任者を引き受けた子供らしい

まあキャラ（男ver）ってところか



「なるほどなー、一応知っていたみたいだか。俺は雨水 秋春な。さつきみたいに雨水でも、いつそ秋春でも好きに呼ぶが良い」

「秋春、兄さん？」

「「え？」」

「え？」

何故か見詰め合う女性陣とエリオ

え？え？なに？・・・あ、そう言えば俺を名前で呼ぶのってエリオが始めて？

「ジェットコースターかー久々だなー」

「の、乗るの？雨水さん」

「早そうですね」

「楽しみです！秋兄さん！」

フェイトさんとキャラ口は恐る恐るか。ま、そんなもんなのかな？

って言うか秋兄さんってちょっと微妙くないか？秋兄か兄さんかどちらかに別けるべきじゃないか？

ジェットコースター

「きゃあああああああ！！」

「いやっほー！！」

「はい！はいです！」

お化け屋敷

「きゃあああああ！！」

「やっぱり作りもんだな」

「張りぼてですか？」

コーヒーカップ

「きゃあああああ！！」

「そんなに早くないと思うが」

「回る！回る！回るううう」

ウォーターライダー

「きゃあああああああ！！」

「水ウゼエ」

「濡れますね」

巨大ボールプール

「きゃあああああああ！！」

「これは叫ぶ所か？つてかボール痛っ。エリオ！テメエか！」

「アハハ！楽しいですね！」

カフェテリア

「はあはあ、ゴホゴホッ」

「お前ら叫びすぎだ」

「だ、大丈夫ですか？」

カフェの屋外テーブルでくたあーと女性陣二人は倒れている

ん？叫ぶ様なアトラクションは俺的には最初の二つくらいだったが

「あゝくゝ、雨水さんってタフですね」

「キャラはともかくフェイトさんまで？」

「エリオは元気だね」

「フェイトさん？僕もつかれましたけど。楽しかったですから」

昼食が運ばれると俺とエリオは食べるが二人はまだ復活してない

ってかエリオの食べている量が異常だ・・・フェイトさんが払って  
る食事代とか凄そうだな

「あれだな、フェイトさんは良い人だな」

「え？行き成り如何しました？」

「いや、なんでも」

こう言う時は男が払うべきだと意地を張って見たがやっぱ凄かった

一ヶ月分の生活費と同じくらいはあったぜ？

十一話〜side 雨水〜(後書き)

エリ才登場！

十二話 side エリオ

雨水 秋春さん。通称、秋兄さん

今日はフェイトさんもルシエさんも一緒では無く二人同士、男同士で会う事になった

「うああーだるうー・・・早いな」

ネクタイを緩め眠そうにしながら片手をパタパタして歩いてきた

反対の片手には仕事荷物を持っている

「ごめんなさい、急に・・・」

「ん？ああ、いいさ。待たせて悪いな、その辺の喫茶店で良いだろう？」

「はい！」

人は居るけどそれ程混んで居ない喫茶店を選び入る

「あー、で。何の用だっけ？」

「その・・・雨水さんが様々な場所で講師をしているって本当ですか？」

噂に聞いた話では訓練校や難関の士官学校を始め陸士部隊や武装隊の実戦部隊、教導隊のエリート部隊の所まで幅広く活躍していると聞いた

「講師は本当だがエリオが思っているような感じじゃないぞ？」

「？」

「んーっと、たまくに呼ばれては優秀な生徒いますか？とかこの子が最近伸び悩んでいるんですけどか持ち掛けられる程度だ。本職はロストロギア関係だしな」

つまり生徒を見定める選別眼と的確なアドバイスが出来るって事ですよね？

十分凄いやうな・・・それで本職は危険物のロストロギアって・・・

「あ、あの秋兄さんから見て僕ってみこみますか？」

「見込み？なんの」

「まどろしのです」



秋兄さんは何だか面倒そうな顔をして右肘を付く

き、気分悪くさせてしまったのかな？

「それは、フエイトさんの為とか？」

「それもあります」

「も？」

「はい、僕もルシエさんががんばってる姿をみせてもらいました。そして僕ももつとがんばりたいと思ったし秋兄さんに追い付きたいって」

「あーあーあー」

楽しそうに首を何度も縦に振って携帯端末からモニターを表示させた

そこにはこう書いてあった

ロストロギア鑑定士 魔導師ランクD 雨水 秋春

「くははっ、追い付くってエリオの魔導師ランクは平均的に見てC以上は行uksi魔力変換資質の電気も持ってる。既に追い抜いてるって」

「え？え？」

あれ？魔力変換資質の事言いましたっけ？

「いやーまー、追いついて言っても分野が違つからなー。エリオは戦線部隊になると思うよ？向いてるし、近代ベルカって事は騎士になるんでしょ？」

「な、なんで、しってるの?!」

「アハハッ！俺はエリオより複雑なロストロギア相手に鑑定士をしてるんだぜ？大体分かるって」

やっぱり秋兄さんは凄い

僕の将来の目標には十分な人だ

「ん、意外と美味かったな。此処のケーキ、キャロに持って帰るか」

あれから話し込んでしまつて夕方になつてしまった

「フェイトさんにも買って行つた方が良いでしょうか？」

「あーそりゃーもちろん。代金は持つてやるからフェイトさんの好

きそうなのを選びな」

「ありがとうございます！」

フェイトさんは忙しく僕の住む保護施設に来れる時間を作るのを精一杯、それは分かっていたけど僕は遅くまで起きて持っていた

「エリオ！」

「フェイトさん！」

面会時間はとくに過ぎていた、だけどフェイトさんはやってきてくれた

僕はそれが嬉しくて今日の話を元気良く語った

「雨水さんには今度お礼を言わなきゃね」

「はい！」

「あ、ケーキ。ありがとね、エリオの選んでくれたの美味しかったよ」

「あ、い、いえ」

いま思っただけどフェイトさんと秋兄さんは何処か似ている

フェイトさんは包み込むように優しく凍った心を暖かく溶かしてくれる

秋兄さんは荒々しくてちょっと乱暴だけど優しく飲み込むように全てを受け入れてくれる

どちらも優しい、信じられない程に優しい、勿体無いほどに優しい

「フェイトさん」

「なに？」

「僕、魔道師テストをつけてみます」

だから僕もそんな二人みたいな人になる為に魔導師になりたい

十二話 side エリオ (後書き)

現段階の役職	本職	ロストロギア鑑定士	副職	アルバイト
講師				

十三話 side 雨水

前回のあらすじ

エリオに相談を受けた あれ？俺ってこんな子供により弱いのか  
何故か目標にされる ケーキ食う 意外にも美味しかったからお土産に持って帰る キャロ、ケーキ気に入った・・・でもカロリーを気にしてたっばい 終わり

ああ、何気に既に入局二年くらいか？

今日の仕事は第四陸士訓練校で特別講師を頼まれた

「えー・・・第四陸士訓練校の生徒の皆さん。今日は少しの時間ですがお願いします」

あー面倒だ

広さは一般学校の体育館くらいだろう

生徒達は直立不動、疲れないのだろうか

「魔力と言うのは確かに多ければ多い方が良いです。がしかし術式の改良等で同量の魔力である程度魔法の強弱を付ける事が出来ます・・・なので魔力量が少なくとも強大な魔力持ちに完全に太刀打ち出来ない訳では無いです」

表示されるのはミッドチルダ式の魔法陣。最近は近代ベルカと言った新しい形態が出始めカートリッジシステムも確立されてきた頃で魔法技術の進歩は目覚ましい

ちなみに俺の魔法形態はミッド式・・・なんだけど使えるのはせいぜい初歩的なのを数個

これでも訓練は人並みにしてるんだけどなー

「飛行魔法に必要なのはイメージです。魔力を通すのは部位ではなく体全体です、放出系の魔法に分類されるので飛行中は常に魔力を消費します。しかし覚えればそれは確実に戦闘の際には有利になります」

浮遊だけなら大したモノではないが飛行となると違ってくる

飛行の代わりに別の魔法を代用してくる魔導師も居るらしい。でもそれは大概はレアスキルや先天技術

「と言ったように基本的な魔法とはインテリジェントデバイスが頑張れば自動詠唱出来るレベルです、魔力消費も少なく威力も当然低いです・・・ですがこう言った基本こそ応用の幅が広く使えます・・・ん？あ、そろそろ時間でした。では今から質問の時間に移りますね」

にしてもこんな弱そうな人間が偉そうに語ってると思うと笑えるな  
ーとか考えていると物凄くイライラしてますと表情で分かる生徒が  
突っ掛かってきた

「先生の魔力ランクをお尋ねしても？」

「ん？Dくらいだったか、たぶんそんなくらい」

予想外の低さだったらしく少しざわつきが入る

んー先にある程度の情報を渡してくれれば良かったのになー

「Dって・・・って何でそんな低ランクが、と言うかDって魔導師  
として成立するの？よくテスト受かったわね」

仕事仕事我慢我慢

「あん？んだと？おい、魔力ランクが魔導師局員としてのレベルを  
決めるものじゃないって知ってるか？」

・・・あれ？我慢するつもりだったんだけど

よし！流れに任せて進もう！



「それは教わりましたが限度があります」

「ほほお？限度ねえ、ならお前は俺より強いのか？」

「ええ」

「表に出ろ！」

「ええ！！」

・・・周りの視線が少しだけ痛かった

目の前に立っただのはオレンジ髪の少女だった、訓練生にしては珍しく自作デバイス

俺達は勢いそのままにリアルに表の訓練場に出た

周りの教師が何も言わないところを見ると周りも俺の力を見たかったらしい

「名前を聞こうか？」

「ティアナ・ランスターです」

「先手は譲ろうかな」

「そうですねっ！」

開始の合図になると銃型のデバイスの先が向けられシューターが発射される

三発 誘導弾 二発は前から挟み込むように来る圏で一発を背後からの本命

観察眼の情報を整理し動きを読む

来る場所さえ分かっていたら速かろうが遅かろうが一緒だ

それに誘導弾は速さを追及した弾では無い為、感覚的にはドツチボ  
ールハード版

「っとギリギリッ！」

身体能力の高く無い俺としてはかわすのさえ難しい現実的に考えて  
かわせる限界は四発くらい・・・あれ？挑発しといてなんだけど、  
ヤベエ〜

十三話 side 雨水 (後書き)

少しティアナにしては冷静な判断に欠ける行動と思われたかも知れませんがこれには事情がありまして・・・

当初スバルが元気良く勝負を申し込む設定だったのですが戦闘機人に勝てる要素が無い！と気付き急遽身体能力平均並みのティアナに白羽の矢が立った訳です、はい

なので少し違和感があるかも知んですがご了承を

## 十四話 side ティアナ

最近の私は少し人間関係が面倒で疲れていたのか何時もなら冷静に流せるはずの事を受け止め無駄に起こってしまった

なんでこんな事に

私は割と手加減せずに特別にやってきた噂の講師にシューターを放っている

「アブナッ！」

講師の方は私の攻撃の位置を何かで先読みしているような動きを見せる

そのせいで段々と私も熱が入る

先読みされているなら全方位射撃で・・・

「うし！いまだ！」

私が同時射撃の為にタメに入った瞬間私に向かって走ってくる

行動の先読みじゃなくて思考の先読み？

考えないと・・・ああ、もう、観客が鬱陶しい

「マルチタスク。あーなるほど思考の先読みと分かったから思考を分割したのか」

歓心したような声を出した。次の瞬間、単発の威力の低いシューターが連続で地面撃ち土煙を発生させられた

目暗まし？

私は標的をズラす為に幻影シルエットを使う

「シルエットかあー、つくづく訓練生にしては実践に慣れてるなー。いや、実戦を常に想定していたのか？」

なんだかこの講師の言い方は私を見透かしているようでイライラする

「発見」

気付かなくなった。講師の人が行き成り目の前に現れデバイスを持っている方の手を捻り上げられる

「痛っ、痛たたっ！痛いです！」

「あははっ！ごめんねー、俺ってバインドまだ未完成でさー」

バインドが未完成ってどんだけ魔法下手なのよ！

魔法無し之力では流石に男の講師には勝てない・・・まさか魔法外の手を使ってくるなんて

「うん！魔法戦って言ってないし良つか！」

「痛い！痛い！いい加減放しなさいって！」

「優等生っぽい顔して酷い言葉使いな」

段々と手の疲れ力が抜けてデバイスを落としてしまう

講師の方は私のデバイスを拾って少し観察するようじに見詰める

「高そうなパーツだなあ」

「返して！かえ、痛たたッ！！」

取り替えそうと振り返ろうとしたら余計に腕が捻り痛かった

「射撃と幻影かー、なんて言うかセンターガードに最適な人材だな」

「褒めてます？」

「あれだな、キミみたいに可愛い子をこんな風に捕まえてると俺が変態みたいだー」

「放さないと叫びます」

パツと放した

瞬間的に魔力弾の形成も考えたが集中力が散漫になっているせいで上手く出来ない

「さて、俺の実力はこの程度だ。そもそも俺は卓上で教えるのであってこういった実戦訓練は苦手なんだよ」

勝っておいてそれはムカつく

私より断然に魔法が不得意なのにこれだから才能持ちは……  
レアスキル

「いーなー才能持ちはっ。俺も魔法使いてー！」

「え？」

「ん？どした？」

この後、すぐに訓練校の教師が割り込んできたので話す事が出来なかった

訓練校から寮まで帰り、最近やたら付き纏ってくるスバル・ナカジマと一緒に帰っている

「どうしたの？今日はティアらしくなかったけど」

このスバルとは名前で呼ぶくらいには仲良くなっている。二人とも訓練校では珍しい自作デバイスだったので自然と仲良くなったんだと思う

「そうでもないわよっ、だってDランクとか可笑しくない？」

「ま、まあそれは私も思ったけど」

「それにあの講師の人の動き。ちょっと変だったのよ」

行動の先読みでも思考の先読みでもなかった



でも最初から攻撃の来る場所が分かっているかわせる最善の歩数や体制でかわす

いったいどんなレアスキルなんだろうか

「変って失礼だな」

「って！講師の人！」

「なんでこんな所に」

此処って一応女子寮行きのだんだけど・・・警備員を呼んだ方が  
良いのかな？

十四話 side ティアナ（後書き）

今回のティアナの敗因は

威力とコントロール重視でシューターの数を減らした事

訓練所が屋外で土煙が発生しやすかった事

拘束された時にシューターから意識を外した事

の計三つくらいかな？とか思っています

どれも次の機会には克服されてそうで雨水の勝ちがギリギリだった  
と言っのを分かってもらえたかなと思います

十五話 side 雨水

前回のあらすじ

第四陸士訓練校 それっぽい話を 少女に絡まられる 騙し騙し勝つ  
つ その後社交辞令的に訓練校教師と話して帰る 道に迷う 見知った少女発見 自分の話と気付く 話し掛ける 警備員を呼ばれかけた

「ってな訳で道を教えてくれない？」

「。。。。」

何故か微妙な表情で見られた

「何であの道を迷うんですか」

今日絡んできた方の少女が呆れたように息を吐きながら言う

隣の子は一応フォローっぽい事を言っているがイマイチフォローとは思えない

「仕方ないだろ？そいや、俺が変わって何処が？」

「私の射撃魔法をかわしていた時ですよ。行動や思考の先読みにしては動きは遅く、かと言って魔法が放たれている場所は分かっているようにかわす・・・変ですよ、咄嗟に判断したとでも？」

「んー、本当に凄いね、将来は執務官とか希望してるの？」

あの役職は無駄に高いスキルを要求されるからなー

フエイトさんも抜けた性格だけど仕事ではかなり優秀でエリートだったし

「希望しますが何か？」

「合ってるなって。えーっとティアナ生徒だったな、そっちは？」

何だか聞いてはいけない感じだったので、すかさず隣の子に話題を振る

「え？え？スバル・ナカジマです！」

「スバル生徒な」

元気そうだなー・・・と言うかこの子も自作デバイスか。流行ってるのか？

やだなー

自作デバイスって自分で色々魔法組んでる子が多いからメンドクサ  
イんだよなマニュアル道理に出来なくて

「雨水先生でしたよね？」

「そそ、でどうしても良いけど帰り道どっち？」

「あっちですよ」

今来た道を指された

全くの逆を歩いていたのか、途中に地図等が無いから全然分からな  
かった

「ん、ありがとう」

「いえ」

「じゃ、今度局であつたら声掛けてなティアナ生徒にスバル生徒」

「だうあー」

「あれえ〜？雨水さん帰ってたんですね」

「まあーなあー」

自宅でゆったりと疲れを取っているとキャラロが帰宅する

キャラロはピシっとした局服を着込んでいて肩からショルダーバックを下げていた

どっかのOLみたいだ

「老けたな」

「・・・フリード」

プロテクションを張ってみたがアツサリと破られ丸焼けにされた

そしてフリードは慣れた仕草でグタつとなった俺を俺の部屋に放って着替えると言いたげに鳴いた

「あいあい、お前が焼くから服がどんどん無くなるっの」

「キュック」

「まあな、確かに命令してるのはキャラロだし文句ならキャラロかー」

「キユウウ」

「ああ、少し恐いな」

早々と着替えてリビングに戻ると既にキャラは私服に着替えてソファに座っていた

「雨水さん、そうだんがあります」

「相談？」

俺はキャラの目の前に正座する・・・あれ？普通逆じゃね？

真面目な話だと自然と正座で聞こうとする辺りは教育の賜物と言っ奴なのだろうか

「うん、私、自然保護隊にいきこうかと思うんです」

「ふーん、いつてらっしゃい」

「・・・フリード」

何故に?!?!

「待て待て！キャロ！話合おう！」

「・・・ですね。そうだんと言うのは、その、あの、雨水さんもいつしよに、つい」

「え？なんて？」

「その、一緒についてきて・・・くれないかな？って」

「は？やだよメンドイ」

いまの部署気に入ってるし移動願い出すの面倒だし、何より俺はそこまで自然大好き人間ではないので保護と言われても他人事にしか思えない

「い、いいじゃないですか。恩もありますし返しましょうよ」

「まあ確かに恩返しは大切だよな・・・ん？フェイトさんには言っただか？」

「まだです」

そう言うのは保護責任者のフェイトさんに真っ先に言っべきだと思うんだが何で俺を最初に選んだのか

まだフェイトさんとは少し距離があるのかな？



「なら話は今度だな」

「・・・はい」

とは言ってもあのフェイトさんの事だ、キャロの意見を尊重してOKを出すんだろっな

・・・事前準備をしておくべきか

十五話 side 雨水 (後書き)

今更気づいたが原作よりキャラ口が確りしてきている気が・・・雨水  
(反面教師)が居るせいかな？

十六話 side キヤロ

自然保護隊。名の通り自然を保護し動植物を密猟者等から守る部隊、極地への派遣もあり人気の少ない部隊だけど私は大好き

数日前に雨水さんに一緒に行ってもらえないか相談を持ち掛けたけどアツサリ断られた

・・・むう

「キヤロの好きなようにすれば良いんじゃないかな？」

「フェイトさん」

「雨水さんも口では文句は言うかもだけどきつとキヤロの事を考えてくれるよ」

フェイトさんに相談してみると、とても心強い言葉を頂いた

「でも雨水さんをむりやり連れていくのは・・・」

「雨水さんを自発的に行かせる方法・・・んー私も雨水さんの事は鑑定師と講師をしている事くらいしか知らないもんなあ、なのはなら如何するかな？」

「なのは、さん？」

「あ、私の友達なんだけどね？説得するのがとても上手なんだ」

それは凄い特技ですね

あのダラけた雨水さんにも効果あるんでしょうか

「あの！その人に雨水さんの説得を頼めませんか？！」

「ん、んー大丈夫かな？確か来週くらいになのは休みがあるって言うってたし」

「よろしくお願いします！」

私が頭を下げるとフェイトさんは困ったように微笑んで分かったと一言返してくれた

一週間後、私は雨水さんの休みを高町なのはさんの休みと合わせてもらってこの間の雨水さんが買ってきてくれた美味しいケーキのあるミッドの喫茶店で合流するように取り付けてもらった

「始めまして」

「始めまして高町一尉、武勇伝は私の部署にまで轟いていますよ」  
「恥ずかしいです」

「どうやら名前くらいは雨水さんも知っていたようです」

「いつにも増して表現が硬いのは一応上官だしな〜とか考えているに  
違いない」

「フェイトさんは久しぶりですね」

「あ、うん」

「今日は何か話だそうですが、キャラが何時もご迷惑をすみません  
ね。お二人とも忙しいでしょうに」

「全然！全然そんな事ないよ！キャラの役に立てて私嬉しいもん！」

「にやはは、私も今日は暇だったから問題ないよ」

雨水さんはフェイトさんを見て高町さんを見たあとに礼儀正しく上官に対する態度を取ったあとに少し失礼と言って私を二人の見えない所に連れ出した

「あれは何だ」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官。私の保護責任者でやさしいお姉さんじゃないですか」

「問題はそつちじゃねえ！あの砲撃魔の事を言ってるんだ！もしかして今日会わせたい人ってあの人か？！」

砲撃魔って女性に失礼ですよ、雨水さん

「そうです」

「ッ！キャロおー、別に俺は高町一尉が嫌いと言う訳では無いんだが余りあの人とは関わりたくないんだよ」

「え？なんでですか？」

「噂は尾ひれがつき易いもんだけどそれでも、あの高町一尉の噂は他の二人を群抜く」

それから雨水さんは前に生徒から聞いた話を教えてくれた

何でも、高町さんと本局部隊のデモンストレーションの様な模擬戦があつたらしいのだが、そこで高町さんは一人で本局屈指のエリート部隊を圧倒しその場で生徒までも撒きこみ無双したそうだ

「ま、まさかあ」

高町さんは話では砲撃型、砲撃型はチャージに時間が掛かったりと強力な前衛が居て初めて役に立つポジション。そんな一人で無双だなんて

「ああ、俺も尾ひれが付いたんだとは思ってたが・・・その、あの人の魔法センスが異常なのは何と無く分かるんだよ」

「と、ともあれ！早くもどりますよ！お二人ともまってますし！」

「やだなー、マジなんで俺なんか・・・ヒューズうー、今こそお前の出番だろお？」

何故噂だけで此処まで恐がっているのかは不思議でしたけど呼んでおいて帰る訳にもいかず雨水さんは渋々戻った

しかし高町さんに笑顔を向けられた時は凄い苦笑いになってたけど

十六話〜side キャロ〜(後書き)

満を期して管理局の白い悪魔こと高町なのは登場です！

コミックでのなのはさんの戦いを見てるともう常識なにそれ美味しいの？状態ですよ



十七話 side 雨水

前回のあらすじ

帰宅 キャロに明日は会って欲しい人が居るから時間を空けてくれ  
と言われる 何故前日にと思ったが仕方ない 喫茶店で会うらしい  
フェイトさん発見・・・高町なのは一等空尉殿？ つい咄嗟に観  
察眼で見えてしまい理不尽なくらいな才能を見る キャロに問い詰め  
ると兎にも角にも話を でテーブルに座ったが何故か好意的な目で  
にこにこと笑顔を向けられる どうしよ・・・お話と称して砲撃を  
放つと言われている人間とよりによってお話とは・・・

「え、えーとそれで誰が俺に用なのかな？」

「私だよっ」

高町なのは様々！！！！白い悪魔と恐れられた砲撃魔が話し相手か  
よおおおおお！

「なに？文句ある？」

「何も無いです！イエッサー！」

「そう、あのね。一回前にキャロちゃんから聞いてると思うけどキ  
ャロちゃんの為に一緒に自然保護隊に行ってくれないかな？」

きゃ、キャロの奴。まさか高町一尉に協力を求めるとは卑劣なッ！  
あれか、フリードの炎で焼くのに飽きたから砲撃で来たか。んー詰んだな

「拒否権はあるんですかね？」

「・・・無い、なの」

無い?!しかもなのとかちよつと子供っぽくて可愛いなあーとか普段は思えるかもだけと・・・

目が恐い!何より胸元でキラッキラン言ってるデバイスが恐い!

脅迫だ。説得が駄目なら脅迫なんてまさに悪魔だ。と言っか初対面の人間に脅しを掛けてくるとは

「何だかさつきから雨水さんの視線がとても失礼な気がする」

「べ、別に何も・・・綺麗だなーとか？」

「にゃははーそれは嬉しいなっ」

「・・・雨水さん」

俺は褒め言葉を送ったはずなのに何故かフェイトさんとキャロから  
非難の目で見られた

結果だけ言うと結局俺も一緒に行く事になった

何故か既に異動願い等も提出された事になっており局としての準備  
は終わったあとだった

「つたく、面倒な」

「めいわいくでした？」

ミッドの次元転移ポートの様な所で適当に昼食を取りながら愚痴を  
零す

「迷惑かもなーとか思うなら巻き込むなよな」

「だって雨水さんと一緒がよかったですし」

「まー俺も機会があれば自然保護隊の皆にはお礼くらいしないとい  
て思ってたからこれで良かったのかも知れんがな」

とは言え俺達が自然保護隊に居るのは約一年くらいになると思う

理由は俺の講師休暇期間がそれくらいと言っただけ

「良かったんですよ。これで」

「ふーん」

昼食を終えるとすぐに手続きを済ませて転移する。するとすぐに向かえの人が来てくれた

しかもご丁寧の前に俺達をミッドまで案内してくれた、おっちゃんだった

「おー！久しぶりだな。お前等、少し背伸びたか？」

「伸びたよ、成長期は過ぎたがまだまだ成長する年頃だからな」

「私も少しだけ」

「そうかそうか！キャンプで皆が待ってるし、さっさと行くぞ！」

排気ガスを気にしてんのか車では無く徒歩……ん？ミッドの車は電気自動車じゃなかったか？

んあ……単に道が確りしてないからか

「にしても俺等は前回料理しか、してなかったから何気に自然保護の仕事とか知らないんだよな」

「そうだなあ、主に保護指定の動物を守ったり金になりそうな動物を捕まえに来た奴を逆に捕まえたりお前等みたいに偶然迷い込む奴をキチンと出口まで案内したり・・・偶に遺跡とかに見付ける奴も居るそうだが」

ホント動物愛護団体みたいな活動だな

俺の特典スキルだと天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造った。(長いので統率力と呼称)か全ての事象を観測する者。(表現し難いのでそれっぽく仮完全記憶能力と呼称)が役に立ちそうだ

「確かにこんな森ばかりの未開地なら遺跡くらい発見出来そうだがな」

「ハハツ！この辺は既に調査済みだ！」

夢を壊しに掛かるなよ

十七話 side 雨水 (後書き)

レイジングハートさんが無言で圧力を掛ける。でした

十八話 side 雨水

前回のあらすじ

女性陣三人の策略により森ばかりの場所に 運が良いのか意図的なのか前回と同じ保護隊に 遺跡発掘とかロマンあるなとか思ったら おっちゃんはそのロマンを壊す チクシヨウ 合流 …… 久々会 うとやっぱり皆気さくで良い人達だなー

「なあキャラ、前回とどう違うんだ？」

「料理のとうばんは新人のつとめです」

「部活みたいだな」

「ぶかつ？」

ん、そうかキャラは特に学校とかは通った事はなかったな。村で最低限の常識を教えてもらっただけらしいし

・・・キャラの学力が不安になってきた

「集団で集まって好きな事をするグループみたいなのかな」

「たのしそうですね」

「だな」

今日の献立はキャロが好きなおムレツがメイン。だが十数人分となると結構辛い、多人数向けだとやっぱりカレーとかシチューとかが楽なんだけど

「卵料理が好きって俺の思うに子供っぽいと」

「そ、そうですか?!・・・こども、ですか」

「ま、俺の勝手な先入観って奴だから世間は・・・さあ?って感じだがな」

卵自体は栄養があると思うから別に好きで構わないんだろうけど・・・あるよね? 栄養

「そう言えば雨水さんの好きな食べものってなんですか?」

「あん? んーハンバーガーかな?」

「十分こどもですね!」

「何故嬉しそうに言う」

そろそろ高校生って称号も消えたなー(年齢的に)



大人になっても子供の心は忘れずに！の精神で行けば問題は無いか

「あ、やべっ焦げた」

「なにしてるんですかッ?!」

「大丈夫だ、これはキャ・・・おっちゃんのにしよう。あの人ならこの程度は気にせず食べるはず」

「雨水さんのです」

「いっ其他のも焦がしてやろうか」

「止めてくださいね。なんか黒いですよ、雨水さん」

「チッ」

「せめておっちゃんだけでも」

「この後、おっちゃんの分を焦がす事に成功したのだがキャロに目撃されていてフリードにより完全に真っ黒にされた炭みたいなおムライスを食わされた」

「そいや焦げって癌細胞って聞いたけど大丈夫なのかな？」

「はいはい、此処は保護区域なので生息動物への餌やりは止めて下さいねー」

「え、あ、すみません」

「いえ、では観光を楽しんで下さい」

まずは危険の無い観光許可地区の見回りから任された

午前中はキャロと別れて見回るが午後は合流する予定だ

にしても一つの丸々未開世界って言葉通り次元が違うよなー、登録名は第何十何世界とかだったけど・・・覚えてない！興味ない事は覚えない！

「お仕事ご苦労様です。良い天気ですね」

「ええ、家族旅行ですか？」

「そうなんですよ」

どうやら此処一帯は割と人気のスポットらしい

何が人気なのかサツパリだけど・・・マイナスイオン？

「あ、あの！お兄さん！」

「ん？なんだ？坊主」

なにやら慌てた子供が話し掛けてきた・・・面倒ごとかッ

「あつちに怪我した動物が！」

「分かった、知らせてくれてありがとうがとな！」

「うん！」

頑張つてと応援の言葉を背に知らされた場所に行くと狼寄りの白い毛色の子犬が怪我して倒れていた

すぐに観察眼のスイッチを入れる

絶滅指定 魔狼 魔力ランクC 重症 治療優先

犬に負けた・・・だと？あ、狼か

正確には魔力ランクと魔導師ランクは別物だけど似たり寄ったりなものには違いない

「この場合は治療と報告だよな」

ホントに必要な情報を取り出せる観察眼はとても便利だ

一応動物を守る仕事なので動物用の医療キットは持ち歩いている。  
それと観察眼を併用して応急処置を済ませ保護隊に一報入れてキャンプに戻った

十八話 side 雨水 (後書き)

些細かも知れませんが惑星一つ丸々を数十人の部隊で可能なのかと言う謎  
調査隊は別部隊として観光地区や一部危険地区に絞れば・・・もし  
くは一定区域毎に拠点を設け複数の保護隊を配置すればイケる？な  
んて考えてます

## 十九話 side 雨水

前回のあらすじ

新人は雑用！ 料理作成・・・あ、焦げた 勢いでおっちゃんのも焦がす キャロが発見 夕食の席で俺の目の前に二つの炭が キャロが何かやり遂げたみたいな爽やか おっちゃんからも笑顔を送られる 決心して試食 まあ予想通りの味 数日、保護隊の雰囲気にも慣れた所で危険の少ない場所に たまに遭遇する家族等と世間話 怪我した子魔狼を拾い放置は不味いので持って帰った

「危険地区の動物だな」

「へえー」

「群れから逸れたか捨てられたか」

どちらにしても一時的に保護する事に変わりは無いそうだが

少し様子を見てみるとキャロは帰ってきた

「雨水さん！保護をしたどうぶつは大丈夫でしたか？！」

「いまは寝てる。魔法って便利だな！」

おっちゃんは治癒魔法を使えた

観察眼で見ていたが確かに傷は治っていったし本当に魔法とはビックリだ、俺も早く使えてえなあー

「かわいいい」

「キュツ?!」

フリードがボソツと言ったキャロの言葉に過剰反応した

俺はフリードの口の端から火が漏れていたなんて見てない。うん、幻覚に違い無い

「さて、一時的だが保護する事になった。以上」

「ほんとですか!やったあ!」

「やったあーって俺等はコイツの群れ探して面倒になる予定なんだがな」

生息地域が分かっているだけでも救いか

流石に分かってなかったら諦めるぞ、俺は・・・

「わたし頑張ります！」

「そうか！頑張ってくれるか！」

「・・・雨水さんも頑張りますよね？」

「もちろん！七時から一時、二時半から六時の間な！あと時々五分休憩！」

「きんむじかん？」

当然自然保護隊にそんな目安の勤務時間など通用しないのはおつちやん達を見ていて分かるのだがそれでも暗い森の中で狼の群れ探しなんてやりたくない

「名前は何にしようか」

「え？」

「名前だよ、名前、決めてないと色々不便だろ？」

「わ、わたしが決めてもいいですか！！」

「ポチで良いだろ」

犬っばいし



キャロの意見は・・・却下、任せると乙女チックになりそうだし

「ちょ！幾らなんでもポチはこの子がかわいそうです！もっとちゃんと考えてあげないと！」

「名前なんて分かりやすさが一番なの、無駄に変な名前になるよりメジャーなのが一番だ」

「そんな事ありません！」

「はあーなら保護隊の皆に多数決で決めてもらうか」

「望むところです！」

結果・・・俺、惨敗

理由として幾つかあったがその一つ

「お前、犬じゃないんだからポチは無いだろっ」

と男性陣から言われ女性陣からはキャロを軽くうつうつる状態にさせた事を数人に渡り交代で説教された

「シロ！フリード！おいで！」

「ガウ！」

「キユクー！」

魔狼の名前は正式にシロと決定

「……ってキャラオ！昨日も言ったがシロって発想的に俺のポチと大差ないだろ！」

あれだけ保護隊女性陣に説教された結果がこれとは俺が報われない

「大差あります！ポチだとなんか、ああ、犬だなあ、って思いますけどシロだとちゃんとこの子って区別が付きます！」

「フリードも白いじゃん！」

「フリードはアルザスの龍です！」

訳の分からない言い分に混乱しそうになるが結局の所、どうせ群れが発見できればそれでお別れだろうし、ポチって名前に深いこだわりがあった訳じゃない

割り切ろう。うん、美少女類のキャラが笑顔なんだしそれで良いじゃない？って感じで

「雨水さん！シロはもう大丈夫なんですか？！」

「んーまあー外で歩く程度には大丈夫でしょ完全回復には一週間は欲しいけどね」

「わたしが面倒をみます！」

「ん、頑張れよ」

それから一応治ったシロの躰は俺に任された

んーこう言うのは保護するのを喜んだキャラがするべきじゃ・・・  
キャラが躰をする性格に向いてないのは分かるけどね

甘いし優しいし可愛いし

飴がキャラで鞭が俺か・・・側からみたら良いコンビか？

「まったく、一応群れに帰るまでとは言えキャンプに居る以上はそれなりにキチンとしろよ」

「ガウツ！」

講師の才。他人への教えがとても上手いスキル・・・てつきり人間限定だと思っていたのだがシロの言葉の理解や特技の取得のスピードが幾ら頭の良い魔狼とは言え異常だったので恐らく動物にも作用しているのは無いかと推測

これは思わぬ収穫だったな

十九話 side 雨水 (後書き)

今回の魔狼の名前ですが最初はもっと長いのを考えてましたがチエツクする内に子供が考えた名前じゃないなと気づき見た目からのシロと言つ名前になりました

二十話 side キャロ

「雨水さん。何かこのじょうきょうに見覚えがあるのはわたしだけですか？」

雨水さんは苦笑いでシロと目の前の黒い獣を見比べてやれやれと言った仕草をする

「この狼の名前に魔法の魔が付いているのを忘れていた」

「で、ですよね」

腕の中にシロ、肩にフリードを乗せて私は今すぐにキャンプに戻る準備をする

あーそれにしても本当に見覚えがあるなー

特に涎を垂らされて見下ろされてる具合が

「えっと、確かに魔狼であってるな。にしても何でさー・・・何で子犬サイズから前回の竜種並になるとは」

「シロちゃんも将来あんなに大きくなるんですね」

「さて、ゴホン」

咳払いをした雨水さんは大きく片手を前に突き出して宣言した

「聞け！アホ犬共！」

「ガアアア！！」

「まあそう怒るな、馬鹿犬。こつちが折角テメエらの連れを持ってきてやったんだ。喜べ」

「ガウツ！」

何だか歓迎の様子が一切見えない

まあそれは幾ら言葉が通じないにしても馬鹿にされているくらいは何と無くで把握できるだろうし多少なりはもしかしたら言葉を理解しているのかも知れない

「あん？自分達から捨てた？・・・ふふつまあ何と無く予想は付いてたさ・・・だから俺はお前等を罵倒した訳だが」

自分達から捨てた？私と似てる

それで雨水さんは怒ってくれている？

「このまま俺達はこの・・・俺等はシロと呼んでいるが、このシロを連れ帰っても問題は無い」

「ガウツ」

「ああ、帰る帰る。だからって折角俺等が苦勞して見つけたお前等だ、せめて捨てる事についてお前等がシロに謝って貰いそれで帰ろう」

「ガアツ!!」

巨体の黒い狼に囲まれている状況で更にその狼が怒り出した

私は震えを我慢するので精一杯なのに雨水さんは堂々としている

「おっと！此処で俺等に手を出せば状況不利になるのはお前等だけ？」

「ガ」

「お前等、俺の職業を忘れた訳じゃあないよな？俺の職は自然保護、それは危険から動物を保護すると同時に人間に危害を加える危険な動物を駆除指定出来るって訳だ」

え？そんな権限ありましたっけ？



雨水さんは空間モニターを宙に表示させる、そこにはイエスとノーと書かれた何かの最終決定のような画面が表示されていた

「確かにお前等だったら此処で俺等を殺すのは容易いだ。がしかしその後はどうだろうなあー、最初らへんは派遣部隊も少数だから問題なくても五度目くらいにはお前等でも対処出来ない数だぜ？さあどうする？此処でプライド押し折って謝れば丸く収まるんだぜ！」

か、格好良い

雨水さんが輝いている

「グルルウ」

「ガウツ」

「ガウウ」

それぞれで会議でもしているのか一箇所に纏まり話し合いをしている、雨水さんと言うと魔狼の群れの更に奥をジーツと見つめている、睨むに近いかな？

「決まったか！馬鹿犬共！」

黒い狼は雨水さんの前に集まって頭を下げる

「コッグルウ」

「アハハハッ！俺にじゃねえだろお！シロにだろ！？ハハハッ！誇り高き魔狼が良い感じだな！」

あれ？雨水さんが壊れ・・・

黒い狼の皆さんも若干怒っているような雰囲気が出ている

「コッグルウ」

「ガーウッ！」

シロは小さな手で黒い狼の頭を叩いた

「さて！帰るぞ！」

「も、もう大丈夫なんですか？雨水さん」

「大丈夫だ。アイツらはどうやら長以外は馬鹿だ！この奥っばいから逃げよう！マジ早く帰ろう！」

あ、そう言う事ですか

キャンプに戻ると雨水さんは疲れたように椅子に座る、そしてダル  
いと一言呟いて空を見詰めた

「まったく最悪だな」

「ですね」

「どつやらそいつはアイツらの頂点の娘らしいぞ」

へえー・・・へ？

「うん、正確には今の長の息子の腹違いの妹って位置だな。毛並み  
が白なのもそのせいだ。魔狼の長は代々白いらしい。んとキャラに  
はちよつと難しい話だがよつは後継者争いだな」

「え？え？！じゃ、シロってとっても凄いッ？！」

ってそんな事より娘って事は女の子だったんですか？！いままで男  
の子と勘違いしてました

「うん、まあ将来は魔導師で言う所のB+からA-くらいは望めるな」

「ガウ！」

「お！誇らしげだな」

「キョクルー！」

「お前が絡む意味が分からん」

そんな凄い狼と分かってなお、前と変わらず接する雨水さんはやっぱり凄い人なんだなあーって私は思います

・・・啖呵切ってる雨水さんは格好良かったな

二十話〜side キヤロ〜（後書き）

雨水がキヤロには難しいと言った内容。

魔狼の長は代々オスが担っていた、そしてそれに合わせるように毛並みが白で生まれてくるのは必ずオス、しかし今回何故かメスで白い毛並みが生まれてしまい一族から追い出される事になる。それがシロ。

二十一話 side 雨水

前回のあらすじ

森を二時間くらい搜索すると意外とすぐに発見 理由、デカかったから 人語が理解出来るならと嘘八百の大立ち回り 意外と正直モノなのかアツサリ信じる しかし観察眼が奥に居るであろう奴を捉え引き返す事に決定 どうにか謝罪までこじ付けあとはトンズラ シロは正式に自然保護隊のペットになった

「と言う事があった」

今日は珍しく自然保護隊。と言うか俺とキャロにお客さんが来ていた

165

「それは・・・ご苦労さま?」

「ああ、苦労したんだよ。エリオ」

そう客とはエリオ。中継ポートまで着いてきた過保護な保護者のフエイトさんは俺にエリオを預けるなり全速力で仕事に向かっていったなんでも急な事件が入っているだとか、それにしてもミッドから此処までの道のりは割と子供でも大丈夫なんだが観光地区もあるような世界だし

「エリオ君！来てたんだ！」

「あ、ルシエさん。久しぶり」

「キャラで良いよ、同い年くらいだとおもっし」

聞いた話ではエリオも局入りしたらしい

まあ仕事自体はしてないから見習いみたいなもんだけど、扱いとしては執務官補佐

・・・あれ？また俺より上の人だ

「「どうしたんですか？」」

「ん？いやあゝ、世の中って不思議だなあーって」

「「？」」

「ガウツ！」

「わッ」

最近観光区のマスコットを張っているシロはエリオの勇猛果敢にアピールをしていた

ああ、そう言えば最近フリードがキャロの命令無しに俺に八つ当たりのように攻撃を仕掛けてくるようになったなー

解決せねば！

知り合いが来たと言う事でおっちゃんが早めの休みをくれた

ナイス！

「んーだが結局俺はこの観光地区に来るしかないんだよな」

他は危険地区だったり立ち入り禁止地区だったり嚴重保護地区だったり

此処くらいしかエリオ達とまわる場所はない

「空気がおいしいって言うんですよね！」

「ガウッ！」

「いや、それは自分で決めろよ。まあ緑も多いし美味しい？んじやないか？」



別にミッドも都市って割には自然公園も多いし空気が不味いって訳じゃないだろうけどよ

「自然が多くてけっこう人気なんだよ」

「キュクルー！」

自然が多いって言うか自然しかねえよ

現在の立ち位置

エリオ シロ（歩き） 俺 キャロ フリード（キャロの肩上）

フリード重そうだな、最近大きくなってきたし・・・成長期？

「シロって魔力持ちですけど、どちらかの使い魔ですか？」

「いや、シロは元々魔力持ちの生物なんだよ。だから知力も割と高い」

「へっ・・・秋兄さん、最近僕も魔法を習ってるんですけど見ても  
らえますか？」

「あ！エリオ君ずるい！わたしも！」

ずるいってお前何時も一緒に居て言わなかったよな？

取り合えず見るにしても人が居る所は不味いので関係者以外は立ち入り禁止の保護地区の安全な所に移動し二人の様子を見る事にした

「セツトアップ！」

あれ？二人ともデバイス持ってるの？しかも支給品じゃなくて特注品だし

俺も一応デバイスは持つてるけど支給の杖で拳句にデバイスがいる程の魔法はまだ使えない

「ん？バリアジャケットは未設定か？」

「はい、まだ別に戦闘は想定してませんから」

「わたしも」

「わたしもってキャロ。お前は想定してないと駄目だろ」

「大丈夫ですっ！雨水さんが守ってくれますから！」

嫌な高望みだ

「ま、キャラの件はあとでじっくり話し合おう」

「むう」

「あ、あはは・・・」

二人とも人に見せるのは慣れてないのか少し緊張気味だが暫らくするとすぐに真剣な目になり大人の俺でも凄いなと思う程の集中力を見せ付けた

二十一話 side 雨水 (後書き)

シロが正式にフリードの立場を脅かし始めた回でした

二十二話 side キャロ

エリオ君の提案でエリオ君と雨水さんと私で魔法の練習をする事になった

「さて、まずはキャロからにするか」

私の特殊技能は竜使役。そして私はアルザスの竜召喚士としての技能である竜魂召喚を見せる事にした

雨水さんは離れた位置で座り易そうな石にエリオ君と一緒に座る

「蒼穹を走る白き閃光 我が翼となり天を」

・・・んーあれ？二人とも良い雰囲気じゃない？ちょっと羨ましい

「キャロ！ストップ！召喚するな！暴走するぞ！」

「え？」

何故か召喚前に暴走を予期され詠唱を中断された

「キャラ、集中だ。成功をイメージすれば良い・・・あと精神にぐらつきがある」

「凄い。そこまで分かるなんて、流石講師の仕事で引つ張り合いになるだけある」

「あれだな、いつそ人形でも抱きながらしてみたらどうだ？意外と多いみたいだぞ？」

「ほんとですか？」

「ああ、召喚士は別に自分が戦う訳じゃないからな。手が空いてなくても問題ないって」

「なるほど、一理あります。それに雨水さんの言う事なら試してみる価値はあると思います」

「人形、持ってません？」

「持ってない」

「エリオ君は？」

「僕?! 持つてる訳ないよ!」

「だよね」

「ほら、代用」

「ガウツ」

雨水さんは隣のシロを持って私に渡す

シロの毛はふわふわで確かに人形を抱いているみたい

「蒼穹を走る白き閃光」

「お？意外と安定、人形を抱く事によつての精神安定は効果をきしたか」

「我が翼となり天を駆けよ こよ我が竜」

「最後だな、制御率八割。まあ成功ラインか」

「フリードリヒ！」

いつも小さい子竜のフリードが四角い魔法陣を通ると一匹の凜々しい竜と化した

それはアルザスの白き竜たるフリードの真の姿

「おー！二度目で成功！やっぱ子供は飲み込みがはや・・・」

嬉しそうにフリードに近付いてを頭を軽く叩いていた雨水さんの頭が丸々啜えられた

「……。」

なんて反応したら良いんだろう？……取り合えずフリードには吐いてもらおう

「フ、フリード？」

「グルッ」

放したフリードの口から出てきた雨水さんはフリードの涎塗れで震えている

「……フ、フフ」

「雨水さん？」

「フリードオオオオオ！」

私達二人は余りの雨水さんの大声にビクリと体が跳ね上がる



「よっしゃああ！大きいナリになったら行き成り飼い主様への反抗かゴラア！」

「え？え？飼い主はわたし」

「キャラ口は黙ってる！餌をやる者が飼い主って偉い奴は言った！」

・・・餌をあげているのもわたしです

「いいぜ！受けてやんよ！どうせ魔法で風船みたいにブクブクと肥大化させただけだ！恐るに足りず！」

「あの・・・キャラ口、さん」

「キャラ口でいいよ・・・なに？雨水さん以外についてなら何でもきいて」

「ごめん、なんでもない」

「うん」

フリードVS雨水さん

どう考えても竜種でしかも力解放状態のフリードが負ける要素は皆無だけど雨水さんも何だかんだでピンチを潜り抜けている

勝負は分からない

「フリードめ、こっちがお前の弱点を抱えているのを忘れてやがるな」

弱点？

流石雨水さん。幾ら暴走してないとは言え制御外のフリードと杖も無しに相対するなんて、普通なら自殺行為です

「グルウア！」

先制はフリード。巨体に似合わず大きく素早く動いて尻尾を面として使う、雨水さんはフリードに背を向け私達の方に全力で走り尻尾をかわす

更にフリードは翼を羽ばたかせて風をぶつける

「ダイナミック前転！」

雨水さんはその風に乗って前転したかと思うと丁度私の隣の位置を取る

フリードとの距離は離れてはいるもののフリードが羽ばたけば多分すぐに追い付ける距離

「キャロ」

はう！雨水さんが何時になく真剣な顔で・・・格好良い

と言っか何で私抱きかかえられてるんだろっ？

「くはははは！フリード！もはや俺の勝ちだ！キャロがいればお前は手を出せまい！故に俺の完全勝利だ！降伏なら受け付けるぞ！」

・・・。

私は取り合えずしたり顔の雨水さんの顎を下からアッパー気味に打ち抜いた

二十二話 side キャロ (後書き)

フリードの行動はあくまで甘噛みやジャレ付き行為の延長です。敵対意思は無いですよ?・・・たぶん

二十三話 side エリオ

「エリオ・・・なんで俺は寝ていたんだろっか」

「えと、自業自得って奴だとおもいます」

「そうか」

どうやら秋兄さんは十数分前の出来事を全て忘れていているようです

ちなみにキャラ口は物凄く不機嫌になりながら雨水さんに悪戯をする  
と帰っていきました

「え〜っと、あ〜・・・魔法を見る話だったな。キャラ口は？」

「先に帰ると」

「先に？はあー全く不真面目な奴だ」

なんだか秋兄さんの将来が不安になるのは僕だけでしょうか？

「ならエリオだけでも見てやるか」

「はい！おねがいしますー！」

再度セットアップして槍を構える

「とは言っても俺は武術に精通はしてないからなー、取り合えずはいま持つてる一番って思う魔法を使ってみて」

「はい！」

槍を水平に構え詠唱に入る

そして背後に生成した五基のフォトンスフィアから連続してフォトンランサーを放つ

これはフェイトさんに教えてもらった一番の魔法でいまの僕では途中でフォトンスフィアの制御不足で魔法が消えてしまう

「ん〜・・・弱いな、しかも未完だ。まあ近代とは言えベルカから遠距離は苦手な部分があるのかもだけど一発戦闘中にも使える大技が欲しいね」

「あ、あの」

「はい、どござ」

「僕はソニックムーブとか一気に相手に近づける魔法があるので無理に遠距離にこだわる必要はない・・・のかなーって」

フェイトさんから教えてもらった、このファランクスも試験の為に言う理由が大半を占める

僕の戦闘スタイルは接近戦でもハイスピードバトルですから詠唱の暇も無い

「一理ある。だけど俺が大技を持ってろってのには強くなる以外にも理由がある」

理由

それにしてもさっきまで秋兄さんと違って真剣な秋兄さんは何だか惹きつけられるような魅力がある

素直に付いて行きたいと思うし超えたいと思う

「それはな？脅しの役割だ」

「おどし?!」

「うん、脅し。幾ら犯罪者だからってバカスカ攻撃を許されてる訳じゃないし出来れば戦闘は避けたい。そこで大技見せて実力の差を分からせるって奴だ、これで三流事件は大体解決する」

非殺傷設定だからって人に向かって刃を向けていい口実にはならな

い、か。確かに言われてみればそうですね

「それに非殺傷設定ってあれで未完成な所があるからな！。非殺傷設定だから大丈夫だよって言う奴がいたら逃げる、いいな？」

「え？はい」

非殺傷設定が未完成？そんな話、局では聞いてない。と思う

「話逸れたな。そうだな、お前は魔力変換資質があるから将来に向けてその方面の技だな、AMFが通じない天候操作系の魔法で如何だろうか。見た目も派手で魔力消費も思いのほか少ない」

「つまり？」

「サンダーフォール。天候操作系遠距離魔法もしくは天候操作型儀式魔法、魔力変換資質の電気を媒介に雷雲を生み自然の雷を操作する魔法。ようは自然現象の再現だけど自然現象故に魔法無効果フィールドも突き抜ける魔法使い殺し殺しだな！ちよつと格好良いな魔法使い殺し殺し」

「語呂悪いですよ？」

「そうか？ま、いいや。で？どう思う？」

「儀式魔法ですか」



さっきも見せたように儀式魔法はちょっと苦手な分野なんですけど

「ま、完成まではある程度時間が掛かっても良いし威力を下げても詠唱や魔力消費を削ればお手軽必殺技くらいに下げれると思うよ」

「そ、そうなんですか？」

「うん。それでも一年は掛かるだろうけどね」

一年。大技取得の期間としては短い方なのかな？

あ、そう言えば……

「秋兄さんって魔法に詳しいですけど、秋兄さんの一番の魔法ってなんですか？」

「……お前は俺にそれを聞くか」

え？え？

秋兄さんは露骨に落ち込むがすぐに持ち直して深く考え込む

「強いて言うなら俺の最大の魔法は言葉だな」

「言葉？」

「そ、俺は一般局員にも劣る魔法使いだからな。虚勢を張って言葉で打ち負かさないとやっていけない訳よ・・・だから機械だったり野生的だったり逝っちゃってる気味の犯罪者は手に負えん」

言葉。ある意味で誰も傷付かずに解決する一番の方法だと思う、虚勢を張るのだって自分を守る魔法も使えないのに危険に飛び込んでる訳だし

少なくとも誰もが簡単に出来る事じゃないと僕は思う

「・・・それにしても魔法使い殺し殺し・・・流行りそうなんだからなあー」

・・・流行らせたいんですか？僕は秋兄さんのネーミングセンスがよく分かりません

二十三話 side エリオ (後書き)

エリオの戦闘スタイルが少しフェイト寄りになり必殺技を覚えそうな感じですよ

二十四話 side 雨水

前回のあらすじ

エリオが遊びに来た フェイトさんの過保護っぷりに少し呆れるでもあんな綺麗な女性が母親ならエリオも鼻が高いと思う 観光がてらに観光地区を巡る エリオが訓練の成果を見て欲しいと言い始めた 了承 何故か寝ていた 自業自得？昼寝でもしていたらしい キャロは帰ったそうで エリオに魔法のアドバイスを 帰る前に一応キャロがキャンプにいるか端末を開く するとエリオの悪戯して帰ったと言う言葉が頭を過ぎった

「キャロ〜！！なんだこれは！！」

「ガウ？」

「キユクウウ？」

キャロはエプロン姿で目をパチクリとしながら不思議そうに俺と端末画面を交互に見る、隣でシロやフリードもキャロの仕草を真似する

「すみません、質問のないようが理解しかねます」

「いやいや！お前だろ？！俺の端末のトップをお前の画像にしたのは！」

「だめですか？」

「駄目に決まってるだろうが！恥ずい！」

何のつもりだ。しかも自分で撮影したとは思えない程に自然なプロポーションじゃないか・・・可愛いな

「いやですか？」

「嫌では無いな！」

・・・あ

「ふふん。なら良いじゃないですかっ、雨水さんも料理当番なんですから手伝って下さい」

「・・・分かったよ」

「ところでエリオ君は？」

「・・・あ」

画像を見た瞬間、全速力で此処まで来たから置いてきた可能性が・・・うん、置いてきたな

「ひどいですよ、秋兄さん」

「ハハハ！坊主も大変だっただろうな！初めての場所で一人ぼっちなんて！」

「うぐっ！」

「フェイトさん怒るかもですね」

「キュクルウ」

「……旅に出る！」

そもそもキャロのせいだと物申したいが自然保護隊に味方はもう居ない

……もう？最初から居なかった気もするなあ

「俺はフェイトさんに打ち勝つ為に逃げる！」

「それを打ち勝つとは言わねえよ」

「だってあの人、子供関連で怒ったら絶対般若になるタイプだよ！」

確信持てるね。しかも権力財力実力どれを取っても勝てる要素は無い・・・つまり逃げるが勝ち！

むしろ逃げないは負け！

「っていま逃げてどうするんですか。フェイトさんが来るのは明日でエリオ君は今日は泊りだよ？」

「そうなの?!」

「なんでエリオが知らんねん」

「連絡があつたのはさっきだよ、エリオ君が知らないのもとうぜんです」

「・・・誰かの所に泊まるの始めてだな」

「あれ？お前って局の保護施設に居るんじゃない？なかつたっけ？既に誰かの場所じゃん」

明確に言つたら公共の場だから皆の場所か？

「「「「・・・。」「」」」」

フリードとシロに噛みつかれた・・・ダブルだと?!

シャワーを浴びているとエリオが飛び込んできた

「キャロから逃げてきたか」

「分かります?」

「まあな、それ以外は自然保護の女性に誘われるくらいだからな危険は」

男の子を女性はやたら揉みくちやにするがあれは何なんだろうな?

良かれと思っているのだろうか

「服ずぶ濡れだぞ? パジャマはあるからもう脱いで入っていけよ。  
一人用で狭いが子供のお前なら問題ないさ」

「い、いいんですか?」

「髪でも洗ってやるよ」

「ありがとうございます!」



第一回エリオ寝させる場所争奪戦がこの後繰り広げられ死闘ジャンケンの末に  
俺が勝ち取った

・・・いらねえ

二十四話 side 雨水 (後書き)

原作設定を見返して気づきましたが原作ではまだ二人は出会ってないですね

二十五話 side エリオ

同じ布団で誰かと一緒に寝たのは何年ぶりだろう？

古い記憶にそんな感じの無い訳じゃないけど僕の記憶かは分からない

「眠れないか？」

「え？いい、いいえ」

「返事が返ってくるって事は起きてて眠れてないんだな」

くすくすと小さな声で笑う秋兄さんは楽しそうでこの状況を自然に受け入れていた

秋兄さんが僕を本当の弟みたいに接してくれるから、僕もまるで本当に兄が出来たような気分になる

「そだ、さつき食事の時に言ったがお前はいまは局の保護施設にいるんだよな？」

「はい、フェイトさんも忙しいですし自宅に帰って来ない事も多いですから」

「ふーん」

何となく秋兄さんの方に体を転がすと秋兄さんは僕の方を見ていた  
ビックリした

「あれだな、急いで泣きながら仕事をしているフェイトさんが目に  
浮かぶ・・・エリオが待ってるうってな」

「泣きませんよ、フェイトさんは強い人ですから」

「なら泣き目だな。いわゆる萌え死にさせる勢いで」

否定できない！何か段々否定出来なくなってきている自分がいる

「そだな、うん、じゃあエリオも自然保護隊に来てみるか？」

「はい？」

話の流れが掴めなかった。突然過ぎるし突拍子過ぎる

自分がどんな顔で聞いているかが想像出来ない・・・夜でよかった  
それにしたって突然過ぎて頭が付いていかない

「だから向こうで何してるか知らんが暇だろ？こつちならキヤロもフリードもシロも・・・まあ俺も居るし過ごしやすいかなって別にミッドへは普通に行けるからフェイトさんとも会えるしな」

「その、えと」

「すぐには言わんさ。主に俺がキヤロからの被害をお前に逸らしたいだけだからな。アハハ」

その理由はどうかと思っけど誘いはとても嬉しかった

「じゃ、寝るか。お前も寝ろよエリオ。おやすみ」

「おやすみです。秋兄さん」

おやすみと言い合っただけなのに心が温かい気持ちになった

が流石秋兄さん、ただでは終わらず・・・感動で暫らく起きていた僕を寝相で布団から蹴り出した

「くしゅん」

「エ……エリ……エリオ。エリオ君！」

「やうッ！フエイトさん?!」

「ふふ、キャラだよお。おはよう」

「あ、おはよう」

見渡すと秋兄さんの姿は見えない

キャラは笑顔で顔を拭く為の蒸れタオルを渡してくれた

「雨水さんならもう仕事に出たよ」

「え?!じゃあ僕ってもしかして寝坊しました?」

「ん〜特に早くおきないといけない訳でもないから寝坊じゃないかな」

キャラと一緒に簡易テントの外に出るとフリードとシロが寄ってくる

「キュクッ!」

「ガウッ!」

「二人ともおはよう」

他の自然保護隊の人達も既に外に行っており残ってる人は数人だった  
女性ばかりで少し居心地が悪かった

「エリオ君はそのままミッドに帰るだろうけど雨水さんには会って  
いく?」

「あ、その・・・また来るから別にいいかな」

「・・・うん。そうだね、またきてね」

この後、ミッドに帰ってすぐにキャロから画像付きメールが届いたので開いてみると僕と秋兄さんが仲良く二人で寝ている姿が映っていた

二十五話 side エリオ (後書き)

エリオのお泊りで親交が深まる回でした



二十六話 side 雨水

前回のあらすじ

俺の携帯端末のトップ画面がキャラの画像から変更できない 交渉を試みたが取り付く島無し 仕方ないので放置 色々あってエリオと寝ることに 年下だがエリオと話すのは結構良かった 別れは言えなかったがまた来るらしい

「で、此処は何処だ。マース・ヒューズ三等陸士殿」

「でつてお前さん、もしかして話も聞かずにノコノコ付いてきたのか？雨水秋春三等陸士殿」

「俺はお前を信じてるからな」

「信じるって不思議な言葉だよな、思ってもないのに言ってみれば大概の人間関係は如何にかなる」

「なに急に悟り開いてんだよ老け顔」

まあ老け顔と言うか現に俺より年上な訳だが

敬語とは敬意を表する言葉と書く、詰まる所はコイツにはいらん

「よしよし、同じ部署のヤツに雨水秋春は二桁にも達してない美幼

女の写真を個人端末のトップ画像に登録してるって広めてやんよ」

「やめえい」

「ふはは！止めたって遅いわ、ネタ帳に保存っと」

態々懐から手帳を取り出して本当に書き始めやがった、アナログめ！

「お前なんで態々手書きなんだよ。って何か落としたぞ？」

「あ！おい！馬鹿、拾うな！」

拾うなどは・・・拾えと言う意味だと俺は思っている

拾ってみるとカメラ目線でピースポーズを取った可愛い女の子が写っていた

「おめえ盗撮はアカンやろお」

「アホかッ！誰が盗撮だ！ちゃんと承諾は得ているわ！」

「これ背景は公園か？お前まさかその辺の・・・このロリコンめ！」

「娘！このちよープリティィキューティーラブリーエンジェル可愛い子は俺の娘だ！」

エンジェル以外は全部大雑把訳で可愛いって意味だと突っ込むべきか?!それとも何でそんな食い気味なんだって方を言うか?!

切り上げよう

とにかくこの話をさっさと切り上げないと面倒な事になると違う

「へ、へーそりゃ良かった」

「今年で十一歳でなく、この写真は八歳の時なんだがいまはもっと可愛いぞ?」

「あ、はい。そうですね」

「お前さんとこのキャラちゃんにも負けねえぜい」

「ん?十一?確かヒューズの年齢は二十代後半、そこから大雑把に引いたら十代後半」

「子供作るの早すぎねえ?!管理局は子供の内から能力さえあれば仕事につけるし、そんな子供は子供らしからぬ大人びた感じになるだろうが幾らなんでもそれは無いだろお」

「別に張り合おうとは思ってないんだが」

「お互い娘は可愛いってな」

「は？キャロはフェイトさんの娘か妹だ。俺は赤の他人で旅仲間」

「……お前さんは」

何だその残念なモノを見る目は、チヨキでシバくぞ

話は大きくずれてしまったが、俺はヒューズに連れられ管理外世界に來ている

理由としては、管理予定の管理外世界の視察。と言う話で俺は來ているはず

暫らく歩くと明らかに研究施設ですと言いたげな建物が見えてきた

これは可笑しい。ここは無人世界との事だったはずなんだが

「やっぱりか」

「何がだ、いい加減教えろ」

「あ、ああ、外れてたらこのまま観光といきたかったが如何やらそうも問屋は卸してくれねえって訳か」

「いいから説明しろ」

ヒューズの話を纏めると・・・これは特務で次元犯罪者が行なった違法実験の跡地であるアジトの調査及び可能であれば犯行の証拠を持ち去る事

・・・おいおい！何で俺やヒューズみたいなたつ端にそんな任務が回ってくる訳ですか？！

「ハハ、お前さんのいまの顔を見れば考えてる内容は大よそ検討は付くが勘違いしてもらっちゃ困るのはこの特務は俺におりた話つてところだな」

「・・・なら何で俺を巻き込む」

「ロストログア関係の事件なんだし鑑定士を連れて行って損はねえだろ？」

・・・嵌められた！！

二十六話 side 雨水 (後書き)

ヒューズのフルネームは変に捻るのも可笑しいのでそのまま持ってきました

二十七話 side 雨水

前回のあらすじ

ヒューズに騙された 以上！

「廃棄されたのは最近か」

「みたいだな、足場わりい」

砕けたガラスをじりじりと踏みながら進むと生体ポットの並ぶ部屋に辿り着く

「おいおい、マジかよ」

「こりゃあ、どデカイ当たりだな。予想通りとも言えるがな」

「予想してたんかい。何が入ってたんだろうな、コレ」

次元犯罪者が生体ポットを所持している理由なんて数える程にある訳じゃない

単に魔法生物を使った研究か、単に人間を使った人体実験か

どちらでも面倒で非道なのに代わりは無い

「ん？分からないのか？お前さんのその目でも」

「その、目・・・だと？」

「レアスキル。目に関係してるんだろ？使用時にコンタクト状の魔力膜が張られてる。色はお前さんの魔力光の白と茜を混ぜた感じの色ってところ、あたりだろ？」

マジか！

自分でも全く気付かなかった。ってか黒い目からそれを被せてあるんだから外からは殆ど見えねんじゃね？！

この際、何で俺が名目上レアスキル持ちって知っているかなんて気にしないようにしよう

「知ってるなら使っが」

観察眼のスイッチを入れて瞳を切り替える

生体ポット内部 血液反応 魔力資質Sランク相当

中身は人間だったらしい。辺りを一応見渡しておくか・・・

敵意 有り



敵意かぁー敵意敵意・・・てき、い？

「ヒューズ！やべっ、むががふっ」

「敵さんだろ？大声を出して如何するよって」

オプテックハイド 発動確認

いい加減視界がウザイので観察眼を切る

「幻術魔法って普通三等陸士が覚える魔法か？」

「このくらいなら基本技能だ」

あれ？そだっけ？

魔法が出来ないから割とちょっとした技能でも高く見えるんだろうか

暫らくすると円柱型のカプセル風機械がウロウロし始める、恐らくあの一つ目が赤く光ってるって事はセンサー式なんだろうな

ん？だけど何のセンサーか知らんが完全遮断できる程の幻術魔法は流石に基本技能じゃないだろうと思う

「なんで廃棄した場所に見回りを」

「ワザと廃棄した、とか？誘き出す為に」

「・・・そうか。一可能性としては有りだな、引くぞ」

「え？どうやって？滅茶苦茶ウロウロしてるんですけど・・・あの丸箱型一つ目機械」

「お前さんのネーミングセンスが分かった気がする」

しかしマジで如何するか数はざつと五体、武装は大きさから見て対人武装。一体一体はそこまで強くないはず

調査用っぽいし

都合が良い事にセンサーは完全に遮断できているからヒューズの魔力が尽きるまでは気付かれない

「さて、如何する」

「アイデアはあるかい？お前さんは一応魔法無しで何回かは戦ってきたんだろう？」

「アホか俺の武器は言葉だ。あんな会話無しで無言で発砲しそうな相手は無理。そっちは」

「基本的な魔法は一通りだけど補助型の魔導師だからなく期待は・・・

・な  
」

交戦は難しいか

ま、最初から逃げる算段を立てるつもりだったから良いか

「お前武装は？なんか持ってたろ」

「最近A M Fが流行ってるからって無理やり携帯許可を落として手に入れた小型銃とその弾倉一ダース」

「流行ってたのか？」

「ああ一応一部で、お前さんは？」

「使えない支給の杖が一本」

小型銃の装填弾数は二発。弾倉が二つて事は銃の中身を合わせて計十四か

「走った状態で何分くらい幻術は続く？」

「八分が限界」

帰り道まで走って倍は掛かるな

「アイツら奥に向かっているが入り口付近に伏兵はいると思うか？」

「如何だろうな。俺なら二体は配置する」

「ま、そりゃ突入部隊よりは少ないだろうからそんなもんだよな・  
・うし！ならお前と俺の武器交換な！俺、魔法使えないし。そして  
突破作戦を考えたぜ！」

「大声つぽく小声とは器用だねえ」

まあな！危機的状況なら人間大概の事は出来るぜ！

二十七話 side 雨水 (後書き)

雨水の魔力光をサラッとだしてみました

二十八話 side 雨水

前回のあらすじ

廃棄された研究所を探索中囲まれる 丸箱型一つ目機械、五体に遭遇した！ が即逃げるを選択

「逆方向に向かってくれて良かったぜ」

「支給品の杖でもないよりはあった方が使える」

五分か

外に伏兵がいたらヒューズに倒してもらいたいし此処は魔力温存の為に

「ヒューズ、もう幻術解いても良いんじゃないか」

「・・・そうだな」

俺もヒューズも後ろを振り向いて追ってを振り切ったのを完全に確認すると止まる

そして走りから歩きに変える

「さて、外に居た場合は入り口を見張られてるから確実に逃げるって選択は出来ないだろうな」

「お前さん、さっきは策があるって」

あ、やべ。ヒューズを安心させて敵の前まで連れて行くこう作戦にさつそく亀裂が……

「さて準備準備」

廃棄研究所出口付近

俺達は現在予想通り待ち受けていた敵を隠れながら覗いている

「さて一人一体を相手取る。分かってるな」

「俺は良いが……お前さん。本当にそれで戦うのか？」

「もちろん」

「自然保護が聞いて呆れる」

「俺は命と自然を天秤に掛けるなら即命を取る」

ヒューズの深い溜息を合図に俺らはそれぞれ飛び出す

すぐに向こうは気づくが俺とヒューズの魔力弾で分断される

これで予定通り一対一の構図が完成

「さて、お前が俺の相手な訳だけど」

ヒュンと音がして俺のすぐ横を何かが通り背後で爆発

・・・こう、がくへいき？

ちよ！質量兵器じゃないの?!なんで光学兵器?!

「武装もちゃんと観察眼で見っておけば良かったーッ!」

ヒュンヒュンとレーザーが飛び交う

どうにもレーザーの標準がキチンとしてないのかまだ未成品なのか結構標的からブレている

俺は研究所から拝借した可燃性の謎の液体を取り出し投げ付けて銃



で爆発させる

「お？思いのほか・・・そうか普通に考えて機械は火に弱いか」

ダメ押しに残りの可燃性液体をぶちまけて爆破

見事こんがり丸箱型一つ目機械を一つ完成させた

「ああ、予想以上に被害が」

当然燃やしたは良いが消す方法など皆無の為、自然消火を待ちたいが・・・森の中だしな」

「そつちも終わったみたいってこりゃー派手にやったな」

「仕方ないだろ」

「報告書と始末書が・・・」

「俺は手伝わないからな」

後の報告では急遽消防隊を呼んだのでそれほど大きな被害にはならなかったが研究所の中にいた五体は発見出来なかったらしい

「夜間警邏？」

結局本局で軽い報告書と森を燃やした始末書を書いて帰ってくると突然おっちゃんに夜間警邏を頼まれた

何時もは昼間の警邏の為、夜間の仕事は初めてだと思う

「俺一人で？」

「いや、今回はキヤロちゃんを見守る役としてお前に一緒に行ってもらおうと思ってる」

「なるほど確かに幾ら局員だろうと子供一人に夜間警邏は無いよな」

「そう言う事だ、引き受けてくれるな？」

「任せとけて！これでもキヤロの子守にはかなり慣れてるんだぜ」

ん？でも此処の夜って街灯も無くなってかなり暗くなかったか？

二十八話 side 雨水 (後書き)

戦闘シーンが結構難しい

二十九話 side 雨水

前回のあらすじ

本局にて簡易的な報告書と始末書を書き終え自然保護に帰る　するとすぐにおっちゃんに出会って夜間の警邏を頼まれる　割と軽い気持ちで承諾　で現在に至る

夜間警邏とは。ようは密猟者は昼夜待つてくれないので当然夜間の間も警戒を怠る訳にはいかないと云う訳での仕事なのだが

「真っ暗だな」

「よる、ですからね」

森の夜は俺の予想を遥かに超えて暗黒だった

「じつ言つと俺って暗いの苦手なんだよね」

「何となく感じます」

それにしても昔の人は木をお化けと勘違いしたそうだけど仕方ない！本当になんかお化けの類に見えそうだもん

ゆらゆらとマジ恐ええ

「帰りたい」

「あと少しです」

「大体誰もこんな夜中に来ねえって」

「そう言つとやってきそうだから止めてください」

確かにセリフ的にフラグっぽいか

お化けか密猟者が・・・どっちも会いたくはないな

「わたしより恐がつてどうするんですか」

「キャロ。あのな？幾つになっても怖いモノは怖いんだ」

「あれなんですか？雨水さん」

「木だ！木に違いない！むしろキャロの目が悪い！」

一瞬キャロの怒りが沸点に達した気がしたが気にせず手を掴みその場を走り去った

「まったく！あれが密猟者だったらどうする気なんですか！雨水さ  
ん！」

「キャラ、俺らは何もなく見回りを終わらせた。OK？」

「いっぺん一人で行ってみます？」

キャラが黒い！いまはフリードもシロもないから物理的攻撃はな  
いだろうけど何だかそれ以上にくるモノがある

「さ！わたしがついてますから見に行きますよ！」

「いやーもうキャラ一人で行くって選択はないかな？」

「女の子一人を暗い森にほつり込むつもりですか」

「・・・だよなー」

俺としては一向に構わないがそれを自然保護隊の皆にバレるとやば  
い。ガチで一週間くらい一人夜間勤務になりそう

「キャラ話がある」

「聞きましょう」

「明日プリンとケーキ買ってくるから今日は止めよう」

「・・・だ・・・だめ、ですよ？」

あ、意外と揺らいだ

流石に確りしていてもまだまだ子供か

「こっちはそう言った店はないからな、最近食べてないだろ？」

「だ、だからなんですかつ、駄目ですよ！しごとは妥協しません！」

「んん？だがお前の見間違いだった可能性もあるよな？その可能性で話を進めるだけで甘い物が手に入るんだぜ？」

「うぐぐ」

「さあさあお年頃のキャラ口ちゃん。甘いケーキは食べたくないかい？いまならアーンってしてやるよ？」

「くうう」

何でそこで拳を握るのが俺にはサッパリ理解出来ないがこれならイける！

何だかプルプルと震えて前に大人キャラ口からくらった魔力パンチを

思い出しそうになるけどいまは余裕の態度を崩さないようにしないと  
交渉事の基本は余裕のポーカーフェイス

「しょ、しょうがないですね！わたしは何も見なかった！これで良いんですよね！！」

うし！ハラペコキャロの攻略なんてこんなもんよ！

「何かムカつく事をおもわれた気がします」

「気のせいだ。さ、帰ろう」

「恐がりな雨水さんのために手をつないであげますよ」

「そりゃありがたいね」

初めての夜間警護は何の事件も無く平和に終わった

・・・とは問屋が卸さなかった

「見張っていた、だと?!」

「当たり前だろうが新人の、しかもお前等みたいな若いのを二人だけで行かせる訳ねえって普通に考えたら分かる事だ」



後日、自然保護隊の女性陣には自腹で甘い物をご馳走する嵌めになり男性陣には雑用係りとして扱き使われた・・・俺だけ

え？キャラ口は？共犯だよね？

二十九話 side 雨水 (後書き)

そろそろ時系列的に原作へのカウントダウンなので入り方を考えないとなーと思いながらの執筆です

三十話 side 雨水

前回のあらすじ

最初から作り物と分かっているお化け屋敷と違ってリアルは怖い  
何故かこう言うのは平気なキャラを連れて夜間警備 キャロが何か  
発見したモノの俺が逃走 魔法がある世界なのだから幽霊がいても  
可笑しくない 自然保護の全員にサボりがバレる 約一ヶ月のタダ  
働き決定

「デートですね！」

「なにが、ですね、だ。俺の両手を見て言え」

あるのは大量の甘味系

前回の罰の女性陣へのプレゼントをミッドに買出し来ている

「荷物は男が持つそうですよ？」

「男女平等の世界だ」

「あ、そこお店に行きましょう！」

「聞けよ」

「ふう〜ようやくゆっくり出来るー」

「ふふ〜ん、わたしのおかげですよ」

・・・そうだな

二割くらいはお前のせいでこの状況だな

「そう言えばこの間、聞いた些細な話なんだがエリオの方が年上なんだってな」

「え？ほんとですか？」

「うん」

「ど、どしよ！年上の人に君とか言っちゃった」

「まあ上って言っても二ヶ月程度だけな」

だから年齢的には同じ九歳

九歳か、やっぱり周りからは俺とキャラは年の少し離れた兄妹くらいに見えるんだろうな

うんうん

「雨水さん」

「んあ？」

「食べさせてくれるって話じゃなかったですか？」

「さっきした」

恥ずかしかった

本当は周りはそんなに気にしていないのだろうけど精神的にくるモノがあった

「減る物じゃないですし」

「減る。俺の心って言うか精神って言うかその辺が減る」

「ならいいですね」

言い切った！？

カチャリと音を立てて俺の目の前に置かれるケーキ

「なあ」

「なんですか？」

「さつきも食べたよな」

「はい」

「ふとッ」

市街での魔法攻撃はミッドの法で厳格に規制されています

「シューター?!おまつ、申請無しに。バレたら」

「大丈夫です、管理局のひとも女の敵へのこっげきと言えば許してくれます」

そんな緩い組織になった覚えは・・・んーこの辺りを仕切ってるのは確かあそこの部署だったな

面識もあるし、もしかしたらその理由で通っちゃうかも

厳重注意は免れないにしてだろっけどね

「はあー」

「溜息を吐きたいのはこっちです、まったく雨水さんは」

「はい、キャラ。アーンして」

「まだとちゅ・・・あむ、ふあったくうひゅいはんわ」

ん、正面から見るとクリームを口に付けて美味しそうにケーキを食べる美少女

俺は結構役得なんじゃないか？

うん、そう思うと出費も安いと思えるな

「ひいてます？」

「全く全然これっぽっちも聞いてない」

待機スフィア十六

「わーデバイス無しで詠唱無し更にはほぼ無動作でこれなんて成長したねー」

「んぐ、はむ、誤魔化されませんよ」

「なら、はいアーン」

「あーん」

「美味しい？」

「ケーキに罪はないです」

美味いらしい

俺だけかも知れないが俺はケーキの細かい味に興味が無いので大概なら甘い、美味しい、美味しいと思うのでキャラの意見は結構参考になる

「結局なんの話だった」

「さあ？」

「ま、いつか。少し食べるペース上げるよ。お土産が駄目になっちゃう」

甘い物は別腹と言うけどもこれはもうご飯がサブで甘い物がメインって感じの勢いだよね

他の女性局員も少食の割に甘味系は確り食べるし、ってかむしろ飯を残してデザートのみ食べるなんて人も居たような・・・ま、別に学者じゃないし深く考えてもしようがないけどさ



「わかりました」

はあーこの大荷物をまた運ぶのか、キャ口は・・・手伝って、くれないよね

三十話〜side 雨水〜(後書き)

ケーキの好みはチーズケーキです・・・書く事が特にならない。  
感想待ってま〜す！

三十一話 side 雨水

前回のあらすじ

罰ゲームの買出し キヤロも付いてきた は良いが荷物を持ってく  
れる訳ではなかった 真実は勢いで約束を果たす為だった 美少  
女にアーン HPの限界です キヤロの魔法の成長が少し見れた  
帰るとフリードとシロへのお土産を忘れていて噛みつかれた

「今日はおっちゃんとか」

「別に始めてって訳でもねえだろ」

「まあな」

今日はおっちゃんと共に警邏

男二人で・・・これならキヤロの方が断然マシだ

「そいやお前等が保護隊に来てもう結構経つな」

「半年以上か・・・もうちょいか？」

「最初はこんな餓鬼共に勤まるか不安だったが」

「そんな事思ってたのか」

「ああ、自然保護隊のシフトは不規則だからな。若い奴はどうも・  
」

それで中年か物好きしか居ないのか

此処に来て新たな発見だ。俺もキャロも気にしてなかったから考えた事もなかった。かな？

「実際俺も家族をミッドに残してこっち来てるからなあ」

家族をミッドに残してねえー……かぞく？

「家族って父親母親の事か？」

「は？妻と娘に決まってるだろ」

「つま？」

「妻」

「むすめ？」

「娘」

「はあああああ？！！」

子持ちだったのかおっちゃん！いや年齢的には有り得る話ではあるがそんな話一度も聞いた事が・・・

いやまあ家族の話なんかしようとも思ってたけどさー

にしてももっと早く知る機会があっても・・・

「キヤロちゃんから聞いてないのか？」

「キヤロ?!聞いてない聞いてない!」

「・・・ま、気にすんな」

「なんの励ましたコラア!」

絶対ワザとだ

帰って聞いたらたぶん「え?保護隊のみんな知ってますけど雨水さん、もしかして・・・」とか言いそう。しかも笑って

・・・段々俺の中のキヤロが黒くなっていくなあ

あくまで俺の中でだけ・・・本人が聞いたら怒りそうだから悟られないようにしよう

「キャラちゃんと同じくらいの年だな」

「んーんー有り得ないな」

「喧嘩売ってるのか？売ってるよな？買うぞ？」

「さて、向こうも見て周るぞ」

おっちゃん何気にガタイは良い

流石密猟者を何人も相手取っただけあるな

「お？あれ、シロじゃないか？」

「シロだな、子供に囲まれて何時もの風景だ」

「ほお〜」

シロは女の子に人気だ、人形っぽいとかそんな感じだろうな

ちなみにフリードは男の子に人気。まあドラゴンって響きは何かがつけえよな

「キャラちゃんの使役術は凄いやな」

「ん？」

「魔狼つてのは本来プライドの高い生き物であんなに人懐っこくなるような動物じゃねえんだよ」

「あーそのことが」

「驚かないんだな」

「それはもう」

なんたつて幼くして真竜クラスの加護を得ている天才召喚士

鳥獣の類程度なら楽に手懐ける。本人の意思があるかは知らないけど

「ホントにお前とキャロちゃんの関係はよく分からねえんだよな」

「何処が、分かりやすいだろ。かなり」

「じゃあ口に出して言うてみる」

「旅仲間」

「じゃあ旅をしていない時はなんだつてんだよ」

・・・あ、確かに

三十一話 side 雨水 (後書き)

ね  
キャラとの関係性に未だに悩みます、兄妹って感じでも無いですし



三十二話 side キャロ

自然保護、名前だけ聞けばとてもゆったりとしてそうな部隊ですが、その活動はとてもハードな一面を持っています

「その密猟者！ここは保護区域ですよっ！」

「うるせえガキ！」

「がき？」

どうして犯罪者の方々は口が悪い人が多いのでしょうか

私は保護隊の人達に連絡を取りながらマニュアル通りに密猟者を追い込みを掛ける

「フリード！」

「キュクル！」

成功の感覚を思い出すように腕の中の熊のぬいぐるみを抱きしめる  
ちなみにぬいぐるみはバリアジャケット展開時に一緒に構成されるように調整してもらった

「竜魂召喚！フリードリヒ！」

本来の姿を取り戻したフリードに跨って空から密猟者の姿を確認する

数は三名

それぞれバラバラに逃げている

それで追跡を振り切っているつもりなのだろうけど上から見れば誰が如何動いているかなんて一目瞭然

「わたしは直接は戦えないけど・・・皆をサポートする事くらいはできる！！」

私は連絡用の空間モニターを複数展開して保護隊の皆に指示を出した

密猟者は皆の連携によって被害も特に無く捕獲できた

一応私も頑張った訳ですから雨水さんから褒めてもらえるかなあー  
なんて期待してキャンプに戻る

「大丈夫？」

「いや、うぶっ、無理、だい、くっ、ハードって」

「あらあら」

キャンプに到着すると雨水さんが女性局員に膝枕をしてもらいながらダウンしていた

・・・私が頑張ってる時にい

「雨水さん」

「ああ、キャラか」

「なんで雨水さんはわたしが頑張っていたのに女性の方と・・・その、良い感じになってるんですか？」

「はあー？なに、あーメンドクサ」

なっ！面倒って。この人は！

「ボコボコにしますよ？！」

「うげっ」

うげってそれが女の子に対する反応ですかって

「駄目ですよ雨水さん。そんな言い方だとキャラちゃんが誤解します」

「いや、マジ俺そんな体力残ってない」

「もう・・・あのね、何で雨水さんがこんな状態になってるかって言うとな?」

聞きましよう

ええ、もしかすると雨水さんの最後の弁護の可能性もあるんですから

「キャラちゃんの為に頑張ったからよ」

「え?」

「空を飛んでるキャラちゃんを必死に追い駆けてたらバテたんですって」

「ほ、ほんとですか?」

あれ?でも空から見てたけど雨水さんの姿なんて・・・

あ、雨水さんて魔法殆ど使えないから普通の一般男性並みだった

「じゃ、あとの看病はキャロちゃんに任せるわね」

「あ、ちょー！」

「明日になったら何処まで進展したか聞かせてね」

行ってしまった

「う、雨水さん」

「あう、なにい、マジきつ」

「ほ、ほんとにわたしの為に？」

「。。。。」

雨水さんは深呼吸をしてゆったりとダルそうに立ち上がると私の傍まできて軽く頭を手においた

「まーな、子供を守るのが大人の役目だし？ま、実際はこの有様だけどな」

暫らく私を撫でていた雨水さんが突然私に寄り掛かるように抱き着いてきた

当然慌てた私は見上げるように雨水さんを見る

「って気絶してる?!この人どんだけ全力出し切ってたんですか!」

慌ててさっきまで横になっていた場所にもって行く

お、おもいです

「なんで雨水さんは・・・いつも格好いいですけど何でこんなに残念な人なんでしょうか」

それとも私はこんな雨水さんが好きなんでしょうか?

三十二話 side キャロ (後書き)

ちよつとした原作との変更点、バリアジャケットにぬいぐるみ追加。

三十三話 side キャロ

ぜんかいのあらすじ

あれがこうしてこうなってあんなったらああしてこうなってるわけ  
で、つまりわたしがなにをいいたいかというところ

どうしよう？

「キャロ・・・マジごめん・・・ゆるして・・・」

このムカつく寝言を吐いているのが私の初恋？の相手の雨水さんで  
私は自然保護隊の女性隊員の計らいによって二人っきりにされてし  
まった

感謝はしてますけど心の準備をさせて欲しかったです

「フリードもシロも居ないし」

起こした方が良いのかこのまま寝かせていた方がいいのか

けして世間から言わせれば格好良い顔付きじゃないし髪形も美容室  
で適当にと言いつける大雑把さ、服装は自然保護の局服だが私服は結  
構無難好き



総合的に言えば悪くは無い。みたいな微妙な点数がつく

「あ、でも肌やわらかい」

頬を突いてみる

人肌の温かさと予想以上の柔らかさ

目線を下げていけば呼吸を楽にする為か局服のボタンを幾つか外して肌を出しているのに目がいく

「ああええと、掛けふとんでも持ってきた方が・・・でも誰もいないのに離れるわけにもいけませんし」

なんででしょうか、やっぱりこう言った場合はもつと甲斐甲斐しく看病っぽい事をした方が良いでしょうか

でも私、あんまり病気なつた事ないですから看病とか知りませんが取り合えず苦しそうだから局服のボタンを外して緩めた方が良いのかな？

「雨水はいるか!」

「うひゃいッ?!」

お、おじさん？

どうしたんでしょうか。切羽詰まったように慌てて

「あ、あの！これは！別にいかがわしいとか、そんなんじゃない」

「何言ってるんだ！ヒューズって野郎が仕事の最中に大怪我しちゃったって本局から連絡が！」

・・・うそ・・・ですよ？

真っ白く清潔感のある部屋、正しく病院らしい。ヒューズさんのお部屋は個室で静かな部屋だった

「お、お前さん達か、何だ？お見舞いか？」

ヒューズさんは上半身だけ起こして何時もの笑顔で手を振っていた

・・・思ったより元気そうで良かったです

「お見舞いだったら果物だよな、ほい」

「メロン」

「フルーツの盛り合わせだ！」

向かいの店で適当に目に付き買ったお見舞いの品を他のお見舞いの人達が置いていったであろう場所に置く

「全く、元気なら元気と先に言って欲しいね。キャロを泣き止ませる、こっちの身にもなれよ」

「アハハツ！わりわりい、にしても俺の為に泣いてくれるなんて嬉しいねえ」

「ちよっ！雨水さん！」

私はヒューズさんが怪我をしたと聞いた昨日、容態も分からなく重症とだけ聞いていたのでかなり取り乱してしまった

「どんな任務でそうなったんだよ」

「んーちよっとな」

一瞬だけ二人の間に不穏な空気が漂った気がしました

「二人は自然保護でも上手くやってんのか？」

「まあな」

「バツチリです！」

「そりゃ結構なこった」

これだけ元気なら回復は早そうですね

それから私達は他愛も無い話で時間を潰した

「そろそろ、時間か。そだキャラ、少しヒューズに仕事の話するか  
ら先帰っててくれないか？」

「分かりました、余り遅くならないで下さいね。面会時間終了まで  
あと少しなんですから」

「はいはい」

言われた通り部屋から出る。仕事の話と言つのなら仕方ないです・  
ん？雨水さんが態々こんな所で自主的に仕事の話を持ち出すかな  
？いまは休みなのに

そう思うと少し好奇心が沸いてしまい扉に耳を当ててみた

「ヒューズ、お前。右足が動かねえだろ」

・・・は？いま雨水さんは何て・・・足が、動かない？

三十三話 side キャロ (後書き)

今回の話。予定ではヒューズ死亡の話だったのですが・・・そんなシリアスどうギャグまで戻せば良いか分からない、と思い急遽ですが復帰できない大怪我に変更しました

三十四話 side 雨水

前回のあらすじ

疲れで寝ていると本局から連絡 ヒューズが未確認のアンノウンによつて重症と知らされる 時間帯のせいもあり後日 病院に向かうと元気そうなヒューズ ほつとしつつ観察眼で見ると右足が動かないらしい キヤロを追い出して話を聞く 後ろから背中を刺されたと言 その際に脊髄をやられた ま、本人が気にしてないしするなと言つただからそうしよう

ついでに何でそんな危険度の高い任務についてるのか聞くと(半ば問い詰めた)ヒューズは実は優秀な査察官らしい。もう怪我で辞めるから言つても良いとのこと

一応今までの功績分まとめて昇格するらしくマース・ヒューズ準陸尉になるらしい

・・・あれ？また一人俺の上に立ったよ

「ん〜いい天気だ。絶好の警邏日和だな」

「ガウツ！」

「キユクル」

今日は危険地区外周の見回り

キャラロが休みなので代わりに散歩要員として任された

「ガツガウ！」

「ん？そつちにはいかないぞ？」

担当外だし帰り道まで遠回りだし

「キツユクルー！」

「いかねえって」

お前らどれだけ散歩に飢えてるんだよ、歩き盛りかコラ、そう言うのはキャラロと一緒に一緒に解消しておけ

「ガウガウ」

「キユクキユク」

「引っ張るな」

あれ？コイツら小さい割に結構力が・・・



「おっ！待て！」

「ガウウッ！」

「何を言ってるか分からん！」

「キユクク」

「お前でも同じだ！それに何か笑ってるように聞こえるぞ？」

せめてもつと見渡しの良い場所だったら適当に放して二匹で遊ばせておけるんだが生憎と道だから放すと逸れる

・・・はあー仕方ないか

暫らく二匹に従っていると急に二匹の動きが慎重になったので俺も慎重に進むとキャロの後ろ姿を発見した

「お前らの目的はあれか」

「ガウ」

「キユ」

どうやらそうらしい

ふむ、てっきり休みはゆつくりとキャンプに居ると思ったが何でこんな場所に・・・局員外は立ち入り禁止の安全保護区域か

まさか一人で来た訳でもあるまい

「誰か他見えるか？」

「ガウツ」

シロの視線の先にそれっぽい人間を発見

キャラと同じくらいの背丈か

・・・エリオじゃね？

「うん、エリオだな」

「キユク？」

「んー出て行くのは早計だな、もう少し見守ろう」

主に面白そうと言う理由で

「二匹も俺の意見に賛同したらしく森の方に一緒に隠れる」

さて、問題はいかにバレずに様子が伺える距離を維持するか、だな。俺は幻術系の魔法なんて一つも出来ないからなあ

「ん？でもフェイトさんから来るって連絡無かったしエリオも黙って来たのか？」

キヤロは大人顔負けの仕事量をしているしエリオもフェイトさんの仕事を喜んで手伝っていると聞く

そんなお利口子供達が大人に黙ってなにやら密会

・・・ふははっ

「よくやった。フリードにシロ」

「ガウガ！」

「キュル！」

フェイトさんに言うのは後々ゆっくり考えてにするとして、せめて話の内容だけでも聞きたいな

「フリードもシロもキヤロやエリオにバレてるし目立つから野生の

フリして近付かせる作戦は無理だろうしな」

キャラは自然での犯罪者発見で鍛えられてそうだから隠れても目聡く発見されそう

エリオはエリオで優秀なフェイトさんの下で働いてるんだからかなりスキルアップされてるだろうからな

あれ？二人とも死角が少なえ！

三十四話 side 雨水 (後書き)

vividの5巻を入手！かなりハイテンションで読んでいるとコ  
ロナ・ティミルのゴレム創成が応用の幅がありそうで思いのほか  
強そうだなと思いました

最後の番外編の時のヴィータが可愛かったです！

三十五話 side キャロ

休みの日

今日は相談があつてエリオ君に来てもらった、お仕事の邪魔にならないか不安だったけどエリオ君も話があつたらしいから丁度良かったらしい

迷惑にならなくてよかった

「えとキャロから良いよ」

「あ、エリオ君からで」

話そうと思っていたのにいざ口に出そうとすると言葉に詰まってしまふ

「・・・じゃあ僕から、実は今度新設される部隊に誘われてるんだけど」

ん？新設部隊？

ちょっと待って、部隊なんてそう多く設立されるはずもないしタイミングから見てもしかして・・・

「あの！・・・もしかして八神二佐から？」

「え？知ってた？」

「うん、私も少しまえに本局から電子メールでさそいが」

どうやら私達二人とも同じ内容の相談だったみたい

古代遺物管理部機動六課

確かそれが新設部隊の名前だったとはず、試験的に設立、運用される部隊でロストログアを専門に自由に動ける部隊らしい

「・・・ええとキャラ口は部隊入りは受けるの？」

「わたしは受けてみようと思う」

前戦部隊なら雨水さんから教えてもらった事をフルに活かせるだろうし、何よりエースと呼ばれる方々から指導を受けれると言っのはかなりプラスになる

「そっか」

「うん、フェイトさんやなのはさんと一緒の部隊なら自分のスキルアップにもなるだろうから」

「そうだね、僕もフェイトさんに拾ってもらった恩を返したいし雨水さんから教えてもらった魔法を活かせると思う」

私もフェイトさんには恩がある

フェイトさんに言ったら気にしないでと言っただろっけど出来る限り手伝える事は手伝いたい

「・・・雨水さんも一緒に来てくれると心強いんですが」

「あーむりじゃないかな？」

雨水さん魔法苦手だから

機動隊はエリート魔導師の集団だから雨水さんに誘いが来る可能性は皆無だと思っ

「「・・・はあ」」

部隊入りしたら雨水さんとは離れ離れかあ・・・嫌だなあ



私達はそれからそれぞれの不安を相談しながらゆっくりと歩く

話してみるだけでも楽になると言うのは強ち間違いじゃないらしい

「キャラ」

「うん、言いたい事は分かるよ。エリオ君」

ふと立ち止まり二人して違和感を感じ取る

視線

監視と言う程には厳しくはないですけど明らかに固定された視線、私達は再び歩いて自然を装って後ろを確認すると

雨水さんとフリードとシロが居た

「何をやってるんでしょうか？」

「雨水さん今日は仕事のはずなんだけど」

それは出掛ける前に確認済み。フリードとシロの散歩をお願いしたから一緒なのは不思議じゃないけど

それにここは雨水さんの担当地区じゃないから仕事だとも思えない

「何処で気付かれたんだろうね」

エリオ君は恥ずかしそうに苦笑する

「たぶん結構前に雨水さんの担当地区付近を通ったからその時かも・  
・でも雨水さん魔法苦手だからあの距離なら会話は聞き取れてな  
いと思う」

絶対私達を発見した時は何か面白そうな事がとか考えたに決まっ  
ます

フリードとシロまで巻き込んで・・・はあー

「秋兄さん、遠慮してるんですか？」

「違うと思う」

「そうなんですか？」

「うん」

そもそも私達に遠慮をしているなら尾行なんてしません

「どうする？僕たちの方から行ってみる？」

「んー・・・そうだね、そうしょっか」

私はあえて森の中に入り木の陰に隠れる

雨水さん達は突然消えた私達に驚きながら入って私達の近くまで寄ってくる

「あれ？見失った？！あー二人共小さくて面倒だ」

酷い言い掛かりです

三十五話 side キャロ (後書き)

ようやく原作の兆しが見えてきました

三十六話 side 雨水

前回のあらすじ

仕事中マスコット二匹が暴走 エリキャラ発見 追跡開始 キャロが難しい顔をしたり赤くなったりと面白い エリオは考え事をしていたようだが解決はしたように見える 二人の姿を突然見失う バレたな

観察眼のおかげで居場所はすぐに特定できる

「んー待ち伏せか・・・さてどう脅かすか。どうする?」

「ガウウ」

「キユクウ」

待ち伏せとなれば当然ある程度近付けば出てくるか

声はもしかしたら聞こえてる可能性もある

「あれ?見失った?!あー二人共小さくて面倒だ」

これで一先ず此方がまだ分からない状態だと勘違いさせれるか

あ、良い魔法思い出した

ドッキリにも使えるな、うん良し

取り合えず止まって草陰に二匹を連れて隠れる

「良いか？シロ、あれを使え。大よそ一分未満と言ったところだろうがこの距離に時間なら問題ない」

ふふ、覚えが早いから暇潰しに教えた魔法を使う時が来たぜ

「ガルウウー」

シロの足元に名前通り白い魔力光を放つ魔法陣が発生する

さあ！行け！

シロはゆっくり足音をワザと立てて隠れた木に近付く

たぶん出てくる、三、二、一

「雨水さん！って誰?!」

「わんっ！」

キャラ達の前に現れたのは綺麗な白髪をしたアンバー色の瞳の美少女、服装は白いワンピースと至って健全な物

さて驚いた所でそろそろ出るか

「アハハ！驚いたかキャラ！俺を驚かそうなんて百年早いわ！」

「雨水さん?!」

「秋兄さんとフリードと・・・あれ？シロは？」

「目の前にいるよ？」

前ははまだ幼女って感じだったんだがやっぱり人間より成長が早いな。いまは一歳前後だったから人間年齢だと十代後半って事になるのか、それにしても耳と尻尾も隠せてないし魔力消費が明らかに異常値、流石にまだ段階的には四割完成って感じか

「はい、ドッキリ成功〜！」

「キュクルー」

「シロもばんざーい」

「ばんざ〜・・・ガルウ？」

「「シロ?!」」

あ、魔法が解けた

ちなみに先程のは変身魔法モード人化。この魔法自体は確立された技術の為、別段難しいとは思ってなかった。なので才能あるシロに覚えさせてみた

モード人化と言うだけに他のも教えてある

更には直射型射撃魔法のショットや捕獲系魔法のバインド。将来的には番犬になって欲しい

つと言うか噛み付き攻撃からいい加減に比較的の傷跡が残らない魔法ダメージですむ魔法に変えて欲しい

「驚いたかキャロ！」

「凄いよシロ！」

「シロって女の子だったんだね」

・・・あれ？二人がシロ側に



「キャラ〜エリオ〜」

「さっきのもう一回見せて〜」

「ガルルウ」

「キャラ流石にシロも魔力切れだと思っよ？」

俺とフリードは一線引いた所から二人を見る

「キユクキユク！」

「え？あーお前に変身魔法は無理かなー。魔力量や適正を考えて、それにお前はキャラの主力だから覚えるならもっと別の魔法だな」

「キユ〜」

さて、そろそろ忘れられた組として存在感を出しておかないとな

「エリオにキャラ！いい加減こっちに気づけえ！フリードが寂しがつてるだろ?!」

「キユツ?!」

「ほら！フリードだって二人から無視されて凹んでんぞ！」

・・・たぶん

まあ喜んでるって事は無いだろうから問題ないか

にしても驚かせるつもりだったが何か違う驚きになってしまった

三十六話 side 雨水 (後書き)

はい！色々言いたい事は様々あるでしょうが人化です！ユーノ君しかりアルフしかりザフィーラしかりリーゼ双子しかり！リリカルな動物はとにかく人になれます、と言う事でシロもー！ってな訳です

三十七話 side 雨水

シロの新魔法でのドッキリ成功 したのは良いがシロに注目が行き過ぎて俺とフリードの存在が忘れられる フリードを使い存在を主張

「あ、居たんですか」

「居たよ！つて言うか、お前らの当初の目的を思い出してみろ！」

確か俺達を驚かす事だったろ？！

全く二人は・・・そりゃ行き成り美少女が知っている魔狼に変わればそっちに意識を向けるのは分かるけどさ

「シロの変身魔法はやっぱり秋兄さんが？」

「よく聞いてくれた！そう！シロの物覚えが良過ぎて一通り芸も仕込み、いっそ魔法でも覚えさせて俺が楽しようと考えて教えた魔法！」

「動機が不純ですね」

純粹だろうが不純粹だろうと知った事では無い！楽したいと思うのは誰だって同じだ！

とは言っても現段階ではまだまだ

「本当にいつの間に」

「羨は基本俺一人だったからな、キャラが知らないのも当然。ってか手伝えよ」

キャラが寝てる間も練習してる時あったからなー

段々シロもそれを面白がって仕事から帰るなりすぐに教えろと寄ってくる時もあった

「・・・僕の魔法もまだ完成してないのに」

「わたしの方は新しい魔法は教えてくれさえしないんだよ？」

あれ？何故か二人してシロに嫉妬し始めてるよ

エリオの魔法は難易度がそもそも変身魔法とは違う、キャラは新しい魔法を覚えるより今ある召喚の安定化や召喚詠唱の略化または破壊を目指した方が素質的に合っている

まあ二人して理由はあるんだけど・・・

そもそも動物から人になるメリットはあっても人から動物になるメリットは少ない

「問題はそこじゃないだろ。いまは如何に俺の教えが良いかってだな」

「そんな話はしてません」

まあ特典スキルだからデカイ顔は出来ないけどさあ

と言つかいまだに自身の魔法レベルが中々上がらないしバインドがあともうちよっとなんだけど・・・

「そうか、じゃ確かお前らが何について話をしていたか聞きだそうとだな」

「聞きだすってそれわたし達に言って良いんですか？」

「問題ない。さて教えてもらおうか？」

「それは・・・」

んゝ悪い事を隠しているって感じの表情はしてないから何かそれなりに重要で個人的内容の可能性が高いな

個人的な内容でなければ選択によっては周りも被害を受けるんだから隠す時には悪いと思うか言った方が良いか悩むって感じの表情になる

「ま、別に無理やり聞くとは思ってないけどねー」

無理やりじゃなくて自発的な誘導尋問くらいは有りかなと思ったけど

「僕は・・・その、すみません。まだ言えません」

「わたしも内緒です」

エリオに対してキャラは軽いな。同じ内容じゃない？

それともエリオが相談を持ち掛けただけでキャラ自体に悩みや隠し事は無いと考えるべきか

「んー二人して秘密かく、怪しいねえ。これは将来キャラがエリオを連れて婿さんですって日も近いか？」

「有り得ません」

いや、即答はエリオに余りにも失礼だぞ？

ま、二人とも恋とかそんな年でもないだろうけどな・・・俺の初恋って何時頃だったっけ？

三十七話 side 雨水 (後書き)

毎日アクセス数にビックリです！皆さん、非才な文ですが読んで頂き有難う御座います！



三十八話 side エリオ

「この間のお話、新設の機動課入り。お受け致します」

「ホンマか?!」

この目の前で独特な話し方をするのは偉い人達の中では比較的若く優秀な局員、八神はやて二等陸佐殿。この人が僕やキャロを古代遺物管理部機動六課に誘った人

「それにしてもフェイトちゃんと一緒に来ると思ってたんやけど意外やったなあ」

気軽でとても話しやすいけど少しは緊張する、ちなみにフェイトさんとは幼馴染らしい

「フェイトさんは多忙ですから。これは僕の事ですし折角の自分の時間を削って欲しくありません」

「その言い方はあんまり好まへんな」

「。。。。」

「ま!ええわ!それよりキャロちゃんの方も受けてくれそうなんやっつて?」

無理やりな空気の変え方だけど取り合えずそっちの方が都合が良い

「はい、また後日キャラの方から連絡があると思います」

「ん？そっぴや二人は仲良しなん？呼び捨てやけど」

「はい！フェイトさんと雨水さんのおかげで！」

フェイトさんが出会わせてくれて雨水さんが・・・ん？雨水さんはえーっと面白く緊張を解してくれた？

「雨水？ん？あー！フェイトちゃんがこないだ言っといた！エリオのパパ兄ちゃん！」

「ブフうーッ！八神二佐？！」

フェイトさんは一体どんな紹介を？！

確かにフェイトさんにはお兄さんみたいな方と言いましたし家族みたいですよねとも言いましたけど！

「ち、ちがつ、僕と秋兄さんは！」

「兄つちゆうのはホンマかいな」

「んぐ」

カマ掛けられた、何処までが本当で何処までが嘘なのか分からない人だ

「あはは！ごめんごめん、フェイトちゃんからは最近雨水って私らと同じ年くらいの友達がエリオに出来たって聞いただけや」

「・・・そう、ですか」

「それで？雨水って人はどんな感じなん？優秀な魔導師とか？」

「あーいえ、優秀な魔導師とは真逆です。雨水さんは魔法が殆ど使えません」

「使えへん？」

確か今のところで使える魔法はC・相当のシューターにかなり薄いシールドタイプのバリア、あとは最近形だけバインドが見えてきたって言うってたっけ

「・・・どうやってこれで密猟者捕まえているんだろう？」

特別格闘技法は取得していないらしいけど

前に自分の魔法は言葉だつて言つてたし説得とか交渉かな？

「はい、才能がないらしく」

「ん〜」

八神二佐が難しい顔をする

局魔導師は基本的なライン以上は才能頼りな面が大きい、常に人材不足なのもこれが原因の一旦でもあるくらい

「そか〜、まだ少し保有戦力に空きがあるからその穴埋めを探してたんやけど」

僕みたいな子供の会話からも組織的利益を引き出そうなんて流石抜け目ないです

「ん？あ、ごめんなあ。どうもまだ局の方では新入りの若造扱いやから頼れる筋が少なくてな〜」

「あ、いえ」

「やから期待しとるで！時空管理局執務官補佐エリオ・モンディア  
ル二等陸士！」

「はい！」

あれ？いま思えばさっきのって秋兄さんと一緒に仕事出来るチャン  
スだったのでは？

キャラ、ごめん！

三十八話 side エリオ (後書き)

八神はやて登場です！そしてエリオの役職に原作とは違い執務官補  
佐が追加！六課の話も出始め原作入りの日も近い・・・はず！

三十九話 side 雨水

前回のあらすじ

エリオを見送ったあとキャラに新しい魔法をせがまれる 一応必要がない事を説明するが備え有れば憂いなしとの事 何でキャラが諺なんか知っているだろう？ 仕方ないので無機物操作を教えた

無機物操作にした理由は最近AMFが流行ってるそうなので対抗策になるかなあとかそんな感じである

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

「く、くそっ！教えなければ良かった！」

早速後悔する俺に何が起こっているかと言うと知らずにキャラのプリンを食べたのに気付かず接近を許してしまい逃げようとした頃にはアルケミックチェーンで捕縛されてしまったと言う訳だ

「雨水さん！なんでプリン食べたんですか！」

「い、いや・・・ほらさー、糖分が必要な時ってあるじゃん？」

主にいま怒っているキャラにとか滅茶苦茶必要だよな

「あつたとして！なんでわたしの食べたんですか！ほら！名前もかいてあるじゃないですかっ！」

アルケミックチェーンは真正銘ただの鎖なので（しかも結構太い）平均的大人の俺でも単純な力では解けない

鎖で縛ると言う単純さだけにバインドほど弱点もない

「いや、ほら俺ミッド出身じゃないからミッド語読めないし」

「嘘つかないで下さい！なら今まで本局に出す報告書は何語でかいたんですか！」

「ベルカ語」

「ミッド語より難易度がってるじゃないですか！」

「嘘じゃない」

「どござ一部書類ですよね！」

クツやはり気付くか。と言うか一緒に仕事していた時期もあったから俺がとくにミッド語を使えるって知っていて当然か



「そつだ！だがそもそもお前の字は達筆すぎる！」

「なっ！この後に及んでわたしのせいにする気ですか！」

「ああ！字も可愛く小さいし読んで欲しいのか欲しくないのかサツパリ分かん！」

と言うかこのツルツルした表面によくこんな綺麗な字で書けたな

基準の俺がガサツなだけか？

「読まなくとも書いてあるなら少なくとも自分のじゃないってわかるでしょうに！」

「いや！分からん！もしかしたら食べて下さいって書いてある可能性も否定できん！」

「どんな可能性を想定してるんですか！」

「そんなだ！」

明らかに俺が悪いが両者一步も引かずに睨みあい、その距離を縮める

「ううう・・・わかりました」

「よし！分かったか！」

「はい、雨水さんには口頭より行動だと思いました」

些細な違いで不穏な空気が一気に増しますね

「雨水さん。このアルケミックチェーンが自動から手動に変えられるのはごぞんじですよね？」

「まあ俺の考えた内容だしね。時には機械的な判断より人間の判断が勝ると思って」

「ならいま雨水さんの命はわたしの手の中とわかっています？」

キャロが手の平を横にしてゆっくり閉じていく……そしてそれに連動して鎖がッ

「あだだだだッ！」

「さあ！謝るならいまの内ですよ！キャロ様ごめんなさい今度特大パフェ奢りますからと！」

「図々しいぞ！おまっ、くるしっ」

選択肢は三つか！

一は素直に謝るか

二はシロとフリードが子供達との触れ合いを終えて帰ってくるのを祈るか

三は新たに何か作戦を考えるか

「決めた！」

「なにをですか？」

「キャラロ！」

キャラロは俺が観念したと思ったのか少し鎖の縛りを弱める

「実はキャラロが部屋に隠しているアレを見つけてしまったんだが取り返したくば今すぐ俺の部屋に向かうが良い！」

ふっ、勝敗は決した。キャラロも女の子だ、何か見られたくない隠し事の二つや三つはあっても可笑しくない

「なっなっ！うっ、うっ雨水さん。まさか・・・あっあうっ、にゃわあ  
あああああ！！」

予想以上の反応で顔を真っ赤にしてキャロは全力疾走で男性居住区  
域の方へ走って行った

「さて、手動に変えたって事はキャロが居なくなればこんなの簡単  
に取れるっど・・・ハハッ」

さてさて、それにしてもキャロは一体なにを隠しているんだろうな  
？

三十九話 side 雨水 (後書き)

アルケミックチェーン取得。自動と手動に変更可能な少し便利な魔法になりました

四十話 side キャロ

「にゃわあああああー！ー！ー！」

雨水さんに見られた！こんな事ならもつと見えない場所に隠しておけば良かったよお

そもそも何で雨水さんは私の部屋に・・・確かに鍵は基本掛かってないですけど！

「ちよつと入ります！」

よし！誰も居ません！

補助魔法を掛けながら来たせいで魔力残量も少ない、雨水さんが追って来た時の対策用にも残しておかないといけないのに

「くつ、せめて何処に置いたか聞いてから・・・」

とは言っても雨水さんは物を多く持つタイプじゃないですし片っ端から荒らせばきつと

「無い・・・あれ？無いんですが」

正に重力を逆さまにしたみたいに荒らしましたけどそれらしき物は出てこなかった

もしかして・・・別の場所に隠されている？うん、雨水さんならやりかねない

雨水さんといえば幾らなんでも追ってくるのが遅い。まさか放置ですか？

「探し物はこれか？キャロ・・・って見事に荒らしやがって」

ツヾ！思ったとおり別の場所にあっただんですね！？

「しかし一体あんなに慌てる物とは何だろうと気になってキャロの部屋まで態々取りに行ったが」

「は？」

態々取りに行った？

それはつまり最初から雨水さんは何も見てないし取ってなかった

て事ですか？

「まあ昔の写真とか結構恥ずかしいもんな。アルバムか？これ」

雨水さんが持つているの少し弄れば誰にでも解ける簡易的な電子ロックの掛かった小さなアルバム

「しかも隠し場所がベットの下の缶ケースの中とかお前はエロ本隠す少年かベタ過ぎ」

「エ、エロってベタじゃないです！と言つかさっきのは全部嘘だったんですか！」

「うん・・・だがそれもたった今から本当になった。さあキャラ、人質ならぬ物質だ」

なんて極悪人

まさかプリン一つで此処まで発展するとは・・・騒いだのは私ですけど

「竜魂召喚」

「お前！これが見えないのか！」



「くく、アハハ、あーッははは！抜かりましたね、雨水さん！」

確かにそのアルバムも見られて困る物だし恥ずかしいですけど最初にそれに目をやってくれたのは幸いです

大体私が本当に見られて困るのはその奥に隠してある手紙の数々（正確にはラブレターと言う物ですけど何度も書いては封印の繰り返しで・・・下手に捨てて見つかるの嫌でしたし）

「それがわたしの秘密だと思ったら大間違いですよ！錬鉄召喚！フリード、プラスチックフレア待機！」

「グルルウ」

残り魔力でも魔力ダメージへの変換と錬鉄での捕縛くらいは出来る。逆に言えばこれで魔力残量は殆ど無くなる訳ですけど・・・

さて、雨水さんもこれでお終いです！

「・・・ふむ・・・ごめん、キャロ」

「へ？」

「いや、だから謝ってるんだよ。勝手に食べて悪かったな、今度から気を付ける」

「え？あ？はえ？謝っちゃうんですか？」

予想の斜め上過ぎる。諦めの悪い雨水さんだからまだ策を弄すのか  
と思ったのにアッサリと

「あん？謝って欲しいんだろ？プリンは今度にも買って来るよ」

「は、はあー」

「じゃ取り合えず鎖とフリードを」

「はい」

鎖を消してフリードを子竜に戻す

「ごめんねフリード、急に呼んじゃって」

「キュクルウー」

「鎖も外れた事だし」

「まったく、雨水さんは……今度から気をつけて……ってあれ  
？ちよ、うすい、さん？」

「形勢逆転ってね」

薄い茜色の光の輪が私を捕らえていた

バインド。しかも魔力光からして雨水さんの・・・

「どう言いつつもりですか？」

「いや、プリン食べたのは悪かったなーと思うし勝手にキャラ口の部屋に入ってアルバム取ってきたのも悪いなーとは思ってたんだけど・・・ほら？俺って負けず嫌いじゃん？」

な、なんて人だー！ー！！

子供相手に騙しまで入れて全力で相手に来た！確かに雨水さんらしいですけど！最初から素直に謝るなんて変だなーって思いましたけど！

「で、ですが雨水さんのバインド程度なら十数秒で」

「そんなの俺が一番知ってるに決まってるだろお？」

意地悪な笑みを浮かべた雨水さんは私がバインドの解除をする間に普通の布で拘束した

「キャラ口の残りの魔力も少ない、俺の勝ちだな」

「・・・えええー」

そもそも私のプリンを食べた雨水さんが悪いのにいい〜

四十話〜side キヤロ〜(後書き)

キャラの隠し物はラブレターにしました、書いたは良いけど下手に捨てると何かの弾みで見られる可能性も有り何処かに保存しておくしかない。

乙女チックなキャラの秘密には最適かな?と思います!

四十一話 side 雨水

前回のあらすじ

キャラのプリンを勝手に食べる 見つかる すぐに捕まるが騙す  
そして脅すが逆に捕まる 更に騙して逆に捕まえる 最後に勝利を  
手にする

あれ？俺ってかなり悪人っぽくない？

「あーもう拗ねるなってキャラ」

「むー大体ですね！雨水さんはもっと大人っぽくするべきなんです  
よー！」

何と無くキャラに負けるのが嫌だったただけだったのでプリンは後日  
キッチンと買って返したのだがキャラの機嫌は予想通り治らなかった

「そうは言っても俺だってまだまだ二十の若者だぜ？」

「確か雨水さんの生まれの風習では二十から成人。大人に分類され  
るんじゃないありませんでした？」

「なんで知っている」

まあ二十歳から目に見えて大人になる訳ではないが区切りの一つとして成人になる

「フエイトさんが知ってました」

「え？あの人ってミッド生まれじゃないの？」

「そのはずですけど」

もしかしてなのはさんが教えたのか？

二人は仲良しらしいから互いの文化を教えあっても可笑しくはない

「とにかく雨水さんも大人なんですから。いつまでも子供と張り合わないでください」

「大人になっても子供の心を忘れないって大切だと思うよ？」

「大切ですな。だからなんですか？誰も子供心無くせなんて言うてません」

「はあ〜キャロちゃんは本当に大人だね〜」

「何を企んでいるんですか？」

最初から疑いに掛かってくるとは・・・確かに企んでたけどさー

「最初から疑うとは失礼な」

「雨水さんが疑わしい事をするからです」

「もしかしたらキャラは俺より俺を知ってるのかもね」

「ッ！にやっ！」

？、妙な反応が返ってきた

今回ののは特に何気なく言った言葉だったが何かキャラにはあつたらしく慌て出した

「なにを・・・まさか妙な隠し事を」

「ち、ちがいます！とにかく！わたしが言いたい事は分かりましたね！」

「.....」

どう考えても怪しい

何か隠し事している、しかも疚しい事だ



反応した言葉は俺より知っていると云う点、つまりは俺の何かの情報を知っているとかそんな所か？

探りを入れないとあとで面倒になるかもな

「わかりましたね！！」

「はいはい」

「はい、は一回！」

「あんたは俺の母親か」

「意味の分からないことを！わたしがなりたいのは……ッ！」

なりたいのは？

うん、キャラの将来の夢にはとても興味ある。やっぱりフェイトさんと同じ執務官とかが妥当なんだろうか

キャラくらいの年なら何かに憧れる気持ちもあるだろうし

「なりたいのは？」

「あー、その、な、なんでもないです」

「いや、何か言い掛けただろ」

んー言いたくない系統の仕事なのかな？だとするとそもそも管理局の仕事じゃないとか？それだとすると色々大変だろうしな

安定しない職なら不安にもなるし言いたくもないか

「いいかけてません」

「んー！。ま、いつか。だけど決まったらフェイトさんに一言伝えておけよ。あの人過度の心配性だから・・・良い人だけどさ」

「ほっ・・・わかりました」

ん？なんだか妙な空気になってしまった

四十一話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

一応雨水も転生してから年月を重ね成人してました・・・原作に入る前から題名崩壊？

## 四十二話 side キャロ

雨水さんと私の自然保護隊への異動期間は約一年、そしてそろそろ一年になるうとしていた

今のところは次の私の職場は機動六課で決定している。しかし実のところ八神二佐には少し返事を待ってもらっていた

そして今日は返事を伝える為に私は本局に出向いている

「あれ？キャロちゃんも一人なんやな？」

この独特な話方は八神二佐の出身世界の訛りなのかな？

「え？あ、はい。わたしも一応局員ですから」

「エリオ君にしても最近のちびっ子は偉いなあ〜・・・で？さっそくで悪いんやけど返事聞いてもええか？」

「はい！わたし！時空管理局自然保護隊所属キャロ・ル・ルシエ二等陸士は八神はやて二等陸佐のお誘いを受けさせていただきます！」

「ん、元気がええなあ。よっしゃ！ありがとな！」

決めたは良いけどやっぱり機動隊の仕事には少し不安は残る

フオアードとして訓練を積みながらの仕事なのでハードなのは間違いない

「これで取り合えず候補は揃ったな」

「あの、わたし以外のフオアードの方を教えてくださいただけませんか？」

「なんでや？その時の楽しみもあるやろうに」

「エリオ君と一緒にのはしってますけど、その、年の離れた方とかだったら心構えもしておきたいですし」

行き成りだとコミュニケーションが

働く上で仲良くなる事はお互いにとって大切だと思いますしある程度の情報は教えてもらっていた方が良い

「なるほどなー・・・んーでも安心してええよ。まだ詳しくは言えへんけど年はさほど離れとらんし両方女の子や」

それならすぐに話も出来ると思う

「なあなあそれよりちょい聞きたい事があるんやけど」

「なんですか？」

なんだか八神二佐の話し方は独特だけど親しみがある  
ついつい長話しになりそう

「雨水秋春について聞いてもええか？」

「雨水さんですか？」

特別雨水さんは八神二佐みたいな偉い人の目に付くような人じゃない  
と思うんですけど

「まあフェイトちゃんとも私は知り合いやし話に出とったら気にな  
って当然やろ？」

「そう、ですね？」

「そつや〜」

とは言っても雨水さんの事と言えば割と本気で子供と喧嘩できる大  
人としか・・・

「少し調べさせてもらったんやけどロストログアの鑑定士をしとる

「そうやない？」

「はい、一応。自然保護の前はそちらが本職だったので」

「色んな部署部隊で講師もしとるな？」

「まあそこそそ有名でしたね。・・・あ、でも本人は自分のスキルアップに忙しいですから余り教えるのはしてませんよ？」

あれほど人に教えるのに特化した人は中々いないと思う。でも何故か本人の魔法は未だに成長の兆しが微妙だけど

「これはちよつとした噂なんやけどな？」

「うわさですか？」

「偶に現れる凄腕カリスマ教師。彼から少しでも教えてもらえば必ず結果に繋がり、もしも直に教えてもらえれば確実に大魔導師に至る。らしいで？」

「えーっと、知りません」

また凄い人が世の中には居るんですね。学べば必ず結果だなんて都合が良いにも程があると思うんですけど・・・だって結果を出すには幾ら教えが良くても努力が必要だから

「でな？その男性は一年前にプツリと講師をせえへんようになつたらしいんよ」

「そうなんですか？残念です」

「私もそう思うわ、でな？ある生徒から聞いたんやけど、どうもその先生の特徴が私が思うにエリオ君やキャロちゃんを知る雨水さんって方と似とるんよ」

「……まさかあゝ。有り得ませんよ、雨水さんは確かに幾つかの部署部隊で講師をしてましたけど仕事の合間ですよ？」

「そかゝ流石に早々知り合えへんかー」

まったくです。あんな子供っぽい方に教えられて大魔導師だなんて……ん？でも必ず結果と言うのは強ち間違いでもないような

……いやいや、まさか……です



四十二話 side キヤロ (後書き)

管理局内で雨水の噂が少しだけ広がっています。まあ前に雨水が魔法を教えた生徒たちがある程度時間が経ち成功した結果ですね

四十三話 side 雨水

前回のあらすじ

キャロが何か用があるとかで本局に向かった からと言って仕事に変更はない 何時も通り警邏 終わったのでフリード達と遊ぶ事にした

「はつくしゅん」

鼻がむずむずする、誰か噂でもしてるのか？

「キユクル！」

「ガウガウ！」

「はいはい、さて今日はなにするか」

フリードの範囲制圧魔法のブラストフレアは便利だけど如何せん威力の調整に欠けるから咆哮を魔法的変換で無傷で制圧できる魔法を作れないか

「フリード。キャロから掛けてもらってるブーレストは炎以外にも使える？」

「キユクウ」

「そうか」

分からん。俺はキャラロじゃないから鳴き声だけじゃ何を言っているのかサツパリ

まあこの際、炎以外にも使えると過程して考えよう

「よし、取り合えずフリードはキャラロと一緒にしないと訓練のしようが無いので子竜状態で同時に十単位の火球を作れるようになってもらう。コントロール出来れば尚良いがまずは作る所からは気にせずに」

「キユクウ！」

この際中身が空っぽの火球だろうと目晦ましには十分すぎる

「さて次はシロだな」

「ガウ！」

シロはとにかく単体で魔法を使える一般局員くらいには勝てるようになって欲しい

その気になれば噛み付くで勝てる気もしなくはないがあくまで俺が  
目指すのは魔法戦つと

「ならシロ、人化を使ってくれるか？」

頭の中で観察眼のスイッチを入れる

目の前では白い魔法陣に潜り活発そうな少女になるシロ

「つとと・・・わん！成功！」

「んゝ変身の瞬間に慣れない人型のせいでバランスを崩したか」

それと前々からの疑問なんだけど何故シロの奴は人の時は犬の鳴真  
似をするんだらうか？やっぱり鳴かないと落ちつかないのかな？

変身魔法 持続五分二十七秒

・・・五分保てるようになったのは大きな成長か

「ヤツパリ四本足で走った方が速いと思うのお」

「人型で？変わった思考の持ち主だな、人の体はそんな走り方には  
適していないからな？」

「はうっ確かに」

問題は見た目と中身が比例してないって所か

意識的肉体の成長が早くまだ変身魔法を使いこなせてないのでそのままの年齢で人化するしかなく精神年齢に伴わない見た目で変身してしまっている

「試すな！よし、まずはその状態での射撃魔法と捕縛魔法。あとは前に教えた魔力での足場の構築かな」

「分かった！ガンバル！」

「頑張れ」

あとは俺も自分の訓練をするか

訓練も一通り終わり、一度長めの休憩を入れて最後に現段階の力を  
図る事にした

「よし！シロ！存分に手加減しろよ！」

「？、なにか違う」

俺VSシロ（人化）

審判フリード

制限時間は五分。まあ単純にシロの人化持続時間が五分だからと言う理由なのだけど

「まずは」

観察眼のスイッチを入れる

シロ 魔力ランクB 変身魔法使用中 敵意無し やる気有り

シロの戦闘スタイルの強みは人間では考えない思考パターン

「うん、準備はオツケー。フリード」

「わん！ガンバルよお〜！」

「キュクル・・・キュククーー！！」

フリードが空に向けて火を放ったのを合図に試合を開始した

四十三話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

次回はバトル。苦手分野ですが雨水もシロそれぞれの特性を魅せる戦いになればと思っています

四十四話 side 雨水

前回のあらすじ

フリード達と一緒に訓練 確認がてらにシロと試合 開始の合図としてフリードに火を吐いてもらった

開始したと同時に笑っていたシロの顔付きが変わる

捕食者の目だ

「狩られる兎にはなりませんように！」

まずは即座に作れるだけ魔力弾を作り射出する

総数七発

ダメージになるとは思っていないが目晦ましになれば十分

「危険、じゃない！」

ショット 一発 待機 確認

「何処から」



姿勢を低く構えたシロが突然目の前に現れた

魔力弾は着弾しているはず、しかし元々ダメージを与える為ではなく目晦ましと足止めだった為シロの障害にはならなかった

「なんツ！」

先程までシロが立っていた足元の蹴り出した所が変な風になっていた

それに先程まで待機されていたショットが消えている

まさか・・・

足元で進行方向と逆に射出して走り出しの初動を見せないようにしたのか

普通に走り出すだけなら微細な体の動きで観察眼が捕らえるがそれを掻い潜る為に魔法で補った

観察眼の唯一の弱点は情報量が多過ぎる為に俺が最初にある程度、情報を絞っている事

今回は魔法を初速上げに使うなんて思ってなく情報を切っていたのが悪かった

それにその方法は柔軟な体と衝撃を上手く緩和するバネが確りと出

来ていて初めて成功する方法

「全部野生の勘でツツ！」

「狩った！」

更に俺の顎に向かって足先が飛んできた

補助魔法は覚えさせていないので速さは普通、軌道も観察眼が捉えたので安心

だったのだがショットを空中で固定、先程のスタートダッシュの応用で蹴りの速さが行き成り上がり威力ともに増した蹴りがかわす前の俺に当たった

しかも意識を失う最後に確認出来たが咄嗟に顎を守った俺を見てシ口が僅かに蹴りの軌道を上げて米神を打ち抜いていた

「ガウ！」

「痛ッ！！！」

「キユク〜」

せつかく魔法を教えたのに噛み付きで起こされた

治癒魔法使えないのに・・・おっちゃんに頼まないとな

「はあくにしてもまさか負けるとは」

しかも魔法戦を予想していたのに魔法の使用回数は二回だけ

あとは純粹に急所を狙われ終了

「キユクキユク！」

「ん？なに？俺いま落ち込み中だから復活まで二十四時間は欲しいかも」

「そんなに待てるかああああー！！！！」

「ッッッ！」

痛ってえええええ！！

突然後ろから何か攻撃を受けた

振り向くと耳の生えた女の子が拳を握り大層ご立腹だった

「えーつと・・・迷子？」

「迷子な訳あるか！あたしはアルフ！フェイトの使い魔！」

「あー！なるほど！フェイトさんから逸れたのか」

「だから迷子じゃなく〜い！」

余程迷子扱いが嫌なのか興奮して尻尾まで出てきた

・・・ふむ、迷子に迷子と言うは駄目か

「分かった、分かった、お嬢ちゃんが迷子じゃなくてフェイトさんが迷子なんだね」

観光区でも迷子の子供はたまに居るから扱いも慣れたはずだ！

「・・・フリードとシロ。コイツは何時もこんななのかい？」

あれ？俺が気絶している間に仲良くなった

せいぜい三十分くらいしか寝てなかったと・・・十分か

「ま、話はキャンプで聞くよ。フェイトさんと一緒に来た？」

「今日は一人だ、アンタに用があつてね」

「俺？」

「そう、だから迷子じゃない」

いや、だからってこんな普通一般人の人が来ない所に来ている時点で迷っているのでは……

四十四話 side 雨水 (後書き)

シロは由緒正しき魔狼の長の子なので天然で強いです。更に雨水の教えも加わって現状の雨水の力を普通に凌駕します

な、訳で即効終わったバトルでしたが如何でしたでしょうか

四十五話 side 雨水

前回のあらすじ

シロVS俺 結果シロの瞬殺KO勝ち もう少し善戦出来ると思っていたのでシヨックで落ち込む フリードが何かを伝えようとしたがそれも遅く待ち草臥れた女の子の鉄拳をくらった

使い魔を見るのは初めてではないが流石フェイトさん、かなり完成された高い技術で契約や魔力配給が行なわれている

「始めまして雨水秋春です」

「アルフです」

二人して丁寧なお辞儀を繰り返す

「っと社交辞令は此処までにしておいて用とは？」

「社交辞令って本人の目の前で言う辺りは失礼なのに言葉使いは確りしてるんだね」

「社会人ですから」

「ふ〜〜ん、キャラの言った事はそう言う事かい」

キャラが何を言ったからは知らないがやけに観察されている

どうもフェイトさんの指示で来たって感じじゃないよなー

「ま、敬語とか片ツ苦しいのは無しで」

「そう？ならお言葉に甘えさしてもらおうが・・・で？おつかい？」

「ち・が・う！あたしは単にエリオやキャラ、そしてフェイトの言う雨水つてのが気になっただけだ。あたしはフェイトの使い魔だからね、悪い虫は潰しておかないと」

「うわーなんだかこの女の子、比喻とかじゃなくてマジで物理的に潰しにきそうだなー」

「直情タイプか。控え気味なフェイトさんには相性はピッタリなのか？」

「恐いな、まあ話から察するに今日は俺の見定めるところ？でも少し遅くないか？」

「そうでもないさ、あと少しでフェイトにとって大切な区切りを付けられるかもだからね」

「区切りね・・・表情から察するに過去に何か有ってそしてそれに絡む犯罪者が存在し、もう少しで逮捕できるかもってところかな」



感情が表に出易いから簡単に推測できる

とにかく荒事か

それはそれはキャラが心配しそうな話で・・・

「それと俺を見定めるのと如何関係があるのか不思議だけど、アルフさんから見て俺はどう？」

「まだ分からない。キャラやエリオから聞いた通りちょっと変わってるが無害そうだしフェイトが言うみたいに優しさも持っている・・・っぽい」

「あんな優しさを圧縮して体言したみたいな人に優しい人扱いされるとはとてもビックリだ」

正直どんな環境に居ればあんな風に育つのか一度聞いてみたい

「・・・アンタ、フェイトの事をどう思ってるんだい？」

「はい？」

「だから！アンタにとってフェイトはって聞いているんだ！」

俺にとってフェイトさんは？

「んーキャラの母親もしくは姉だから俺にとっては……」

俺にとってはねー

「隣の家の子のお姉さん」

「……はあ？」

「だから隣のいえの」

「繰り返さなくてもいい」

何故か残念そうな目で見られる

身に覚えのある視線だ

例えるとキャラと言い合いになった時に女性局員から向けられた視線に似ているかも

「はあ……あーそうかい。はいはい、理解したよ」

「うん、理解してくれたか」

「ああ、基本残念なんだな」

「ちょ！なにその評価?!」

「いや、まあフェイトの魅力で靡かないんだからある意味凄え奴なのかもな」

凄く如何でもよさそうに褒められも全く嬉しくない!

四十五話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

アルフは原作通りエリキャラの良き理解者です

四十六話 side アルフ

雨水秋春 二等陸士と低い階級に居ながらも鑑定士と言ったマイナ  
ーな職に就いている変わり者

あたしはフェイトの使い魔として確り見定めてやろうと意気込んで  
会いに行った

結果、残念な奴だった

エリオやキャラの言う通りフェイトに似ている一面も確かにあった、  
二人が好きになるのも無理は無い

「あれ？なんで？まだ居たの？」

「囁むぞ」

キャラは数日前から本局に出向いているそうなのであたしとは入れ  
違いになっていた

会えないのは少し残念だな

「はあーなんで俺の周りにはすぐ手を出す人しか集まらないのか」

「自業自得だ」

「身に覚えは全くないんだがなー」

仕事振りは至って普通、休む時は確り休むをキチンと守っている所を見るに体調管理も大丈夫そう

はあーフェイトときたら・・・仕事が好きなのは分かるけど偶には休んで欲しいもんだ

「んー」

雨水があたしの顔をジッと見ていた

「なんだい？」

「いや、素体が狼とシロと被るから変身魔法の参考になると思って・  
・サイズの縮小で魔力消費の軽減か」

「詳しいね」

「まあな」

ん？あたし、狼素体だつて言ったかい？・・・あ、最初に耳と尻尾を見せたからそれでか

でもこれがフルサイズじゃないってのは何で分かった？

「シロ、そうかアンタが教えたんだったね」

「躰係りだったからな」

「・・・そうジロジロ見られると恥ずかしいんだけど」

「え？なんで？」

殴りたい。何故かこの男を無性に殴りたくなる衝動に狩られる

だいたい子供の状態とは言え女性だ、雨水もフルサイズではないと分かった時点で見た目通りの年齢じゃないって分かっているはず、それをジロジロともしっかりと気を使えと言いたい

「これはアルフさんの技能？それともフェイトさんが一度変換しているの？」

「そう言えば・・・呼び捨てで良い、何だかムズ痒くなる。これはあたしの技能だ、名づけて子犬フォーム人間版」

「子供フォームで良くね？」

「良くない」

それだとまるで若作りしているみたいじゃないか

この姿はフェイトの魔力消費を少しでも抑える為のモノだ

「そろそろ時間だから俺は仕事に戻るが送ってこようか？」

「大丈夫だ、一人でも行ける」

「そりゃ一人でも行けるだろうが子供を案内するのも仕事の内だからな」

そう言うのならお言葉に甘えない訳にも・・・む？なにか変な予感が

「あーやっぱり遠慮しとく、アンタの仕事の邪魔をしに来た訳じゃないし」

「そか、案内に託けてサボろうと思ったんだが、それじゃフェイトさんによろしく」

「そんな魂胆が」

全く本当か冗談か分からないな



「あ、アルフだ！」

帰り際に転送ポートまで来ると丁度荷物を抱えたキャロと合えた

「おーキャロー元気だったか？」

「うん、元気！」

「本局でフェイトには会えた？」

「会えたよ、フェイトさんの家に泊まらせてもらってたから」

「あーなるほど」

確かにフェイトならホテルに泊まらせるよりは自分の家に招くだろう

ただその時のフェイトの様子が少し心配だなー

「フェイトはちゃんと慌てず家族出来てたか？」

「？、フェイトさんは至って普通でしたよ？」

「ならオツケーだな」

表面に出なかつたなら合格かな

フェイトは心配性に気遣い過ぎにだからガチガチに緊張してないか  
心配だったんだよね

「アルフは帰り？」

「おう！また来るかもだから雨水にはよろしく言っておいてくれ」

「はい」

フェイトの帰ってくる場所を守るのが今の私のやる事だからな、使  
い魔として精一杯頑張るさ

四十六話 side アルフ (後書き)

アルフを元にシロの人化の精度が上がっていく予定です

四十七話 side 雨水

前回のあらすじ

フエイトさんの使い魔がやってきた 残念判定を押される 数日滞在 しかし汚名は拭えず まあ笑って帰って行ったから悪い評価ではないはず そして入れ違いにキャラが帰ってくる その数日後

「くしゅん！・・・くしゅん・・・あうー」

「大丈夫か？キャラ」

「あうあう」

「それは何語？」

唐突に元気が取り柄のキャラが風邪を引きました

病気なのでは仕方ないので取り合えず今日は休みをもらって寝かせている

「雨水さんはしごとにい・・・」

「寝込んだ状態でも俺に仕事を強要する辺りは流石だな」

「ぐすっ、だって・・・だって、わたし、めいわくかけた」

何故泣く

どうやら初めてに近い・・・いや、初めてか？んー初めてだったかも、まあ初めての病気のせいで態勢が無く情緒不安定になっているらしい

「はいはい、悪い悪い。今日は俺も休みにしてるから付きっ切りで看病してやる」

「ほんとぉ？」

うぐっ、普段大人ぶってるキャラが病気により本来の子供っぽさを取り戻すと中々心にグサツと来るモノがあるな

「ホントだ、取り合えずお粥くらいは食べた方が言いつて言っし作ってくるツ・・・っておい、放せ」

「やだ」

局服をガツシリと捕まれ行けなくなる

力を入れれば解けない事もないだろうけど、あとが恐いので最終手段にしよう

「いや、それだとお前。食べるもんが」

「いい・・・お腹すいてないもん」

もん。って言われてもなー

口調まで怪しくなっていないか？

「それは風邪だからそう思うだけで栄養を付ける為には食べないと治るもんも治らないぞ」

「だって、だって起きたときに雨水さんがいないと・・・わたし、どうしていいか」

勝手にして下さい、何て言った暁にはフェイトさん辺りが怒り狂うなー

それにそんなに長時間離れる気は無いんだけど、お粥だって簡単に出来るだろうし

・・・はあー仕方ない

「分かった。風邪の時くらい我が侂聞いてやるよ」

「ありがとぉ。くしゅん」

「寝る」

「うん」

おっちゃんに連絡して色々持ってきてもらおう

ついでにフایتさんに子供の看病の仕方でも聞くか、あの人だつたら慣れてそうだし頼りになる

ようやく寝た

「まったく、動画でも撮っておくか」

いざとなった時の脅しには十分使えるカードの一つになる

・・・はあーそれにしても・・・なんで手を離さない

「手を握ってなんてベツタベタなお願いしたかと思えば」

「キャロちゃん元気か？」

「静かにしろ、いま寝たところだ」

「わりい」

おっちゃんが土鍋と水と薬をトレーに乗っけて持ってきた

「ありがとな、だけど無駄だったようだ」

「・・・こう見るとまるで兄妹だな、お前ら」

「一応十歳は離れてるから兄妹なら結構珍しい部類だよな」

まあ普通に探せば居なくは無いくらいか

「しかしお前、看病とか出来るのか？キャロちゃんはお前が良いみたいだから俺が如何こうは言えねえけど」

「看病くらい出来るわ」

俺だって今まで一度も風邪等を引いてない訳では無いんだから多少は経験もあるし少しくらいなら知識もある

キャロはまだ子供だから色々と大人とは勝手が違うだろうけど・・・

あ、やべ・・・かなりヤバい問題がある事に気付いた



四十七話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

ベタかも知れませんが看病イベント発生です

四十八話 side 雨水

前回のあらすじ

キャロが風邪を引いた 看病をする キャロの傍から離れられないのでおっちゃんに色々頼む おっちゃんに心配される そしてある問題に気付く

問題

風呂に入れない方が良いのは何と無く分かる。確かただでさえ体力の低下している時に実は結構体力を使う入浴するのは症状の悪化だと

まあ問題はそこでは無い、その次のだとしたらと言う話だ

だとしたら当然体を拭くと言う行為をしなければいけない

しかし如何なんだろうか？

キャロは子供とは言え女性、で俺は男性・・・それは不味いだろうなあー、色々と

「女性局員に任せよ」

無難な回避を方法だな

俺自体は特に気にしないような気もするがキャラは流石に嫌だろう

「やっぱり当面は手を振り解く事に尽力を尽くそう」

しかし女性局員でいま手が空いている人いたかな？

一人くらいは居そうだけど連絡手段が無い、かと言って仕事用の連絡先を使うのは忍びない

「キユクー」

「ガウウ」

「ん？お前らは入ってくるなと言っておいたはずなんだが」

フリードは主の事だしシロも想いは変わらない。心配なのは当然か

「仕方ないな、静かにしろよ」

「キユウ」

「ガウ」

ん？シロに人化させて看病をさせるなんて良い作戦ではないか？・・・

・あ、駄目か、時間制限あるし

「フェイトさんから送られてくる資料の受信が止まらない」

あの人、どれだけ送っているのだろうか

本にしたら楽に十冊とかいっても不思議じゃないぞ？

「ん、あふう」

「起きたか？」

ジーンと上気した顔で此方を見詰め暫らくすると口を開く

「くしゅん、うすいさんか」

「他の誰に見えたのか知りたいね」

「いえ、目がかすむと言いますか」

キャラロがそのまま起き上がろうとするので取り合えず寝かせる

額に手を当てるが熱が下がっている感じはしない

「喉は渴いてないか？」

「……すこし？」

「疑問系ね」

気にしないけどさ

程よく温い気がする薄めのスポーツドリンクのストローを口元に運ぶ

「一気には飲むなよ」

「んん、あむ」

「……よし、他は？お腹が空いてるなら食べ物はあるけど」

ん、ストローが潰れてる……噛んだっばいが本当にお腹空いてないんだろっうな？

「いらない……あの……」

「あん？」

手招きするキャロ

いやいや、二人つきり何だから普通に喋っても誰も聞いてないと思  
うんだが

「あの、汗で・・・その」

「服がベタ付くと」

「・・・はい」

さて、如何したものか。対策らしい対策を考えてなかった

ま、この際、仕事上の女性局員にでも来てもらうか

「待ってる、いま誰か女性の人呼ぶから・・・っておい」

「あの」

「放せ」

「めいわくになるんじゃない」

「大丈夫、今まで一緒に仕事やってきた仲だし喜んで来るさ」

「駄目・・・わたしのせいで。それはだめです」

んー如何も譲る気のなさそうな目をしてるなー

頑固な所は長所になる時もあるけどこつと言った時は少し考え物だ

「だが如何する？生憎と手が空いてるのは俺だけだし」

「雨水さんでいいです」

「え〜」

良いと言われても良くないのはこつちなんだけど・・・

かと言って此処で言い合っても仕方ないし、世間的にもギリギリセーフかなあーとか思わなくもない

「分かった」

「あうう」

「取り合えず恥ずかしくはあるんだな」

まったく、子供が自分より大人優先に考えるべきじゃないと俺は思うんだけどな

キヤロウコトコトコトコト



四十八話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

セーフ?アウト?・・・一話に収めきれなかったので次回に逃げました

四十九話 side 雨水

前回のあらすじ

キャラが風邪を引き看病をする　そこそ順調　だったのだが障害発生　これはセーフかアウトか・・・

まあセーフだと思ったがいざキャラのパジャマに手に掛け緩やかに脱がすとなんだかアウトな気がしてきた

脱がすって単語が悪いんだな、きつと

「やっぱり他の」

「……………」

「駄目か、うん、駄目だよね」

頬を朱色に染め潤んだ瞳で見詰めてくる

・・・リアクションに困る

正直此処はサラッと流したいのに何だかそんな流れじゃないぞ？

「前は自分で拭けよ？」

「あう」

「だから何語なんだ」

キャロを座らせて後ろから蒸れたタオルでゆっくり拭く

少し強くするだけでも妙な声を上げるのでとてもとても作業し難い  
子供だから気にするな・・・と言われてもいざ直面すると予想を超  
えた何かがある

「それにしてもキャロが風邪なんて珍しいよな」

とにかくこの場は適当な話題を振って気を紛らわそう

「じめんなさい」

「怒ってはないよ。ただ珍しいって話」

「雨水さんにめいわくかけてしまって」

「まあ俺も仕事休めたからラッキーくらいにしか思っていないさ。あ、  
ちょっとバンザイして」

「ふにゃ」

たぶんシャンプーか何かなんだろうけど甘い香りが鼻腔を擦る、これが所謂女の子特有の甘い香りってやつなのだろうか

ああ、マジでこんなシーン誰かに見られたら・・・恐ろしいな

「くしゅん」

「あ、お湯が冷めてきたか。入れ替えてくる。毛布に包まってるよ」

「はい」

さっさと取り替えてこないとな、今のキャラは殆ど裸だし風邪悪化しかねん

「キャラロくダウンしてないよなー」

「遅いですよー!」

・・・えーつと何でこの人が居るんだろうか

いや、居ても可笑しくないと云うか居て当然なんだろうけど局的に居たら困ると云うか

「フェイトさん？」

「なんですか？」

フェイトさんが凄く怒って立っっっていらっしやっった

「あの、お仕事は・・・」

「それより!」

「あ、はい。そうでした・・・フェイトさん、キャラの体を拭くのあとは任せて良いですか？元々男の俺がするのも難でしたので」

「・・・うん、分かった」

たぶんキャラを一人にさせた事を怒ってるんだろっな、この人・・・  
本当に優しい人だよ

が、このその優しさが怒りに転じた時が恐いのでこの場はキャラを  
任せて俺への怒りを何処かに放り投げてもらおう

この人が子供を後回しにしてまで怒るとは思えないからな

「や!最近ぶりだな」

「アルフまで」

外に出ると今度はアルフが立っていた

「なあアルフ、フェイトさんって執務官だったよね？なんで来れた？」

「あーそうだな、不思議に思うのも無理ないか。フェイト心配性だし、病気って聞いたらすぐに飛んで行く勢いだったらしいぞ？実際飛びそうになった所を副官が止めたそうだけど」

副官さんの苦勞とフェイトさんの慌てぶりが目に浮かぶ

「だから急いで一通り仕事を終えて駆け付けたんだと思う」

「そうですか・・・ま、タイミング的には助かりましたけどね」

「なんでだ？」

「実は人が居なくて俺がキャラの体を拭いてあげてたんですけど、やっぱりキャラも女の子でしょ？隅々って訳にも」

「あー・・・ま、そうだな」

中の方で何度かキャロのくしゃみとその後、フェイトさんが心配すると言つやり取りが聞こえ俺とアルフは思わず苦笑していた

四十九話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

短いシーンですが体を拭くシーンの描写が・・・意外と難しい、です  
ね

健全な・・・健全な看病風景になったと思います



五十話 side 雨水

前回のあらすじ

風邪を引いたキャラの為にフェイトさんやアルフがやってくる 色々俺が出来ない事を頼む 途中でエリオからお見舞いの映像付き通信があった 色んな人の看病の甲斐もありキャラ復帰

その後のお礼周りは少し面倒だった

「雨水さん、少し時間もらえますか？」

「ん？良いけど？治ったとは言え一応念を取って休みにしてるからな」

熱も下がったしキャラはもう大丈夫だと言ったのだが最後には休めと命令形で言われた

心配性の集まりかと思ったよ・・・いや、まあ実際心配性の集まりだな

「キユク？」

「ガウ」

「フリードとシロは遊んできてもいいよ」

キャラは二匹を遊びに行かせ面と向かう

如何でも良いけどキャラって髪伸びると癢っ毛が目立つよな

ワザとしてみたみたいで似合ってはいるから気には留めないが

「そろそろ自然保護の異動期間も終わりですね」

「あーそろそろだったね」

すっかり忘れていた

次は適当に前の所に戻るとするか

特に希望も無いし今までと全く関係無い部署と言つのも有りかも知れない

「わたし、実は八神二佐にさそわれて機動隊に行く事になったんですよ」

「へー機動隊？大変だねー、頑張れ」

「毎回思いますけど雨水さんってもしかして他人に関心ゼロですか？」

「そんな事はない」

他に言い様が無いからこう言っているだけだ

「・・・正直反対されると思っていました」

「なんで」

「だってわたしは少なからず雨水さんと深い仲になれたと思いましたが、機動隊は危険の多く付き纏う最前線部隊です」

あーなるほど

確かに俺もキャロの選択の全てを賛成している訳ではない

機動隊といえばとキャロの言う通り危険が多く毎年怪我を理由に止めている人間も少なからず存在する

そんな中に将来有望のキャロを入れるのは明らかに早い

「それはお前・・・キャロが決めた事なんだろう？」

「はい」

「無理やりでも強要でも脅しでも無く」

「はい」

「なら俺が反対して如何するよ」

「え？」

ポカンと面白く口を開けたキャラコが此方を見る

ちよつと可愛いな

「キャラコが選んだ道なら俺は見守るくらいしか出来る事はないよ。まあ手伝って欲しい事があるなら何時でも言ってくれて構わないけどね」

「うすいさん」

とても感動されているが割と普通の事を言っているだけなんだが・  
・これは普段アレだからギャップとかって奴か？

「にしても機動隊ね・・・出世狙い？」

「子供になんて発想してるんですか」

「パツと思いついたのがそれだけだった」

実際機動隊の昇級の速さは凄い

まあ危険物ロストロギアの探索、調査、確保、の全てをしているんだから当然と言えば当然か

「そついや機動隊は分かったけど何処の隊？一課二課辺り？」

「六課です」

「六？」

ん？機動隊は一課から五課までしか無かったと思ってたんだがな

「新設部隊ですよ」

「あー新設ね。って事はテスト部隊か、それでキャラオな訳ね」

恐らくその部隊の構成員は優秀な新人だろうな

八神二佐と言えば局で有名なエースの一人、その人から直接誘いが来たって事は八神二佐が部隊長かな？

「それで？」

「ああ、普通エリート部隊の機動隊から幾ら将来有望とは言えキャラ

口のレベルはまだ早いなって思ったんだよ。だから新設ならそれ  
と納得した訳よ」

「なるほど」

しかしそろそろ俺もこの次について考えないといけないな

五十話 side 雨水 (後書き)

もうすぐ一年と言う期間も終わりキャロの六課入りが出来そうです

五十一話 side 雨水

前回のあらすじ

キャロから今後の進路について説明？される 俺の今後も決めない  
といけないなと思う 約二週間後

自然保護隊に異動してからとうとう一年くらい

「ほんと短かったな！」

「・・・おっちゃん」

むさ苦しい

今日、キャロと俺とフリードとシロの見送り会が開かれる事になった  
ちなみにシロは最初は自然保護に残る予定だったのだが付いてくる  
と吠えて譲らなかつたので俺の使い魔として登録する事になった

思わぬ所で使い魔ゲット

「皆さん、ありがとうございます」

「ホント短く感じた一年、俺やキャロの面倒を見てもらって、迷惑  
掛けた事も多かったでしょうけど本当に有難う御座いました！」



「キョクル！」

「ガウ！」

それにしても態々警邏の人数を減らしてまで会を開いてもらうと少し悪い気になるな

「雨水、お前は次の異動先とかもう決めてんのか？」

「まあな、知り合いの所に行こうと思ってる」

「そか、残念だな。決まってるなら全然まだ居ても良いんだが」

「あはは、偶には遊びに行くさ」

馴染み深い場所の一つに入ってるからな

「今日はお前も飲め！」

「酒か？んー法律上では飲めるんだが」

「だが？」

「生憎と飲んだことがない」

ま、祝いの席だし今日くらいは問題ないか

「・・・甘い」

「果実酒だしな」

「うす・・・うすひいさぁん」

何時の間にかキャラ口は完全に酔っていた、子供だからアルコールの回りが速かったのが恐らく原因だろう

取り合えず未成年の飲酒禁止がミッドの法に載っているか如何か調べべきだな

「うわっ、ちょ！お前。誰かキャラ口に酒飲ませやがったな！！」

俺はと言うと初めての酒の味は思っていた良く抵抗感が無くすんなり受け入れられた・・・と思ったがキャラ口同様に最後のほうの記憶が無かった

何かキャラ口が重要な事を言っていたような気がするんだけどなー

俺とキャラ口は自然保護隊の皆に見送られながら一年と言つ短いような期間を終えた

そして特別久しぶりでも無いが少し違う気分でミッドに帰ってくる

実際割と頻繁にミッドに来ていた俺は余り懐かしくも無い

「キャラ口〜!」

「あ! エリオ君!」

「よー、そう言えばキャラ口はこのまま六課だっけ?」

「はい!」

そうか、それはとても残念だ

「あ、あの秋兄さん?」

「なんだ?」

「これは?」

「キャラ口の荷物」

送れば良いだろと言ったのだが送る分は送っているらしく、この無駄そうな量は手荷物だそうだ

女の子はこんなもんです。と妙に言い包められた

「重い」

「エリオ、試練だ。それはキャラ口とパートナーになる最初の試練だ、つてな訳で俺はとでも残念だが此処で別れさせてもらおう」

「残念そうに見えないのは僕だけですか？」

そんな事は無い

美少女キャラ口と歩けるのだから残念で無い訳がない。うん、そういう事で俺はさっさと逃げよう

「じゃ、二人とも六課で頑張れよ」

「はい！秋兄さんも頑張ってください！」

「たまには遊びに来てくださいよ、雨水さん」

「キョククルー」

「ガウ」

フリードとシロもそれぞれ別れを告げている

さてこれから俺も次の仕事場に向かうとするか

アイツらと会うのは久しぶりだが・・・お土産くらいは買って行くべきか

五十一話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

本来始めてキャラ口とエリオが出会うシーンの話でした

五十二話 side 雨水

前回のあらすじ

見送りの会をした翌日に自然保護隊を発った ミッドでエリオと待ち合わせ そのままキャロとフリードと別れる 俺は適当にお土産になりそうな物を買って次の仕事場の関係者の下に向かった

時空管理局ミッド諜報部

別に此処が仕事場なのでは無い、ただ仕事の紹介人が此処に居るか  
ら挨拶くらいはしておこうと思ったただけだ

「どもー、ヒューズ准尉はいますか？」

「あ！先生！」

相変わらず諜報部の人間は忙しいのか殆どが外に出ているらしい、  
人の気配が目の前に居る二本のアホ毛とツインテールが特徴の知り  
合いの娘くらいしか無い

ぶっちゃけエリシア・ヒューズ

探し人ヒューズの娘だ・・・今年で十三くらいだったか？

「エリシアだけか？」

「はい、パパはちょっと偉い人とお話に行ってますので」

「そうか、なら仕方ないな。ほら、これお土産」

「やったー！ケーキい！」

居ないなら仕方ない

そのまま帰ろうと引き返すとエリシアに呼び止められる

「すぐ帰るんですか？」

「まあ」

「パパもすぐに帰ってきますので一緒に待ってましょーうよ」

えー

と言いたい所だけどこれと言って用も無いので久しぶりにエリシアと話すのも有りかな

「分かった」

「ならこっちはですー！」



案内されるがまま奥の談話室みたいな所に連れていかれコーヒーを出される

随分と慣れた手付きだな

「査察官の人達って当たり前みたいに夜通しの人が多くて・・・コーヒーでも良いですよね？」

「問題ないよ」

別に構わないけどそう言うのは淹れる前に言う物じゃないだろうか

「先生と会うのは久しぶりですね」

エリシアと俺の初邂逅はヒューズが怪我で前線復帰が出来なくなっ  
てからだっただけど、ヒューズが自分の足を引き合いに俺にエリシア  
の家庭教師になれなんて言うもんだから

はぁー怪我を引き合いに出すのはずるいと思う

「そうだね、十日くらい？」

「二週間は経ってますよ」

「四日・・・誤差の範囲だな」

「全然ですよ・・・あはっ全く先生は相変わらずです」

それにしても何だか少し会わないだけで結構成長しているような気がする

前に会った時はもっと身長も小さかったような・・・

「そう言えば先生？」

「ん？」

「表に居た白い犬って先生の使い魔ですよね？」

「・・・あ」

「ガウウウ」

「ごめんごめん！忘れてたんじゃないんだって！」

今にも噛み付きそうなシロを宥める

「先生いつのまに使い魔契約なんてしてたんですか？」

「ああ、コイツは使い魔として登録しているだけで別に契約はしてない、普通に魔力持ちの動物なんだよ。魔狼って言うてね」

「へえ、自然保護に行つて居た時に会つたんですね」

「そうそう」

初めて会うがシロは意外と早くエリシアと仲良くなっている

まあ観光区で初めての人と触れ合う機会は多かったし慣れたもんか

「あはっ、もふもふしてるっー」

「まだ査察官見習いなのか？」

「うん、パパが心配性だから」

ヒューズの奴。エリシアが折角親のあとを継ぎたいって局入りしたのに過保護な奴だ

・・・ふうフェイトさんと言い、俺の周りの親たちは心配性の過保護ばかりだな

五十二話 side 雨水 (後書き)

エリシア・ヒューズ、本作設定では大体キャラの上でティアナの下  
くらいの少女ですかね

雨水が直接教えているだけあってそれなりの魔法を用意しています  
(お披露目の機会に恵まれるかは別ですが)

五十三話 side 雨水

前回のあらすじ

ヒューズに会いに行くのとエリシアが居た 帰ろうかと思ったのだが  
呼び止められ待つ事に シロに噛まれ掛ける ヒューズが誰かと共に  
帰ってきた

「エリシアちゃん、ただいま〜！」

「パパ！局で公私混合しないで下さい！」

変わらない奴だなー

「エリシアちゃんもパパって呼んでるけどね〜」

「先生、あの人をブツ飛ばして下さい」

「初めまして、鑑定士を本職にしている雨水秋春と申します」

「あ、どうも。ユーノ・スクライア、無限書庫の司書長をしています  
す」

へえこの人があの迷宮を整理した人か

整理されたおかげで事件の資料も探しやすくなったり今までチームを組んで探すような事を単独でも出来るようになった

・・・って創立から今の今まで整理する人が居なかったのかと突っ込んだら負けなのだろうか

「無限書庫の司書長ですか？それは凄いですね、あそこの整理はかなり労したでしょ？」

「あはは、元々そう言うのが得意だっただけですよ」

「ガウ！」

「ん、え？魔狼ですか？珍しいですね」

「物知りですね」

ま、あれだれ知識溢れる所に居れば当然なのか？

「あ、そう言えば今日は如何してヒューズ准尉と？」

「いえ、実は遺跡調査の人員を借りようと思ひまして」

「諜報部からですか？武装隊の調査チームの方が良いのでは・・・」

「遺跡自体は危険の無い物だと思われるのでトラップに詳しい諜報

部の方が奥まで入り込めるかと思ひまして」

「あゝなるほど」

確かに諜報部はそう言った裏工作に強いからな

騙し合い得意のメンバーみたいなものだしな、査察官って

「・・・あれ？雨水さんでしたよね？」

「そうですけど？」

「間違っていたらすみませんが、テストロツサ執務官とはお知り合いですか？」

「まあ・・・知り合いだな」

キヤロ経由だけど、もう十分俺の知り合いと言っても問題ない。の  
かな？

「やっぱり！話には聞いていました！実は僕、フェイトやなのはと  
幼馴染なんですよ！」

「ほおー、あの人達の交友関係はホント凄いな」

類は友を呼ぶと言うのか

凄いな、今度フェイトさんに知り合いで一番偉い人は？とか聞いてみるか

「あ、雨水。お前の次の仕事、その遺跡調査だから」

「・・・さて、ユーノ司書長。また今度、エリシアもまたな」

「はい、先生！」

出口まで全力ダッシュ

しかし目の前からピー・・・カチッと明らかに何かがロックされた音がして

「開かね〜！！！」

出口を塞がれた

「帰せ！遺跡調査なんてやっぱ調査隊にやらせるドアホ！」

「急に口が悪くなったな、お前さん。大体お前さんの目があれば古代遺跡程度の罠なんてないも同然だろ」



確かに観察眼で畏の情報を取りながら進めばトラップの位置が全て見えるんだから無いも同然なのかも知れんが

コイツは重要な事を忘れている

位置が分かるうが避けれる能力が無いと意味が無いと言うこと

つまりは次の場所にトラップがあると分かってもそれを解除する技術、回避する技術があつて初めて目が意味を持つ

「知るか！大体俺の身体能力知ってるだろ?!」

「あーその件なら解決だ」

ヒューズから手の平サイズの宝石を手渡される、怪しいので観察眼で見る

ロストロギア 宝石型の蒐集貯蓄タイプ 所持者ブースト系

「管理局員さーん！此处にロストロギア違法所持者が居まゝす！」

「現在所持してるのはお前さんだけだな」

「許可は取っているんだろっな」

「・・・先生、どうせパパは違法紛いですよ。聞くだけ無駄です」

だよー、査察官はその情報で階級を無視した命令と名の交渉が出来るからなー

恐い怖い

五十三話 side 雨水 (後書き)

蒐集型と言えば闇の書と似た感じのですね、そして一番怖い所は既に蒐集が完了していると言つところですよ。ヒューズが無駄に裏で頑張りました

五十四話 side 雨水

前回のあらすじ

ヒューズがユーノ司書長を連れてくる 気が合いそうな人だ 話しているとは唐突に遺跡調査が次の仕事と判明 全力で逃げようとするが失敗 仕方なく話を聞いた(多少抵抗はしたが)

古代ベルカが残した遺跡が海底に沈んでおり少し前にそれが発見されたらしい

「古代ベルカってさー、戦乱期でしょ？絶対単純な罠だけじゃないよ」

あー帰りてえ

トラップダイジェスト！

落とし穴

その下の針地獄

天井落下

水攻め

岩球

「やってられるかああああ!!」

走って岩球から逃げるなんてなんてベッタベタな

古代ベルカは戦乱時にかなりの技術進歩をしているはずだろ?! それとも一周回って原点回帰か!

「冷静に考えれば未調査って事はどうせロストログアが眠ってるってオチだな、だったら機動課に頼むべきだろ」

まああの司書長はそう言うのに弱そうだからホントに危険度の少ない遺跡だと思っただらろうな

何せレジャー施設建設予定でようやく発見された今まで無害の遺跡だったんだし

「いつそ、そのまま気付かずに工事しまえば良かったのに」

何時までも愚痴を言っていてもしようがないが・・・しかしせめて小隊くらいは欲しかったな!

その時、観察眼が敵性反応を捉える。切らなくて良かった安心情報だな

「ッ！」

それにしても何で生物が存在するんだ

しかも敵性を持てるとなると知性もある。海底に沈んだ遺跡には隔離結界みたいな魔法で水は入らなかったが外からの生物の進入は出来なかったはず

唯一入れる魔導師だって俺が始めての侵入者

「貯蓄開放、オプティックハイド、フェイク・シルエット」

ブースト系のロストログア、所持者にロストログアからの魔力配給と大きくは無いが魔法の補助もある

流石はオーバーテクノロジー。たった一つで情報量が多すぎて全部見ようなんて思えない

だが如何やら魔法補助に重きを向いている節がある

フェイク・シルエットに先行させ目視出来る距離で走る

「何だアレ」

人型・・・女性のようだ

電子ゴーグルのような物を付けて平然と徘徊している

数は三体程度なのだがどれも同じ顔している。体型も背丈も同じ、まるで人工物を匂わせる

「取り合えず行ってこい」

シルエットが近付いてみる

「貴方はイクスを知る者ですか」

斬られた

まさか質問されて答える前に殺られるとは思わなかった、周りの女性には口より手の人が多いが此処まで極端な人は始めてあった

我慢のがの字も知らんな

両腕の武装化、デバイスが無い所を見ると何かのスキルの可能性が高い

「おいおい・・・帰るか」

観察眼で相手を見る

屍兵器　マリアージュ　軍団兵　魔力ランクB

軍団・・・えーと、つまりは結構数が居るのか

「生命反応」

「やっべ！バレた、何でだ！貯蓄開放、クロスファイアシュート！」

すぐに幻術魔法を切って威力の低い魔力弾で弾幕を張る

蒐集貯蓄ロストロギアの在庫数は五つ

威力の高い大技用に一つ残すとして残り四つで対処するか

一つのロストロギアで射撃魔法なら十回、砲撃魔法なら五回、収束  
または儀式魔法なら一回  
と言った感じだ

「貴方はイクスを知る者ですか」

「戦力で魔力弾を斬るって・・・全く流石は古代ベルカ、容赦ねえ  
え」



遺跡を壊したらいけないので爆発系は無しにしてと、懐から拳銃を取り出して引き帰しながら背後に向けて撃つ

後ろからは銃弾を弾く音が聞こえる

「イクス」

「挟まれた！貯蓄開放、バスター！」

目の前からやってきたマリアージュなる固体五体に問答無用で砲撃魔法を放ち背を向け走る

やっぱり魔法は使えても威力が出ないか

瞬間砲撃一撃では倒れてくれそうも無いし、かと言ってチャージする程の余裕は無い

はぁーこれは軽く詰んだな

五十四話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

早い段階でのマリアージュ事件始動(遺跡内でのみ)

まだまだ雨水の六課入りが出来ずにキャロとは少しの間、お別れになりそうです

五十五話 side ヒューズ

ミッド諜報部室

今日は珍しくも外での仕事が無いので可愛い娘の入れたコーヒーの味を堪能していた

「雨水の奴、大丈夫かね」

「え？どう言う事？パパ」

ちなみに雨水を古代ベルカの海底遺跡に調査を行かせて恐らく丁度中間くらいに差し掛かる時間であろうタイミング

可愛いエリシアちゃんが小さめに言った独り言に反応する

「あーほら、一応魔法が使える状態とは言え雨水の奴は魔法使用に当然慣れてないからな」

「先生なら大丈夫です！私の先生なんですから！」

・・・エリシアちゃんが雨水に憧れや尊敬の念を抱いているのは知っているけど今回に限っては余りその理由じゃあ、とてもじゃないけど大丈夫とは言えないよな

「まーそれなら良いけどー・・・エリシアちゃん！敬語は止めてー！」

「公私は分けるべきだと私は先生から教わりました」

「教えた本人が公私を分けれてないと思うが・・・」

「ところでパパ」

「ん？なに？エリシアちゃん」

「あの海底遺跡はどれくらいの危険性があるんですか？」

「え？」

エリシアちゃんは真剣な表情で詰めより座っている俺の横に置いてある松葉杖を取る

「そう言えばもう一つ先生に教わりました」

「な、なにかな？」

「自分がこうだと決めたら正々堂々だろうと不正堂々だろうと貫け、そこで卑怯と言われても負け犬の遠吠えと思え。らしいですよ？」

負け犬の遠吠え・・・確か雨水の出身地方の諺だったか

まあ意味としては査察官からしたら理解できるんだけど・・・子供に教える事じゃねえよ

「パパの杖は私の手の中にあります。そして私には家で帰りを待つシロちゃんの為に先生の事を知る権利があります・・・吐いてくれるよね？パパ」

家庭教師を雨水に選んだのは失敗だった？

「・・・一応聞いて置くけれども何でエリシアちゃんはその遺跡に危険性があると思ったのかな？」

「古代ベルカと言えば戦乱期、そんな時代の遺跡に危険物が無いなんてまず有り得ません。私の推測では大方戦術か戦略兵器つてところですね」

「うんうん、エリシアちゃんの読み通り。あそこに眠ってるのは冥府の炎王と恐れられたイクスヴェリアと増殖兵器マリアージュだよ」

「はあ？！そんなの単独で調査する内容の任務じゃ」

「そうだね」

「ただ今回は単独で行ってもらわないといけない理由がある

もしかしたら次元犯罪者のジェイルスカリエッティの糸口かも知れないからね

「俺の予想だと局の上の方は怪しい・・・小隊を組むには報告の義務があるからそこから情報が漏れて証拠隠滅されかねない

「先生を迎えに行つてきます」

「もう遅いと思うな。それにエリシアちゃんの魔法は確かに強力だけど、それはあくまで一定条件を揃えた自分のテリトリー内での話だよな」

「・・・この事はスクライア司書長は知っていたんですか？」

「知らない、査察官は自分が持つ情報をそう簡単に漏らさない。常識だよ？見習いなら覚えておかないと」

「はあーエリシアちゃんのこんな悲しそうな顔は見たくないんだけどな

「・・・気分が悪いので早めに帰らせてもらいます。査察長官」

「許可する」

「俺は家族の笑顔を守る為に査察官になつたのに俺のせいで目の前の

家族が傷付いてるなんて皮肉すぎるだろ

ま、これも雨水を騙した罰かね・・・いや、今回に限っては利用したって言い換えた方が正確なのか？

五十五話 side ヒューズ (後書き)

雨水が仕返しをする前にエリシアから精神的ダメージをくらうヒューズ

自業自得ですけどね



五十六話 side 雨水

前回のあらすじ

海底遺跡侵入 数々の罠を潜り抜ける 敵と遭遇 奥に向かう方に  
三体、出口に向かう方に五体 奥を選ぶ 残り蒐集貯蓄ロストロギ  
ア五つ、一つはそろそろ魔力切れ

「全貯蓄開放！制御無視ショット！」

残りの貯蓄魔力で通路に向けて弾幕を張る。これで相手には魔力弾  
の壁が向かってきてきているように見えるはず

マリアージュ 燃烧液化

「ちょ！待って！貯蓄開放！オーバルプロテクション！」

自爆用のスキルまで持ってやがった

前方通路から暴熱と爆風が襲ってくる

三体自爆の防御で一気に貯蓄魔力が減ってしまった、即席で荒い術  
式の防御では魔力の消費が激しすぎた

帰りにはまだ五体以上居るのに

こうなったら奥地にあるロストロギアに賭けるか

現代的な機械に囲まれる中央に吸血鬼でも連想しそうな棺が一つ

人型か？まあどんな形であれ現状を打破出来るなら何でも良い

「全貯蓄開放、封時結界」

一つ丸々使った結界だ、これでマリアージュも一時は進入出来まい。  
これで残り三つ

「未調査って言う割には誰かが手を付けている感じがするんだが」

「ただど機材がどれも埃を被っているとと言う事は此処最近に使われていない」

「あのマリアージュが探していたのはこれだろうけど・・・遺跡まで来て見付けられないとはアイツらは方向音痴か虫並みの知能かコノヤ  
ロ」

「よし機材は生きてる」

パスワードは・・・

その辺に散らかった資料を探せばあるか？

パスワードをメモとかに残すタイプの人でありますように・・・

「冥府の炎王？また物騒な名前だな」

何だ、この神風特攻隊みたいなスキルの王様は

自爆持ちの軍団兵を敵地に送り込んで戦わせて死に掛けたら爆破するようしておく・・・嫌われていたって言うのも信じられるな

「お、発見発見」

如何やら神経質かつマメな人間なようだ

凄く事細かく書いてある

見ているとイライラしてきた

「文字ちっさ！コレ本当に手書きだろうな？！しかも文字が全部同

じ大きさだし！」

うぜえ、まーおかげで大体の事は分かった

「冥府の炎王イクスヴェリア、兵は集い操主は此処に・・・我は力を望む。三連貯蓄全開放！」

人型兵器・・・まあ十中八九ベルカ技術結晶のユニゾンデバイスとかなんだらうな

ロストロギア三つ分の魔力を吸い棺が開く

「ああ・・・また、目覚めさせてしまうのですね」

・・・え？

「うええええええ?!?!」

エリキヤロと同じくらいか?ってかよ、幼女?!あれ?兵器は?

「兵器!やっべー!マリアージュどうしよ!使えねえ」

「あ、あの」

「ああ、えーとお前は悪くない」

悪くはないがこれで難易度が上がってしまった

この幼女を連れながら脱出とは

にしても態々封印掛けて幼女を監禁とは流石うぜえ文字を書く奴だ

「聞いて下さい！」

「あ、はい」

幼女は放っておかれたせいか若干涙目である

昔のキャラ口を思い出すな・・・その経験は活かせそうにないがな

「あなたは何故、私を目覚めさせたのですか？」

「俺が逃げる為だ」

「は、い？逃げる？あ、あの一つ良いですか？」

「どうぞ」

「今は何時で此処は何処ですか？」

随分丁寧な話し方だな、親の教育が良いところ育つのか・・・ふむ

「いまは新暦七十五年で此処はミッド湾岸レジヤ―施設建設予定地、海底遺跡だ」

「操主はあなたですよね？」

「ああ、その棺を開けて中の兵器を取り出すキーワードだったからな」

「・・・兵器」

「あ！悪いお前が兵器とは言ってないよ？！俺も中身は知らなかったんだって」

「中身を知らない？」

何だか先程から微妙に話しが合わないのは何故だろうか？

「我らがイクス」

「ってもう結界の限界が近い?!」

しかも数が増えてるし！あー！帰ったらヒューズをシバく！！！！

五十六話 side 雨水 (後書き)

イクスヴェリアに関してですがドラマCDの際も殆ど登場して  
おらず自分としては深く性格を掴めていないので一番の原作性格崩壊キ  
ャラになると思います



五十七話 side 雨水

前回のあらすじ

マリアージュに終われつつ最奥に それっばいの発見 一発逆転を  
目指し封印解除 何故キャロより少し下くらいの幼女登場 マリア  
ージュが追いつきそう

封時結界はかなり頑丈だがマリアージュの奴ら、自爆攻撃で破壊し  
に掛かってきている

「おおー！マジやべえ！」

「大丈夫ですか？」

「お前は意外と落ち着いてるな?!」

「慣れてますので」

それはまた嫌な人生だな

こんな状況に俺は慣れたくは無い

しかし蒐集貯蓄ロストロギアの貯蓄魔力を全て使ってしまった以上  
は手元にある質量兵器で如何にかするしか無い

と言っても道中拳銃は殆ど使って弾の数ももう無いに近いし手榴弾

なんか使って天上降ってきたら悲惨な結果しか生まない

「あ！そっぴやお前、魔法とか使える？」

「魔法ですか？すみません、私は・・・」

「そかぁー、まあまだ魔法を習う年齢でも無いよな」

「いえ、私は見た目通りの年齢では有りません」

見た目通りの年齢じゃない？ま、それはあとで考えるところとして結果もかなり薄くなってきた

馬鹿みたいに自爆しやがって何体居るんだ

「あの・・・操主様」

「・・・ん？それは俺の事か？」

「え？先程あなたが操主と言いましたよね？」

「言った、ね。うん、言った」

「何故マリアージュ達に追われているのですか？」

何故か。何故だろう、探し物が一緒だからとかが一番良い所の理由

か・・・今更だけど中身は少女でしたって言ったら帰ってきてくれるかな？

でもマリアージュって命令を受けただけの兵器だしなー

「あれだよ、マリアージュも此処にあるはずの兵器を求めてたっばい。で、途中見つかったら行き成りアレ」

「いえ、そうではなく。何故操主なのに追われているのですか？」

「・・・え？」

「え？」

冥王、操主、軍団兵

あーっ！っ！っ！

「ちょ！そう言う事か！自己紹介をしよう！俺は雨水秋春！お前は  
」！

「イクス・・・イクスヴェリア。あなたが探している、冥府の炎王  
です」

「なるっほどー！」

これでマリアーヂュの全てが解決！

「イクス！」

「？」

「マリアーヂュへの命令の出し方を教えてくれ！」

「・・・嫌です」

まさかの伏兵だった

諦めたように悲しそうに裏切られたようにイクスは俺の申し出を断る

「お願い！此処に来る間に魔力も尽きちゃってさ」

「此処を抜けたあとは如何するのですか？マリアーヂュは単体で既に強力な兵器です、更に私はそのコアを無限に生産でき軍団を作る事が出来る、そして最後にはあなたはその操主です・・・再び問います、此処を抜けたあとは如何するのですか？貴方が操る法を知らないのであれば生み出すだけの私でも守れる平和があるかも知れません」

つまりは危険物なので渡せませんって事が

観察眼・・・と言いたいところだけど、一応これもロストログニア級

なんだろうしパツと見で理解できるとは思えない

「……言っじゃないか、ガレア王国で戦乱と残虐を好んだ邪知暴虐の冥王様」

「……。」

睨み合う

やっぱ、妙な誤解を受けてるな。そりゃ行き成り兵器貸して〜って言う奴に碌な奴は居ないだろうけど兎に角いまは状況打破したい

「それは私の望んだ事では有りません」

「望むと望まざると事実だ。それにお前も死にたくはないだろう？ さあ、力を貸してもらおうか」

「私はもう十分と生きましたし生きるには人を殺し過ぎました」

平行線を辿る会議ほど無駄なモノは無いつてそういやどっか聞いたなー

それに悪役調で話したせいであとに引けなくなってきたし……唯一助かった所と言えば善王と言う事か

マジで伝承通り悪王だったら交渉にもならないからな

五十七話 side 雨水 (後書き)

いまいち悪役が似合わないなーとか思ったりします (チンピラとかなら似合いそうだけど)

五十八話 side 雨水

前回のあらすじ

マリアージュが結界を壊さない内に脱出の為の作戦立て 逃げ道無し 幼女が冥王と判明 だけど操主としての力を渡す気無し 交渉しだいではいけると思うが時間が無い

整理するか

まずは目の前の幼女はこれで千年と存在している王様。屍兵器のマリアージュのコアを生産できて操主の事を知っている人物

誰かが調べた伝承では悪王だが事実は真逆らしい、誰かさんは調べてはいたが表面の事しか知らなかったようだ

415

「交渉をしよう、冥王」

「する気は有りません」

「まあそう言うな。もしこの場を抜けれたら操主の権限を渡す・・・なんて魅力的だろ？」

「・・・何を考えて」

「最初から俺はマリアージュから逃げて外に出る為にお前を呼び起こしたんだ、不思議でも無いだろう？」



イクスの視線が鋭く突き刺さる

小さくても王、威厳は有りか。こっちも特典スキルの統率力が無ければ圧倒されてたかも知れない

「その言葉に嘘偽りは有りませんか？」

「無いね、嘘なんて付く必要性が無い。それにお前は平和が好きだようだが俺も平和や平穩つてのは好きでね、いまの世の中の空の色を知っているか？」

「灰色じゃないのですか？」

定期的に目覚めているだろうけどやっぱり何処も戦場だったみたいだな、疑り深いのも納得がいく

「ふふ、正解は外で確認しようぜ」

「・・・分かりました、信じます。操主様」

「そついや今に思ったが何でお前、王様なのに命令権が別にあるんだ？」

「王は開戦の狼煙を上げる者ですが戦場で戦う者では有りません、故に指揮権や命令権は戦場の兵士や騎士に有ります。王は城で構え下の戦場をただ見守り殺しの罪を一手に担うしか出来ないのです」

・・・真面目だなー

今更にやっぱり王様なんだなーと思う

「さー！始めようか！」

「はい、宜しくお願いします」

「ずぶ濡れだな」

「ですね」

その後、マリージュを退ける事には成功したのだが初歩的な事を忘れていた

あの遺跡が海底だと言う事に・・・

死ぬかと思った、主にイクスが

俺はバリアジャケットのおかげで水圧等もある程度平気だし酸素ボンベも持ち運びタイプのせいぜい三十分も持たないのを所持していたから良かったがイクスはそれらの準備無し

苦労した

「報告は明日にするか」

シロはそう言えばエリシアに預けているんだっけ？ キャロも六課の女性寮だろうし今日は一人もしくはイクスとの二人か

「操主様」

「ん？ あーそうだったね・・・えーつとメンドイな、なるほど操主の力は本人の魔力と別の力で動いてるのか。流石オーバーテクノロジー」

渡すのはそれ程、難しくなかった。一定のキーワードさえ言えばあとは勝手にトンデモ魔法科学が如何にかしてくれる

管理局に報告したら歩くロストロギア認定だな

「約束は果たされました。では・・・」

「ちよつと待った、お前は何処にトンズラしようとしてる」

「トンズラ？ 逃げると言う意味でしたら、それは間違いです。私は静かに眠るだけです」

「何処で？まさか俺がお前をその辺で野垂れ死ぬのを許容するとは思ってないよな？」

「あなたには関係無いです。一時は協力しましたがこれまでです」

仕方ない、俺が放置したとかイチャモン付けられるのは嫌だし

「誘拐しよう」

「はい？」

「さあ帰ろう！」

「ちょ！降ろして！降ろして下さい！私は生きてはいけない存在なんです！」

「暴れるな。ただでさえ、こっちも濡れて体力無いんだから」

「だから！見捨ててくれて結構と・・・」

だからと言いたいののはこっちだ

濡れた状態で更に海底からの無理な脱出でかなり衰弱した幼女を放り出して帰ったとなったら管理局員とかの前に人間としてのモラルが問われるだろうが

ま、それでも誘拐は言い過ぎたか。この場合は、無理やり幼女を連れ出しているのだから・・・やっぱり誘拐だね

五十八話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

小さくても王様なイクスヴェリアです

五十九話 side 雨水

前回のあらすじ

脱出成功 二人してびしょ濡れ 取り合えず操主権を渡す 逃走前に捕獲 そのまま家に持ち帰る

持ち帰ったイクスを風呂に放り込みキャロの使っていた寝巻きを着せて、暫く目を放すとベランダに気分置いてあつた椅子に座つて空を眺めていた

哀愁漂う

「今の世の空はこんなにも綺麗なのですね」

「気に入った？」

「はい、とても」

さて、俺は報告書を作らないといけない訳だけど。なんとも微妙な体験をしてしまったからな！

全部マリアージュに罪を擦り付けて終わりにするか

あれだけ爆破したんだし奥に行くのも、もうかなり困難になつてるだろう・・・それに危険物は有つたが刺激を与えなければ安全なものって報告しておけば調査隊も恐らく出ないな

問題はヒューズだ、恐らくアイツは何か最初から知っていたはず・・・  
・はぁーエリシアに頼んで如何にかしてもらおうのが一番早いかな

「そろそろ冷えるぞ」

「まだ、駄目ですか？」

「別に今日しか見られない訳でも無いだろうが」

「・・・そうですね」

部屋はキャロの部屋を使ってもらう事にした

流石に同じ部屋と言うのも難だろうしな

突然目覚ましとは違うセンサー音で起こされた

深夜か・・・間違い無く何時もは寝ている時間だな

「はぁ〜」



予想は、一応していたけどやっぱり起こされるのは腹が立つ

俺は自分の部屋を出てすぐに玄関に向かう

そして靴を慣れない仕草で履こうとする少女を発見する

「何処に行く」

「ッ」

「だから……まあ良い。来い」

「あの！私は！」

どうせコイツは逃げようと思ったのでキャロの部屋に少し仕掛けさせてもらった

しかし近所迷惑と言う言葉と安眠妨害と言う言葉をジックリ教えよう……明日に……あー眠い

「今日は俺と一緒に寝る」

「え？え？」

「まあお前も早く何処かに行きたいのは分かるが何事にも順番があるんだよ……そう順番が」

有無を言わず自室に連れ込みベットに放る

多少乱暴な扱いやパジャマじゃないのは自分が起こした行動の結果  
と言つ事で大きく目を瞑ってもらおう

・・・眠いから物理的にも目を閉じてくれると有り難いが

「おやすみ」

「・・・おやすみなさいです」

「うっし！準備完了！」

局服を着込み仕事に行く支度を終える

「あの操主様」

「操主はもうお前だ」

「・・・名前を忘れました」

・・・やたら操主と呼ぶと思ったたらそれが理由かよ

「雨水秋春。まあ一回しか言ってないし、あんな状況なら忘れて仕方ないが・・・で何？」

「では秋春様」

「ちよつと待て」

「？」

秋春までは良いが様はいらんだろう

幼女に様付けで呼ばせているみたいな人に見えるじゃないか

「様はいらん」

「そうですか、では秋春様」

「おい」

「？」

「何故に様を付ける」

「なんとなくです」

「なんとなくなくか」

「はい」

もう良いや、誰かに突っ込まれたら生まれた地方の風習で年上には様付けするんですよーとか言っておこう

「あの」

「あ？あー質問しようとしてたね」

「はい。昨夜私が使った部屋は秋春様のお子様のですか？」

お子様ねー、子供が居る年に見えるのかな？・・・いやイクスは昔の人だし結婚年齢も早かったのか？んー価値観が違うと考えが読み辛いな

「いや、あの部屋は旅仲間の部屋だね。質問がそれだけなら出掛けろぞ」

「何処へですか？」

「俺の仕事場。一応お前を連れていかないといけないから、それに留守番させておいて帰ってきたら居ないとか有りそうだし」

脱走癖には困ったものだ

長い間、棺の中に居るとそうなるのか？

五十九話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

キャラは未だに旅仲間継続中(特に理由は無いですが)

六十話 side イクス

ガレア王国の君主で戦乱と残虐を好んだ邪知暴虐の王、それが私、冥府の炎王イクスヴェリア

私が望むと望まざると結果がそうなってしまった以上、そう言われなくても仕方ないだろうし否定するのも小門違いなのでしょう

「そこで少し待っててね」

雨水秋春、元操主にして私を目覚めさせた張本人

最初から不思議な方でしたが、いよいよ持って判断に困りました

「入っていいよ」

「分かりました、失礼致します」

私が緊張した面持ちで入るとそこには無精髭の男性と秋春様と似た服を着た少女、そして脇に少し変わった白い犬が居た

「間を割って俺が紹介しようかな、コイツらはマース・ヒューズにエリシア・ヒューズ、聞いた通り親子な？そしてシロ。でこっちはイクス、さっき説明した通りまあ今度から俺の娘になる」

「・・・はい？あの秋春様？」

今何ですと？俺の娘になる？少し待って下さい

言っている意味が分かりません

「お前の保護責任者が居なくてね、当然だろ？千年前の人物だし、で話し合った結果、俺が保護責任者になる事になった・・・まあ最大の理由はまさか三等陸士の娘が冥王なんて誰も考えないだろうって作戦」

「ですが、しかし、私は」

「はい、ストップ。此処で言い合いになっても仕方ないから直球に、イクスは俺と親子になるのは嫌か？」

「そんなの・・・」

そんなの、考えた事も有りません。家族なんて無縁でしたし無縁で居るつもりでした。王は何時だって孤独です

ですが目の前にそれがあつて

暖かい物だと知っていて

自分が欲している物だと自分でも分かっています



・・・手を伸ばせば届くと言つ甘い誘惑が私を誘つ  
酷いじゃないですか

「ひゅっ」

「泣かせたな」

「俺が悪いのか?!」

「パパ！空気を壊す事を言わない！」

「すみません、少し・・・少しだけで良いので弱い私を見なかった  
事にして下さい」

それからわたくしは見つとも無く泣いた

王である自分を洗い流すみたいに気付けば秋春様に子供の様に抱か  
れていた

泣き疲れた私は眠ってしまっていたのか起きると秋春様の家のベッ  
トでした

「ガウ！」

「あなたはあの部屋に居た」

「ガウウ」

変わった白い犬は私の頬を舐めると扉から出て行く

「痛って！痛いって噛み付かなくとも行くって！」

部屋の外からそんな楽しげな声が聞こえたと思うと秋春様が入ってきた

「目覚めは？」

「悪くは無いです」

「そりゃ結構。さっきも紹介したがこいつはシロ、魔狼な？犬じゃないぞ？」

狼、ああ、それで犬にしては変わってると思ったのですね

「文献通りそっちにお前の所の民族衣装を作ってもらったから、そ

れを着れば良いよ。やっぱり慣れていて落ち着ける服が一番だもんな」

「有難う御座います」

「しかしお前の所の民族衣装ってチャイナみたいだよな」

「ちやいな？ですか」

「うん、まあ如何でも良い事か。夜飯にするから着替えてリビング  
に来てね」

「はい」

私はこれから王としてでは無く雨水秋春の娘として普通の家族にな  
れるのでしょうか

いや、普通でなくても良い

ただこの家族を維持できれば良い、どんな手を使ってでも・・・

そう、その為の私、その為の力

秋春様が非力と嘆くならば私が兵器らしく秋春様の武器になる

・・・でも、まずは父と呼ぶ練習をした方が良いでしょうね

六十話 side イクス (後書き)

家族と言うイクスが今まで手に入らなかったモノを与えられ妙な方向にイクスが走る感じになりました

六十一話 side 雨水

前回のあらすじ

イクスが泣いて眠った後にヒューズと交渉 半ばエリシアと一緒に脅し掛けて成立 イクスが今後ロストログアとして再度封印されないようにする事を成功 局入り又は局の為になる事をすると言う条件付きだったがあま良しとしよう

幸い被害は俺だけだったので残り罪は百年単位前の時効のモノばかり  
まあ本人の意思しただがこの後何もしなければ単なる冥王だった少女（幼女と言ったら訂正を求められた）

「すみません、待ちましたか？ユーノ司書長」

「いえ、僕も来たばかりですよ」

「敬語は無しですって貴方が上なんですから」

「だったら雨水も」

お馴染みになった喫茶店

ユーノ司書長に呼ばれたので出向くとそこで紅茶を飲みながら待っていた

紅茶似合うなこの人・・・さわやかイケメン？

「冥王の子は？」

「シロと一緒に留守番。あいつの脱走癖には困ったもんだがシロが一緒だからな、いざとなったら人化で抑えられる」

「なるほどね」

「それで今日は？」

ユ一ノ司書長は一度黙ると頭を下げる

驚いた

そして多少は周りの目を気にして欲しい、注目度抜群だな

「ごめん！あの遺跡がかなり危険な場所だったのに僕のせいだ」

「あーその事ね」

「うん、本当に。もしかしたら死んでたかも知れないくらい危険だった」

「まあね、でもそこまで気にしないで下さい」

「だって」

真面目な人だなー

ある意味ではヒューズくらい軽かったら色々と楽なのに

いや、あれは度が過ぎるな

足して二で割ったくらい丁度良いんだろうな

「結果的には美少女の娘が出来た訳ですし皆が聞いたら羨ましがる状況でしたって」

「・・・ポジティブなんだね」

「まあ切り捨て上等の下っ端なんて皆こんなもんですよ」

ユーノ司書長は苦笑いをしながらチケットらしき物を懐から取り出す

「会員制のロストロギアオークション。今度僕が解説を任されたんだけど暇だったら見に来て、もしかしたら役に立つのもあるかも知れないから」

「ロストロギアのオークションか」

俺としてはあの蒐集貯蓄のロストロギアが欲しい所だけど似た様な

のが出るか？

まあオークションに掛けられる程度のランクの物だから実戦向けの期待は余り出来ない

「ありがたく・・・ホテルアグスタ？」

「うん、結構大きくて豪華な所だったよ」

「金持ちや御偉いさんが集まりそうだな」

「確かに民間の人は居ないかもね」

ペットは流石に駄目だろうから、またシロは留守番だな。人化の維持時間は延びてるけどまだ十分単位だし

三名まで

キャラもエリオも忙しいだろうからエリシアとイクスでも誘うか

エリシアは兎も角としてイクスは興味あるかな？

「あ、そだ、頼みたい事が出来ただけど良いか？」

「ん？僕に出来る事だったら」

「古代ベルカ式の魔法文献を片っ端から貸して欲しいんだ。閲覧許



可ってやつ?」

「古代ベルカ?イクスヴェリア関係?」

「まあ一応。アイツの武器はマリアージュだけだけど、あれはモロに殺し専門だから物騒過ぎる。普通に魔法を教えようと思って」

「分かったよ、責任持って無限書庫にある全ての文献を閲覧出来るようにしておく」

古代ベルカの資料は少ないからな、無限書庫のを閲覧出来るならかなり幅が広がるぜ

六十一話 side 雨水 (後書き)

ようやく六課と絡めそうです

六十二話 side 雨水

前回のあらすじ

ユーノ司書長と会う お馴染みの喫茶店 ロストロギアオークションのチケットをもらう まあ勉強になるかと思いいエリシアとイクスを連れて行く事に決定

何時もとは違い黒いスーツを着込みエリシアとイクスもそれっぽいドレスを着ている

一応プライベートの為、警備と混ざらないように局服以外にした結果だ

「パスをお見せ下さい」

「はい」

「・・・ユーノ・スクライア先生の招待ですね。確認致しました、今日はお楽しみ下さい」

にしてもやっぱりテレビで見た事あるような著名人も来てるな

警備担当は荷が重いだろっな・・・ご愁傷様つと

「先生、今更ですけどロストロギアを転売って有りなんですか？」

「まあロストロギアも千差万別、色々とあるからねえ。例えば永遠と綺麗な虹を描くだけの物とかあるけど危険でも何でも無いでしょ？」

「確かに」

カイゼルファルベ、聖王の象徴たる魔力光の虹色を永遠と描く宗教上の芸術品みたいな奴だったか

ロストロギアたる理由は確かエネルギー精製が解析不明だったからとかだったか

「あれ？雨水さん？」

「あん？人違いだと思っが・・・」

「あ、やっぱり雨水さんだ」

綺麗なドレスで身を包んでいるフェイトさん

あれー？フェイトさんってこう言ったオークションに来る人だったけ？

「久しぶりですね」

フェイトさんが笑って近付いて来ると同時にイクスがさつと俺の後ろに隠れた

まるで小動物のよう・・・っておい、王のカリスマは何処にいった

「あれ？その子は？」

「ああ、紹介しますね」

「始めましてテストロッサ執務官殿、私はエリシア・ヒューズ査察官見習いであります！」

「始めまして・・・えと、きみは？」

「イクス、ヴェリア」

古代ベルカに詳しい人ならすぐに気付く名前だけどフェイトさんはそうじゃなかったらしい、すぐに笑顔で二人と握手する

「フェイトさんもオークションに？」

「あ、いえ、今日は六課が警備担当なんですよ。六課が追っている敵が誤認して此方のロストログアを襲う可能性があるのです」

「ガジェットですか？最近増えているそうですね」

「はい、これから本格的に増えると思いますよ」

マジカー、面倒だなー。下っ端まで処理が回ってこなければ良いけど

「ん？六課って事はキャロも来てる？」

「はい、総メンバーで来てますから」

「そっか、なら帰りに少し顔出しくらいはしておくか」

「うん！うん！キャロもきつと喜ぶよ！」

この人、子供の事となると自分事よりテンション高くなるなー

流石過保護な人だ

「先生、先生はテストロッサ執務官と親しいのですか？」

「まあー知り合いの知り合いでね」

「普通に知り合いで良いと思うなあー」

いや、思つなあーって言われましても

「静かだな、イクス」

「私は人見知りなんです」

お前の視線は人見知りのそれと言うより何か警戒や疑いを持った感じだぞ

ほら、フェイトさんが自分が悪かったのかってオロオロしてるじゃないか

「えと、その、よろしくね？」

「はい、宜しくお願いします」

「……えーイクスヴェリアちゃんは雨水さんとは如何いった関係なのかな？親戚の子とか？」

「親子です」

「……ふえ？親子？」

え？こつちを見ます？……まあこつちだよな

「少し前に俺が引き取った子なんですよ」

「あゝ、そうなんだ」

「そうなんです」

あ、そだ。キャ口達にもイクス達を紹介しないとな



六十二話〜side 雨水〜(後書き)

今回は戦闘に参加と言ふ事は無さそうです

六十三話 side 雨水

前回のあらすじ

ホテルアグスタ到着 オークションが始まるまで散策 フェイトさんと出会う 六課全員来ているらしい 帰りにでもキャロに会おうかと思う

「あれ？雨水さん」

「あーそうですね、六課と言う事は当然貴方も居ますよね」

「え？なに？」

「いえ、お久しぶりです」

今度は高町一尉ですか

苦手なんだよね、色々・・・嫌いではないんだけど、ってイクスはまたか

「・・・おい、いい加減人が現れる度に俺の背後に潜むのは止める」

「人見知りなので」

「お前、それを言えば色々通じると思っていないだろうな？」

ま、無理には引っ張り出さないけどさ

「お話中みただけど良いかな？始めまして高町なのはです」

「始めまして高町一等空尉、私はエリシア・ヒューズ査察官見習い  
であります！」

「うん、始めまして」

「イクス、ヴェリア」

「イクス？あれ？何処かで・・・」

「・・・。」

高町一尉の記憶に何か引っ掛かったようだ

イクス！睨まないで！後々面倒だから！

「あ、ごめんね。良い名前だね」

「・・・良い、名前ですか」

「？」

「ああー、この子はこの間俺が引き取った子で俺の娘なんですよ」

「あ、そうなの！へー雨水さんが、うん、ぴったりだよ！」

ピッタリなのか？ま、自分では分からない事かもだから下手に否定も肯定もしないけどね

はあーイクスは完全に警戒心を高めていつてるしエリシア頼りだな

「あれー？なのはちゃん、どしたー？」

「あ、はやてちゃん！」

はやて？八神はやて二佐か、確か六課の部隊長だったな。挨拶くらいは必要だよな

「ん？こちらさんは？」

「えっと雨水さんにエリシアちゃんにイクスちゃん」

「へーこの人が雨水さんなんや」

また良からぬ噂でも流れているのか

局の方でも俺の名前までは噂にはなってなかったけど、それらしき

話がちらほらあったからな

「始めまして、六課部隊長の八神はやてです」

「どうも、雨水秋春です。キャロが何時もお世話になってますね」

「いや、ほんまキャロちゃん優秀で助かります・・・エリキャロ二人の魔法は雨水さんが教えたそうやん？」

「ん？教えたつて程じゃありませんよ」

「そういや来る途中に見ましたけど先生って呼ばれてましたな？」

・・・あれ？流れが何か変だ

八神二佐とは初対面だと思っただが局の何処かで会っていたか？

「まあバイト感覚で少し講師を受け持った事もあるので」

「ほお、そうなんや」

「そうなんです」

バイト感覚と言ったら少し教えられる生徒側に失礼なモノを感じないでもないが基礎知識ばかりだし良いかな

「先生、そろそろですよ」

「あ、マジ？すみません、そろそろ始まるらしいんで。これで」

「そやな、うち等も配置に付かな。また会いましょ」

「ええ」

「またね、雨水さん。エリシアちゃんとイクスちゃんもまたね」

「はい、高町一尉、八神二佐」

「また次の機会に」

しかし今に思えば高町一尉がイクスの紹介をしてくれて良かったな、イクス本人にさせたらイクスヴェリアって言っちゃうし確か八神二佐は古代ベルカ式、気付く可能性が大だった

「それにしてもイクス。俺と始めて会った時はもっと王たる構えって感じだったよな？」

「私は既に秋春様の娘です、王の罪は捨てずとも王の称は捨てました」

「……だからってそう変わるもんなのか」

女心と秋の空・・・使い方としてはあってるか？

六十三話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

はやての勧誘する気満々みたいな感じを少し出してみました



六十四話 side 雨水

前回のあらすじ

高町一尉と遭遇 イクス隠れる 八神二佐が合流 イクスの警戒心が妙に上がる 話も終わり二人と別れ理由を聞く イクスなりに理由あり 仕方が無いので時間に解決を任せよう

ロストログアオークション。やはり転売できるレベルの物なので大したモノはなかった

「先生から見て今の所で目ぼしいのは有りますか？」

「いや無いな」

骨董品価値としては高いだろうしコレクションとしては申し分ないのだからけど求める物は今の所は無し

「秋春様！秋春様！アレを！」

「イクス。周りの人に迷惑だろ、すみません、珍しい物ばかりでハシャイでいるみたいで」

「……小さく言えば良いのですね？アレ見て下さい」

「あん？」

イクスの視線の先にはポニーテールの女性が立っている。立ち位置的には警備の人、つまりは六課メンバーの誰かなのだろう

流石に室内ではデバイス機動はしてないか

「あれが如何した」

「私はあの人を知っています」

「マジ？」

「本当です」

早速バレる危険が出てきたって訳か

しかしイクスが知っている人間って・・・

「あの方は闇の書の守護騎士、確か戦場では烈火の将と名乗っていたはずですよ」

「ふーん、名前で大体の使う魔法特定出来るけど」

観察眼のスイッチを入れる

守護騎士プログラム 剣の騎士 ヴォルケンリッター 烈火の将シグナム 炎熱操作

ま、これだけ分かれば十分か。プログラム体か一種の使い魔と考えて問題ないんだろうけどやっぱり古代ベルカの技術力は凄いな

「敵意は無さそうだし、木を隠すなら森。これだけ人が居れば気付かないよ」

「そうでしょうか？」

「そうだ」

全く、エリシアはかなり興味津々にあの使えなさそうなロストログアを見ているのにイクスは気が気でないらしい

「だけど・・・今ならマリアージュで」

よし！この子には早々に魔法を覚えさせよう！しかも自分で使うのを嫌がっていたマリアージュを何故か使う気満々なんですけど？！  
因縁でもお有りですか！

まあ戦場での知り合いに何の因縁も無い方が逆に可笑しいのかも知れないがな

「まったく、お前は。時代が違うしアレもお前を覚えてるとは限らないだろ、何百年経つてると思ってるんだ」

「しかし秋春様、私は折角手に入れた家族を」

「なら余計に自分の力に責任を持って。力を使う前には昔の自分を思い出せ、王の称は捨ててもお前が王として生まれたのには変わりない」

「……すみません」

ホントに出会った当初のイクスに戻ってくれば楽なんだが

棺で何百と眠れば再度眠らされる恐怖でも出てくるのかね

イクスヴェリアの現状維持に対する想いは強過ぎる

まあ仮にも王族、血統は文句無い潜在魔力も十分、鍛えればストライクアーツの類も難なく取得するはず

きつと将来はマリアージュなんてモノに頼らずとも十分な力を使えるようになる

ふむ、そう思うと少し育てるのが楽しみに成らなくも無いな

さて如何いうタイプの魔導師にするか

六十四話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

原作イクスとは違って家族を維持する為ならどんな方法でも使います  
うになります

六十五話 side 雨水

前回のあらすじ

オークションの途中にイクス知り合い発見 物騒な言葉を呟く 落ち着かせる 早々に魔法を教える事に決定

オークションが終わり警備担当に顔を出しに行った

「秋兄さん!？」

「え?本当、雨水さんだ!」

「よ、久しぶり」

うんうん、二人とも元気そうだねー

「あー!あの時の!!」

「ん?あ、スバル生徒。お前も六課メンバーなのか」

スバル生徒は急ブレーキが出来るか不安になりそうな勢いで走って近付いてくる

エリシアは思わず横に避難しイクスに至っては俺を押し出そうとし

やがった

楯代わりかコノヤロー

一瞬かなり焦ったぞ

「スバル生徒って事はパートナーはやっぱりティアナ生徒か」

「あ……ティアナは……」

「あん？ティアナ生徒であってるよな？」

「え、はい」

「ふ~~~~ん」

そりゃ名コンビだ、高町一尉とでもハンデさえあれば善戦が可能だ  
ろっな

「キャラ達が世話になってる」

「ぜんぜんです！キャラもエリオも二人とも良い子です！」

「そっか、ティアナ生徒は居ないのか？」

「あ……はい」

別配置か？一気に全員に紹介したかったんだがまあ良いか

「まず三人ともが気になつてゐるだろうから紹介すると、こっちはエリシア・ヒューズ。キャロはヒューズ知つてゐるだろ？その娘・・・で、問題はこっちだがイクス・・・んー訳ありだからただのイクスで、俺の娘だ」

「「「・・・ん？」「」」

部隊長に情報漏れすると面倒だからな

高町一尉やその他何人かに言つちやっただけどコイツらに訳有りつて言つておけば如何にかなるか

「・・・おーい、聞いてるか？」

そんなに突飛な事を言つたつもりは無かつたんだが

皆で揃つて思考停止してる

「帰ろうか。イクス、エリシア」

「ちよつと雨水さん?!今とつつても聞き捨てならない言葉が聞こえたんですが?!」



「一番はキャラか」

「そんなの如何でも良いです！え？なに？！娘？！相手は誰ですか」

近ツ！異常に近い！って言うか襟を閉めるな、首が絞まる

「秋春様？！あなた！何を。王が出陣の合図をつげ」

「てい」

「あ、ほう、いひゃい」

危ない危ない、また維持衝動でマリアージュコアを生産しようとし  
やがった

・・・舌を少し噛んだな

「秋春、様？・・・私でもまだ苗字なのに」

「・・・えと何で二人は険悪モードになってんだよ」

「雨水さん！」

「秋春様」

はあーそっちでは復活したその他二名がエリシアと楽しそうに話しているのに何故こちらは修羅場のような展開になっているんだ？

そもそも原因が分からん

性格的には二人とも大人しい部類に入るのに・・・あ、これが同属嫌悪って奴か？

「さて、帰るか」

「なにサラッと逃げようとしているんですか」

「いや、俺、ユーノ司書長に用事があったさ」

「なら早く答えて下さい、この子の母親は誰なんですか」

「母親？えっと・・・誰なの？」

「昔のと言う意味でしたらもう答える意味が無いので省きますけど今は秋春様がたった一人の家族です。父は居ても母は居ません」

・・・あ

そうだ、引き取った子供って言うのを忘れてた

「そうそう、イクスの言葉で思い出したがイクスは引き取った子供で別に俺の本当の子供って訳じゃないぞ？」

「はえ？あ、そう、なんですか」

「そうそう」

「何だか勘違いがあったようですが、ルシエさんでしたか？今に思えば秋春様の家のあの部屋はあなたのですね？」

「あ、たぶん」

仲直り出来たみたい？出来た事にしておこう

「今度、六課に遊びに行くよ」

「ホントですか？！約束ですよ！」

「キャラが世話になってるからな、差し入れくらいは持っていきさ」

何時もの喫茶店でケーキでも買って行けばいいか

六十五話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

イクスはキャラコが現在自分の使っている部屋の元住人と分かり正しく雨水の旅仲間と認識

六十六話 side 雨水

前回のあらすじ

警備終わりのキャロ達発見 話し掛けるとスバル生徒発見 ティア  
ナ生徒も居るらしい イクスを紹介した瞬間に皆さんポカン キャ  
ロが復活して動揺しながら詰め寄られる イクスがそれを止めに入  
る 険悪モード 最後には誤解も解けて一件落着

「あーねむっ」

何時もの休日、イクスは現在エプロン姿で料理に取り組んでいる

料理と言っても朝ご飯なので大したモノでは無い

大したモノでは無い・・・大事な事なので二回明記しておこう

ちなみに理由は少しでも恩返しがしたいとか何とか・・・だったよ  
うな気がする

朝から言われたから正直話半分くらいにしか聞いてない

「おいおい、何で煙立ってるんだ。換気扇回して」

「換気扇ですか？」

「おい！何故よじ登る？！手で回せる訳ねえだろ！」

「？」

純粹に疑問を持った時の表情

どうやらイクスは昔と似たりよつたりの物や戦闘系の物は使いこなせるのだが日常や目新しいのは全く駄目駄目なようだった

「あの、ナイフとフォークは」

「俺は箸派なの」

「箸？この二つの細い棒の事でしょうか？」

「そう」

イクスはこれで食べれるのかと仕切りに聞いてきながらも配膳を終える

洋食派な為か和食の配膳が全く分からないようで結構四苦八苦していた

まあ俺も味噌汁を右に置くか左に置くかで迷うようなマナーの持ち主なので聞かれてもかなり困ったりするんだが

・・・んゝこれであってるはずだよな

「そうか、お前は料理が駄目な人なのか」

「失礼ですね、とても美味しそうではありませんか」

「うん、新鮮で美味しそうなサラダだね」

今朝収穫されたんじゃないかと思うくらい新鮮だなー

さて火を使わずただ水で流しただけでも料理と言えるのだろうか

サラダと言う一つの料理が完成している以上はそれも料理だと言いきれば料理として認めざる得ないのだろうか

「わん！私もガンバって作ってみたよっ！」

イクスに感化されシロまで料理

スクランブルエッグ

見た目はふわふわみたいだし美味しそう

「シロ、お前は料理が出来る人だったんだな」

「キャラコが作ったの真似した〜！」

うんうん、下手にアレンジを加えるくらいならそれが一番良いよな  
しかしシロが料理出来るなら安心だな。料理時間くらいは人化でき  
るだろうし留守番の時はシロに料理当番の全てを任せるか

「偉い偉い」

「えへへえ〜」

「・・・あ、秋春様あ」

「俺さ、結果が全てだとハッキリ言えるタイプなんだ」

「そうですか・・・はう」

キャラとは違って普通に落ち込むな

これはこれでキャラと違った可愛さがある

例えるならキャラは撫でたくなる可愛さでイクスは抱き着きたくなる可愛さか

「あはは、まあ確かにその頑張りも嘘じゃないしな。お前も頑張ったよ」



「……。」

イクスは自分の頭に置かれた手をジッと見ている

喜んでいるのか驚いているのか

複雑な表情が上手い奴だ

「ところで、あの……。」

「あん？」

「この棒……いえ、箸の使い方が分かりません」

「あーそうだよね」

講師の才は日常生活の教えにも有効かな？

「確か、こう持ってだな」

「あの、秋春様の持ち方と違うのは何故ですか？」

「俺の持ち方は正しい持ち方じゃないんだよ」

こういうのは大人になるともう遅いよな

いや、実際正しく箸を持っている人がどれだけ居るだろうか

んー今度気にしながら見てみるか

六十六話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

まあ普通に王様ですから家事スキルは低いです

六十七話 side 雨水

前回のあらすじ

何時もの休日 イクスが料理下手と発覚 シロが料理上手と発覚  
箸の持ち方って今に思えば結構みんな独自だよな

数日後、ホテルアグスタの約束通りに六課に来ていた

「ところでエリシア君、俺はこの場にキミが居る理由を小一時間は  
問い詰めたいのだが？」

思わず似非丁寧語になってしまつのも無理は無いと思う

到着したらタイミング良く後ろのタクシーが停まりエリシアが申し  
訳なさそうに登場したからだ

・・・明らかに俺の到着時間と合わせて図っていたな

「先生、アレですよ。また・・・馬鹿パパです」

「はあ、折角イクスを留守番にさせて来たのに」

まあ正確には留守番では無くシロの爪切りに付き合せている、偶に  
は専門の人にそう言うのをしてもらつのも良いだろうって事で

それに今日は如何も嫌な予感が朝からしているので一人で来た方が  
良いと思った

「ま、仕方ないか。さっさと行ってさっさと帰るか」

「あ、先生、今日の朝の占い見ました？」

「ああ、最下位だった」

しかも五チャンネル中、四チャンネルが俺の運勢が悪いと抜かしや  
がった

恐らくイクスが付いて行くと言ったものこれが半分くらい原因だ

「大丈夫ですよ、先生、占いなんて大体皆が当て嵌まる事を言っ  
ているだけですから」

予知系のレアスキルを使わない限りな

だが如何だろうな「今日、知り合いの仕事場に行く人！気をつけて  
下さいね、そこは喧騒の中ですよ！」なんて明るく言いやがった  
からマジで六課行きは次の休みにしようかとする直前まで考えた

「一応事前には伝えているから普通に表から入るか・・・どうも」

「はいはい、少し待って下さいね」

「おう」

「・・・遅れてすみませんね、人手不足で。如何しました？」

「連絡を入れていた雨水です」

「えっと・・・有りました！雨水さんですね、パスは此方です。無くさないで下さいね。あ、お嬢さんにも」

俺らはパスを受け取って予め聞いていた訓練場に向かう

確か最新システムを導入した演習だとか、期待の度合いが伺えるな

やっぱり設備には金を掛けないとな

着いてみると既に模擬戦らしき事が始まっていた

「スバル生徒とティアナ生徒か」

「相手は高町一尉。負けるのは当たり前ですけど何処まで善戦出来るかですね」

「巻き込まれないようにしながら他のメンバーを探すかどうせ上に居るだろうからな」

ビル市街のホログラムか、最新っただけあつて質感もリアルだな。実際に触れたりも出来るし中も結構再現されてる

「あのティアナって人、かなりコントロールが甘いですね」

「えー？ティアナ生徒は精密タイプだったはずだけど」

数じゃなくて質で勝負をするタイプだと思っていたんだけど・・・うん、確かに甘いな

数を揃えてもあれじゃ動く必要も無くかわせる

それにしても、だ。どうも訓練で模擬戦をしているにしては両者の雰囲気可笑しい

まるで実戦みたいだ

それはまあ実戦を想定していないと、いけないんだろうけどティアナ生徒達には何だか心のゆとりが見受けられない

「エリシア、これは仕掛けておいた方が良いかも」

「仕掛け、ですか？誰かと戦闘になるんですか？」

「雲行きが怪しいんでね」

偶にあるんだよねー、この状況

模擬戦で生徒が想いの他に強くて段々歯止めが利かなくなってきたマジになっちゃう教官

その状況とは言わないけど似た空気を感じる

「高町一尉との相性は正直悪いけど仕込みさえすれば大丈夫でしょ」

「あはっ、先生が教えた私だけの魔法ですよ？誰にだって負けませんよっ！」

そりゃ結構だ。望んではないけど、もしその時は存分に頭を冷やしてもらおうかな。高町一尉



六十七話 side 雨水 (後書き)

たぶん次回はとうとう「ストライカーズと言えば!」と言えるあの  
場面です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0284x/>

---

高校生のリリカル爆走

2011年11月29日00時14分発行